

令和3年度

NIE実践報告書

Newspaper in Education

第33号

教育に新聞を

宮城県NIE委員会

宮城県N I E委員会実践報告書

<第33号>

==== 目 次 =====

I あいさつ

宮城県N I E委員会	会 長 長澤 裕司	1
宮城県N I E推進委員会	委員長 森 直	2

II 寄稿

宮城県N I E委員会	副会長 佐藤 克弘	3
-------------	-----------	---

III 宮城県NIE研究大会の報告

(1) 日程と内容	4
(2) 研究大会報告（オンライン開催）	5
・開会行事	
・児童・生徒による意見交換会	
・講評	

IV 実践指定校の実践報告

(1) 仙台市立大沢小学校	14
(2) 東松島市立矢本東小学校	16
(3) 石巻市立湊小学校	18
(4) 松島町立松島第二小学校	22
(5) 仙台市立東仙台小学校	28
(6) 利府町立利府西中学校	32
(7) 栗原市立栗原西中学校	34
(8) 角田市立角田中学校	36
(9) 大崎市立岩出山中学校	40
(10) 宮城県仙台第三高等学校	44
(11) 宮城県泉高等学校	46
(12) 仙台城南高等学校	50

V	第26回NIE全国大会（札幌）「新しい学びを創るNIE ー家庭，教室，地域を結ぶー」	
	(1) パネルディスカッション	56
	パネリスト	
	内山 佳奈氏（美唄市 アスパラ農家）	
	古畑 理絵氏（札幌藻岩高校教諭）	
	為国 結菜氏（札幌藻岩高校2年）	
	浜田 亮太氏（札幌藻岩高校2年）	
	鈴木 翼氏（別海町漁業）	
	鈴木 桃子氏（別海町スクールサポートスタッフ）	
	田中 賢介氏（学校法人田中学園理事長 元北海道日本ハムファイターズ選手）	
	司会：松本 裕子氏（フリーアナウンサー，医療キャスター）	
	(2) 記念講演 演題「歴史と出会う ー新聞という回路」 講師 梯 久美子氏	62
	(3) 授業紹介①	68
	授業紹介②	69
VI	研修会報告	
	(1) 高校部会報告 高校部会長 仙台城南高等学校 教諭 鈴木 理恵	70
	(2) 地区研修会報告（東松島市立矢本東小学校）	71
VII	研究組織	
	(1) 宮城県NIE委員会会則	72
	(2) 宮城県NIE推進委員会会則	73
	(3) 宮城県NIE委員会及び宮城県NIE推進委員会の構成	74
VIII	宮城県NIEの歩み	76
IX	編集後記	80

I あいさつ



今後の活動の充実を願って

宮城県N I E委員会

会 長 長 澤 裕 司

(名取市立増田中学校長)

私がこどもの頃、我が家の流儀だったのでしょ
うか、全国紙、地方紙、その他数社の新聞が
毎日届いていたのを覚えています。各社が編集
した新聞のトップニュースや見出しを読み比
べながら、スクラップして自由研究したことも
ありました。また、学生の頃の記憶ですが、電
車内の風景は多くの人々が新聞に目を通し、周
りの人に迷惑をかけないように小さく折りたた
んで読む姿を懐かしく思います。まさに、新聞
が情報源の主流だった時代から現在は、スマホ
をはじめとした機器を通して簡単に情報が手
に入るばかりではなく、発信できるようになり
ました。こうした激動の時代の中、新聞を購読
している家庭が少なくなり、スマホなどのイン
ターネットを通して、簡単な見出しのみで、中
身をしっかり把握することなく、自分の興味
のある出来事しかわからない児童生徒が増えて
いることも事実です。また、ネットで流れるニ
ュースは、新聞記者が取材によって得られた情
報が基になっていることも知らない人がほと
んどではないでしょうか。こうしたデジタル社
会が一層浸透する中、アンデシュ・ハンセン氏
はその著書「スマホ脳」で、人間の健康への悪影
響等について警鐘を鳴らしています。

そんな今だからこそ新聞紙面を読むことを
通して、社会で起こっているできごとを丁寧
に知ることや、時間をかけて考えるという環境
が大切になってくると考えます。また、教育に
関しては、新学習指導要領でも大切にすること
としている「主体的・対話的で深い学び」の実
現に向けた授業改善につながるものと考えてい
ます。

さて、本年度の宮城県N I E研究大会は、1
2月9日、河北新報社を拠点にオンラインで開
催され、県内の小学校・中学校・高等学校計8

校が実践発表を行いました。開会行事の後、ビ
デオ会議アプリを活用し、2つのグループに分
かれて各校の特色ある活動を紹介しあい、意見
交換も行いました。

私は、第2分科会に参加し、仙台城南高校、
泉高校、岩出山中学校、湊小学校の実践を聞か
せていただきました。「職員室前にN I Eコー
ナーを設置」、「各社新聞の読み比べ」、「新聞・
投書リレー」、「N I E川柳」、「朝のN I Eタイ
ム」、「新聞社のデータベース活用」等々、どの学
校も特色ある活動を実践しており、新聞という
媒体が教育に大いに役立っていることを肌で
感じることができました。また、異校種間で発
表を聞きあい、質疑応答を通して互いの実践の
よさを認め合う機会となっていました。ふだん、
小中高校生が意見を交換したりする機会はめ
ったにないかと思います。今回の発表形態も今
後の大会に継承できればと考えています。

実践発表の後、第1分科会の大沢小学校、矢
本東小学校、利府西中学校、角田中学校の実践
については、塩竈第一小学校奥山勉校長先生か
ら、第2分科会では河北新報社佐藤克弘防災・
教育室長から講評をいただきました。これらの
講評を通して、各校の実践のすばらしさを再確
認するとともにアドバイスをいただき、新たな
視点で、互いのN I E活動を一層深めることが
できました。WEBでの大会とはなりましたが、
大成功裏に終えることができましたことに関
係各位に改めて御礼申し上げます。

結びになりますが、本県N I Eの充実した活
動と今後の更なる発展を祈念いたしますとと
もに、これまでの活動に対する関係各位の皆様
の多大なるご協力とご支援に改めて感謝を申
し上げ、挨拶とさせていただきます。



一人でも多く「実践報告書」を手に

宮城県NIE推進委員会

委員長 森 直
(仙台市立寺岡小学校長)

令和3年12月9日の「宮城県NIE研究大会」の開催前、昨年度の様子を確認するために、令和2年度の「NIE 実践報告書」を改めて読み返しました。

そのとき感じたのは、世の中が新型コロナウイルス感染症対策で様々な課題と対応に追われた1年であったということです。それでも、研究大会をオンラインで開催したり、実践指定校によるしっかりとした取組が成果を上げていたり地道に着実に活動を積み上げてきたことがまとめられていました。この時世だからこそNIEが担う役割が大きいという気概さえ感じることができました。本当に素晴らしいことであり、その積み重ねが今年度の大会の成功につながっているのだと確信しています。

そして、令和3年度の「宮城県NIE研究大会」もオンラインで実施されました。実践指定校がコロナ禍でも工夫した取組について発表しました。NIEの活動とSDGsをリンクさせたり、NIEで学んだ力を他の学習に生かしたりしている取組などが報告されました。特に発表後に小学生と中学生、高校生の児童生徒の皆さんが質疑応答しながら自分たちの実践の参考にしようとする素敵な姿が印象に残りました。今年度から2グループに分かれたため、質疑応答の時間をしっかりとることができたのは運営面での特筆すべき成果です。

さて、昨年度よりGIGAスクール構想のもと一人一台端末が配布され、子供たちが情報を入手する手段が多様化してまいりました。だからこそ学校現場では新聞・雑誌・テレビ・インターネットなどの長所と短所を理解し、情報源の信頼性や、真偽や意図を見極め、情報を読み解く力（情報活用能力）を育てることが喫緊の課題

です。この読み解く力・読解力は、全ての学びの土台となるものであり、言語を通じて行う大切なものです。その意味でNIEの重要性は更に高くなっています。学習指導要領に「新聞」の文言が明記されていることから、教育に新聞を活用することが、この予測困難な時代をたくましく生きる子供たちの育成につながっていくと期待されていることが分かります。

それでは、どう新聞を活用していくべきなのかということですが、それは実践指定校の取組をぜひ参考にしてほしいと思います。

記事を読んで感想を書くことを継続して行ううちにまとめる力や思いを表現する力が身に付いたという報告や、テーマに沿った記事を収集、整理することで一つの事実に対していろいろな書き方、記者の意図があることを実感したという報告がありました。特に、現実に話題となっている課題収集については、日々内容を更新し、複数発行されている新聞が欠かせないものであることが明確になったようです。また、自分が実際に記事の書き手となることで、取材のポイントや言語にまとめる難しさを知ったという報告もあります。どの報告も普段できることから地道に継続することで、充実発展させていったことが分かります。いつでも・どこでも・誰にでも新聞が身近になるような学校環境を整えることも大切です。

最後になりますが、日頃からNIE活動を実践している各学校の先生方や児童生徒の皆さん、NIE推進委員の皆様、関係各位のご尽力でこの「令和3年度 実践報告書」が完成したのだと感謝申し上げます。この報告書が一人でも多くの方に読まれ、宮城県内の学校で実践が広がることを願い、挨拶とさせていただきます。

II 寄稿



変わらないもの

宮城県N I E委員会

副会長 佐藤 克弘

(河北新報社防災・教育室長)

人工知能(AI)を使って記事を書く。ずっと先の話だと思っていたのに、未来はもうそこまで来ています。「こんな記事を書いてほしい」と指示すると、蓄積した膨大なデータを取捨選択し、数秒で長文の記事が作成されるそうです。現在は創造的な部分にやや難があり、国内外の一部メディアで簡単なスポーツ記事や企業情報を作っている程度ですが、AIがさらに進化すれば活用の範囲が広がるかもしれません。いつの日か「AI記者」から「あんたはもう必要ないよ」と肩をたたかれたりして…。

少し昔話をします。私が記者になったのは36年前、22歳の時です。入社後、大した研修も受けずにいきなり現場へ出されたのですから取材、執筆のイロハさえ分かりません。配属初日は、ある住民組織の会の様子を200字ほどの短い記事にまとめるよう「キャップ」と呼ばれる先輩記者に命じられました。会場で話されたことを必死にメモし、会場の写真を撮って仕事場である記者クラブに戻りました。

当時、マス目が印刷されたわら半紙に鉛筆で記事を書いていました。うんうんうなりながら3~4時間かけて何とか書き上げ、キャップに見てもらいました。先輩は原稿をちらっと見るや、くしゃくしゃに丸め、ゴミ箱に放り投げながら言いました。「全然駄目、書き直しだ」

何度書き直してもOKがもらえません。キャップもじれたのか「何時間かかっているんだよ」とつぶやき、私の原稿に赤ペンで直しを入れていきます。数分後、原稿は最初から最後まで赤字だらけで、原形をとどめていませんでした。

無力感と悔しさに打ちのめされましたが、翌日の朝刊の片隅に自分の小さな記事(写真はボツになりました)が載っているのを見て、えも

いわれぬ感動を覚えました。さんざん直されながらも、自分の書いた記事が活字になったのです。たくさんの方が読んでくれるのです。

早速切り抜いてスクラップ帳に貼り付けました。同居していた、今は亡き両親にも見せびらかしました。自分の記事を貼ったスクラップ帳はその後何十冊にも増えましたが、最初のベタ記事ほど印象深かったものはありません。

取材環境はこの三十数年で大きく変わりました。鉛筆やボールペンで原稿を書いていたのが、1990年代前半になるとワードプロセッサ(ワープロ)に、90年代後半にはパソコンになりました。初めはペン書きの方がいいや、と思っていましたが、慣れると気に入らない文章はすぐに削字できるし、うろ覚えの漢字も読みさえ分かれば書けるので大変便利です。

私が一線記者の頃は紙の新聞だけを考えて取材、出稿していればよかったのですが、今はインターネットのデジタル紙面も頭に入れておかねばなりません。つまり朝刊、夕刊というくくりでなく、24時間365日ニュースと対峙(たいじ)する姿勢が大事になります。

先述したAIをはじめ、取材環境の進化のスピードには驚くばかりですが、変わらないものもあります。それは、本当のことを正確に書いて、読者に届けることです。さらに地域に寄り添うこと。その大切さを私たちは11年前の東日本大震災で改めて胸に刻みました。

新聞業界に対していろんな批判があるのは承知しています。ただ、私のようにAIではない生身の人間が、種々の出来事に感動したり悩んだりしながら新聞を作っていることを、ほんの少しでも知ってもらえたら幸いです。

Ⅲ 令和3年度 宮城県N I E研究大会の報告

(1) 日程と内容

<研究大会要項>

1 名称 児童・生徒による意見交換会（オンライン）

2 目的

校種を超えて、児童・生徒が自分たちの学校におけるN I E活動の取組を紹介したりその学習を通して考察したりしたことなどを自由に意見交流することによって、児童・生徒が主体的にN I E活動に取り組もうとする宮城県版N I Eについて探る。

3 日時 令和3年12月9日（木）15：45～17：00

4 参加校と参加児童・生徒

<第1分科会>

仙台市立大沢小学校	4名	東松島市立矢本東小学校	5名
利府町立利府西中学校	1名	角田市立角田中学校	3名

<第2分科会>

石巻市立湊小学校	3名	大崎市立岩出山中学校	2名
宮城県泉高等学校	2名	仙台城南高等学校	1名

<本部>

河北新報社 別館ホール

5 後援 宮城県教育委員会 仙台市教育委員会

6 当日の担当・係

○開会の挨拶

県N I E委員会 長澤 裕司会長（名取市立増田中学校長）

県N I E推進委員会 森 直 委員長（仙台市立寺岡小学校長）

○講評 県N I E委員会 奥山 勉 副会長（塩竈市立第一小学校長）

〃 佐藤 克弘副会長（河北新報社防災・教育室長）

○司会（ファシリテーター）

第1部（開会行事）第3部（閉会）N I E事務局長安野賢吾（河北新報社防災・教育室部長）

第2部（意見交換会）第一分科会 大槻 欣史教諭（仙台二華高校）

第二分科会 鈴木 理恵教諭（仙台城南高校）

7 研究大会の流れと時間

第1部 【15：45～16：00】 開会行事

第2部 【16：00～16：50】 <第1分科会> <第2分科会>に分かれて進める。

第3部 【16：50～17：00】 講評・閉会

8 その他

開会行事には、各発表校代表と視聴希望のN I E関係者が参加する。

(2) 研究大会報告

令和3年度 宮城県 NIE 研究大会

児童・生徒による意見交換会（オンライン）

1 開会行事

<宮城県 NIE 委員会 長澤 裕司会長>

本日ここに令和3年度県 NIE 研究大会が関係各位のご尽力により開催されますこと心から感謝申し上げます。教育に新聞を合言葉に、世界 60 カ国以上で取り上げられている NIE 活動ですが、日本でも昭和 60 年に提唱されて以来、現在は日本の多くの学校で実践され本日に至っているところです。

さて、今年度も本研究大会はオンラインでの開催となりました。本来であれば皆さんと一堂に会して一つ一つの取組を生の声と表情を伺いながら体感したいところでありましたが、このような形であれ有意義な実践を共有する場を設定できたことを大いに喜び合いたいと思います。まだまだコロナの状況を見通すことはできませんがこのような劇的な変化が起こる世の中、先を見通すことが難しい世の中では、新しい様々な情報を集め何が正しいかを考え、判断できる力を身に付けることが大切です。新聞で学ぶということは今のような時代にはますます重要になってきます。本日はそのような実践を重ねてこられた県内 8 校の小中学校及び高校の先生と児童・生徒の皆さんとネットを通しての取組の紹介、そして意見交換会となります。今、私たちが考えなければならないこと、行動しなければならないことをこのコロナ禍を通して皆さんの意見を伺いながら再確認する機会としたいと考えています。

結びとなりますが、日ごろから NIE に取り組んでいる先生方と児童生徒の皆さん、ご尽力いただいた NIE 推進委員会の皆様、関係各位に御礼を申し上げ簡単ではありますが開会の挨拶とさせていただきます。

<宮城県 NIE 推進委員会 森 直委員長>

宮城県 NIE 研究大会「児童生徒による意見交換会」の開催にあたり一言ご挨拶申し上げます。

本来であれば皆さんと一緒に一つ一つの学校の取組を学び合いたいところですが、残念ながらいま

せんでした。しかしオンラインという形で今年も開催できるということに感謝したいと思います。

最近の新型コロナウイルス感染状況は、一時期に比べると大分落ち着いてきました。宮城県でも感染者数が劇的に減少しています。この状態がこのまま続いてほしいと願いつつ変異株、オミクロンが日本でも広がってしまうのか第 6 波がいつ来てしまうのか不安も消せません。数年前までは考えもしなかった予測困難な時代だからこそ、これからの子供たちにはしなやかにこの難局を乗り越えていく力を身に付けさせなければなりません。そのためにはさまざまな情報を集め、いったい何が正しいのかを考え、自分で判断する力が重要となっていきます。その意味でも新聞を通じて学んでいくこの NIE の果たす役割はとても大きいものがあると思っています。

さて、今日は日ごろから NIE について実践を重ねている学校の皆さんが集まりました。小学生から高校生までが一緒に行う会はなかなかありません。とても貴重なことです。その素晴らしい取組を互いに紹介して参考にしてほしいと思います。そして宮城県全体で NIE の取組が盛り上がってほしいと思っています。

最後に、大会に参加するための準備やご指導いただいた先生、関係各位に御礼を申し上げ開会の挨拶といたします。

2 児童・生徒による意見交換会

(1) 第 1 分科会から

<仙台市立大沢小学校 児童 4 名>

大沢小学校の NIE の取組を紹介します。10 月 27 日に河北新報の末永記者が来て特別授業で「取材のポイント」を教えてくださいました。「下調べ」「質問予想」「準備」この 3 つは肝心なことを聞くために必要なテクニックだそうです。そうすることで取材するときに余裕をもって質問できるそうです。次に写真についても教えてくださいました。写真はその時しか撮れないの

で気になった場面はどんどん写真を撮った方がよいということでした。写真は文よりも分かりやすく、スペースを埋めるという役割があるそうです。写真 1 枚でその様子が分かる場面を撮るのがコツのようです。

末永記者に「取材のポイント」を教わり、今度は自分たちも取材を試みました。気仙沼の「オイカワデニム」の社長及川さんとエコシルフィで有名な「北上電設」の田代さんとオンライン特別授業を行いました。河北新報に載っていた 2 社の記事を読んで取材の準備をしました。末永記者から教わったとおり、取材をするときにはどんなことをしている企業なのかを事前に調べることの大切さを感じました。これが取材する前に準備した取材メモです。

オイカワデニムと北上電設について、事前に新聞をよく読んでいくことで調べたいこと、知りたいことがたくさん出てきました。事前にたくさんの質問を考えることができ、わくわくしました。まずはオイカワデニムの及川洋社長にオンライン授業をしたときに事前に調べていた質問ができ、いい取材ができたと思います。北上電設の田代さんとオンライン授業したときに事前に調べていたエコシルフィのことを質問できました。二人の方とオンライン授業ができた皆さんのメモをすることができました。また今回の取材を通して及川社長からはなるべく無駄をなくすこと、田代さんからは諦めない気持ち大切ということを教わり大変勉強になりました。「オイカワデニム」と「北上電設」のオンライン授業では、末永記者が取材に来てくれその授業の様子が 11 月 30 日の河北新報の朝刊に載りました。学校でのオンラインの授業のことが河北新報に載り、それを見てその新聞が宮城の人たちに渡ったと感じて喜ぶ人、感動する人がいました。私もとてもうれしかったです。大沢小 5 年生全体が新聞に載ったことをとてもうれしく感じました。

このような授業の後、こども新聞を使ってクイズ大会を行いました。記者の伝えたいことは何か、記事で大切なところはどこかということを考えながらクイズづくりをしました。これがクロームブックで作ったクイズです。新聞クイズで学んだことは新聞の楽しさです。クイズを作るために隅々まで新聞を読んでいたら面白い記事がたくさんあって新聞って意外と面白いなと思いました。他にも記者が一番伝えたいことは最初にあることが多いことに気付きました。他の友達のクイズを解い

ていると、自分もこんなクイズが作れたらいいと思うようになりました。新聞を読んで勉強することでたくさんのことを学ぶことができました。これからも勉強に生かしていきたいです。



＜東松島市立矢本東小学校 児童 5 名＞

矢本東小学校は、東松島市の中心部にあります。近くに航空自衛隊松島基地があるので校庭の真上からブルーインパルス飛行を見ることができます。全校児童数は 481 人です。先輩たちから引き継いだ鼓笛隊が第 61 代まで続いています。今、私たち 5 年生は第 62 代になれるように 6 年生から演奏の仕方を教えていただいているところです。また、たかのご児童会では、「あいさつ運動」や「デジタルメディアコントロール」などに力を入れ全校で取り組んでいます。

本校の NIE について紹介します。今年度から NIE 活動に取り組んでいます。テーマは SDGs を基にした NIE 活動です。NIE 活動を通して新聞に触れる機会を増やすことで SDGs の 17 の目標を身近に感じられるようにするためです。主な活動として、週に一度朝の時間に新聞を読む NIE タイムや各教科で新聞を活用したほか、新聞コーナーを作って気軽に新聞を読むことができました。

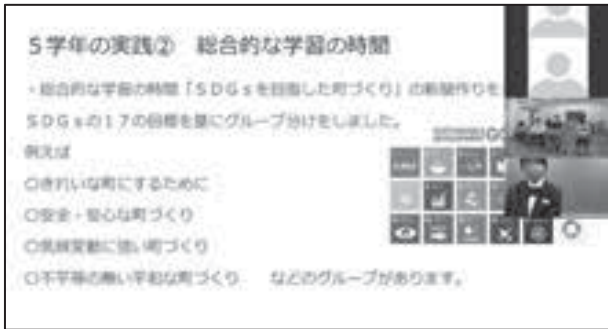
次に 5 年生の NIE 活動について二つ紹介します。一つ目は国語の学習で「新聞記事を読み比べよう」という学習があります。そこでは新聞記事の構成や写真の役割について学習しました。また、文章に合わせて掲載されている写真には書き手のメッセージを強める役割があることを学習しました。新聞には書き手の思いがたくさん詰まっていることが分かりました。

二つ目は、総合的な学習の時間で「SDGs を目指した町づくり」の新聞づくりをしています。SDGs の 17 の

目標をもとにグループに分かれ、それぞれの目標を達成するためにどのような町にすればよいのか考えました。私たちの学級では「きれいな町にするために」「安全・安心な町づくり」「気候変動に強い町づくり」「不平等のない町づくり」などのテーマを決めて新聞づくりに挑戦しています。

これまでの活動として地元の新報社の櫻井さんの協力を得て、河北新報社の丹野記者を紹介していただき2回出前授業をしていただきました。そこでは、新聞の構成や取材の仕方、新聞が発行されるまでを分かりやすく教えていただきました。特に東日本大震災の時の取材の様子がとても心に残っています。

これからの活動として、市役所や地域の方に来ていただき取材する予定です。3学期には作成した新聞を発表したり地元の施設に展示したりする予定です。



<利府町立利府西中学校 生徒1名>

私たちが行っている新聞を使った取組は大きく分けて二つあります。それは学校全体での取組と学年での取組です。

まず学校での取組を紹介します。それは、新聞閲覧コーナーの設置です。利府西中の家庭での新聞の普及率を調べると、約7割の生徒の家庭では新聞を取っていないということが分かりました。また新聞を取っている家庭でも見ているページはテレビ欄や4コマ漫画など、偏りのあることが分かりました。そこで、生徒全員が通る職員室前に新聞閲覧コーナーを設置し、新聞に親しみを持ってもらうことから始めました。生徒だけでなく先生方の利用も見られ新聞に触れるきっかけとなる取組となりました。

次に学年の取組です。利府町では、町内の小中高特別支援の学校が連携した取組を毎年行っており、通称ブラザーシップと呼んでいます。今年のブラザーシップのテーマは「SDGsに関する取組」ということで

西中では、SDGsとNIEを関連付けさせる取組を行いました。3年生では実社会でSDGsがどのように実践されているかを新聞を使って調べまとめました。まとめる時間は総合の時間に行いました。

1時間目はどのようなSDGsにまつわる取組を行っているかを新聞記事の中から探しました。学年のホールに200部以上の新聞を並べ、興味のある項目や記事について切り抜く作業はとても楽しく、全員が積極的に活動しました。

2時間目は切り抜いた新聞記事をまとめる活動をしました。1時間目で切り抜いた新聞記事の要約や自分の感想をワークシートにまとめました。中には見やすいようにイラストなどを交えてまとめる生徒もいて新聞記事を通して自分の考えを深める貴重な時間になりました。

3時間目は自分の作ったSDGs調査プリントをグループで発表しました。グループ分けはSDGsの17項目を活用し、項目ごとのグループで発表しました。他の人の意見を聞くことで、ものの見方や考え方を広げることができました。また、発表後は掲示物として学年のフロアに展示しています。発表では聞くことができなかった他の項目の掲示物を見る生徒も多く、学年ホールがにぎわいました。

掲示物は、後期生徒会が提案している「SDGsWEEK」まで展示予定です。ぜひ遊びに来てください。今回の取組を通して自分たちで実践するきっかけにしつつ、来年度の探究活動につなげていきたいです。以上が西中の取組です。

来年はこの2つの取組を継続していくとともに2つの内容をより発展的なものにしていきたいと思います。学年での取組は、3年生だけでなく各学年に広げることによって学校全体を通してSDGsの必要性や新聞の有用性について考えていきたいです。私自身、今回の取組で新聞に興味を持った一人なので今後は授業だけでなく日常生活でも考えていきたいです。

<角田市立角田中学校 生徒3名>

角田中学校は今年度NIE実践2年目になります。昨年度1年目では、図書室に新聞閲覧コーナーを設置しました。アンケートの結果から全く新聞を読まず、活字に触れない生徒が多くいることが分かりました。さらに昨年4月、3年生を対象に家庭での新聞購読の

有無について調査を行ったところ、約7割の家庭が購読していませんでした。そこで先生が新聞を通し活字に触れる機会を増やそうと新聞コーナーを設置しました。最初の頃は手に取って見たり読んだりする生徒は少なかったようです。先生方は並べ方や設置場所を変えたり、図書支援員の方に声掛けしていただくなど様々な工夫をしてくださいました。その結果、手に取って読み始める生徒が少しずつ増えていったそうです。昨年12月、夏休み前と比べ新聞を読む回数がどのように変化したかを図書室にいた生徒40人に口頭で聞いたところ、70%の生徒が「かなり増えた」「少し増えた」と答えました。今年度も引き続きコーナーを設置しています。特別支援を含めた全クラスに週1回「こども新聞かほピョンプレス」を配布し、各教室の目につく場所に設置するようにしました。「かほピョンプレス」の内容は簡単で分かりやすく、特別支援のクラスでは担当の先生が記事の読み聞かせを行っています。

3年生では、新聞記事を読んで感想を書くという学習を4月から継続して行っています。書き方の形式にはこだわらず、自分が感じたことや考えたことを書ける量だけ書くという活動をしています。もちろんたくさん書く人もいれば少ししか書かない人もいます。しかし、そういった点は気にせずとにかく書いてみようということでやってきました。私はこの活動で書くことに抵抗を感じなくなりました。生徒の中には私と同じように苦手だなあという気持ちがなくなったという生徒がきついていると思います。また、毎週発行される学年だよりには先生方がいいと思った私たちの感想を載せてくださいます。生徒だけでなく保護者の目にも触れることになるので、自分の感想を載せてほしいと意気込む生徒もいます。ちなみにこれが今まで発行された学年だよりです。

国語の授業では、与えられた新聞記事を読んで規定された字数、時間、条件のもとで自分の考えを書く練習をしています。これは私たち3年生にとって受験勉強の一環としても役立っており、特に国語の試験に出題される作文の対策になっています。書いたものは、先生が添削し、アドバイスをくださいます。このおかげで私は毎月行われる実力テストで、少しずつ作文の点数が上がってきました。そのほかに新聞のコラム欄を読んで自分で見出しを15字以内で考えるといったことをしています。そして100字から200字でその見

出しをつけた理由を書きます。見出しに正解があるというわけではありませんが、見出しをつけるためにはコラムを何度も読んでしっかり理解しないと見出しを付けることができません。このことで文を丁寧に読めるようになってきたと思います。このような感じのワークシートを使っています。先生は朝日新聞で同様の企画を実施しているので参加してみたいとおっしゃっていました。

【質疑応答】



司会:疑問に思ったことをお互い聞いてください。

Q 利府西中→大沢小

クイズを作っているとの発表ですが、クイズを作る難しさや効果を教えてほしい。

A 大沢小 難しさは記者の意図を理解することで効果は国語の読み取りなどに役立つことだ。

Q 司会→利府西中

ブラザーシップスについてもう少し詳しく教えてほしい。

A 小中高の代表者が集まる会があるが、各校の取組を発表し合います。最近はコロナの影響でオンラインで発表した。

Q 司会→角田中

作文の成績が上がったとのことですが、頻度と工夫について教えてほしい。

A 1週間に1度程度、私は20点満点で10点から15点と5点上がった。周りの友達も最近やる気になっている。

Q 矢本東小→大沢小

新聞記者の話で一番分かったことは何か。

A 写真の大切さや事前に調べることがいいということが分かりました。絵や写真を入れると分かりやすくなる。

Q 矢本東小→利府西中

これから新聞を作るがどのように作ったらよいか。

A 新聞の要点をまとめて自分の考えを書きだしてまとめた。キーワードを自分なりにまとめて伝えるようにした。

Q 大沢小→矢本東小

新聞づくりで難しかったことはあるか。

A まだ新聞づくりはしていないが取材したことをまとめること、文章を書いてまとめるのが難しいと思った。

【感想】

- ・ こども新聞を使ってクイズ大会を行うという取組や朝、新聞を読む時間を作るという取組など自分の学校でもできそうなことが多くあった。
- ・ 3年生の7割が新聞を読んでいなかったなので、今回の取組を通してたくさんの方が新聞を読む機会になった。今SDGsについて話し合っていて、新聞記事を探すことによってNIEの活動とSDGsの活動両方ができた。
- ・ オンラインだったけどいろいろな学校と意見交換ができたよかった。新聞やNIE活動に興味を持った。写真があると分かりやすいことも分かった。
- ・ 同じような取組もあれば違う取組もあった。中学校と交流ができて貴重な経験になった。クイズづくりではキーワードを考えたりすることが楽しく感じる。今日の意見交換では共感することや学ぶことがたくさんあり授業に生かしていきたい。

(2) 第2分科会から

〈石巻市立湊小学校 児童3名〉

これから湊小学校の実践発表を始めます。

はじめに廊下の掲示について紹介します。職員室前にあります。河北新報の「かほびよんプレス」に湊小学校の紹介が掲載されました。運営委員会の児童が記事づくりをして完成させました。

4階の廊下に「読み比べ」コーナーがあります。新聞社によって、一面に載るトップニュースが違っているため、とても興味深く読んでいます。

毎週金曜日の朝の時間に「読書・新聞タイム」を行っています。学級ごとに新聞を活用した活動を行っています。気になった新聞を切り取り、ワークシートに貼ります。そして読んだ感想を書きます。また、先生や友達からも感想を書いてもらっています。

日常的な取組の「新聞リレー」について紹介します。

毎日、輪番で新聞記事を選びます。選んだ記事を読んでもらったり、友達の記事にコメントを書いたりするのが楽しいです。

授業での取組についてはたくさんあります。二つだけ紹介します。一つ目は「4コマまんがの並び替え」です。まんがを切り取って並び替えをします。そして自分で新たにオリジナルストーリーを考えます。出来上



がったストーリーを友達に紹介し合い感想を伝えます。

二つ目は「ニュースあれこれ」です。複数の記事を読み、自分でキーワードを読み取ります。また、文章の構成を考えながら感想を書きます。先生から感想についてのコメントをもらうことができとても楽しみになっています。

「新聞への投書」は、今年度は5年生1人6年生2人が河北新報に掲載されました。この「投書」を読んで他学年の児童が、投書の印刷されたワークシートに感想を書いています。

ワークシートをまとめてメッセージのプレゼントにしています。

昨年度から「声の交差点」をきっかけに会津若松市在住の方と投書で交流があります。修学旅行で会津を訪ねた際に実際にお会いすることができました。投書が縁となっていることが大きな喜びです。新聞を活用した取組は学校日よりや学年日より、Face bookなどで発信しています。これで発表を終わります。

〈大崎市立岩出山中学校 生徒2名〉

皆さん、こんにちは。岩出山中学校です。よろしくお願ひします。

岩出山中学校では、「未来の創造、NIEではぐくむ強い心と高い志」をテーマに掲げてNIEに取り組んでいます。

今年度は、NIEを通して、SDGsの活動にも目を

向けながら、学習してきました。

5月に、ミャンマーのクーデターに関連した「日本の皆さん 祖国助けて」という見出しの新聞記事を読みました。「できることがあれば、協力したい」「ミャンマーのSOSを受け止め、行動することが大切だと思った」というような感想がありました。私自身も、ミャンマーで起きていることや、子供たちが学校へ通えていないということを、初めて知りました。私は、自分と同じ年齢の子どもが、教育を受けられないことは不平等であると感じます。

そこで、私たちはミャンマーの子供たちのために、使わなくなった文房具を全校生徒から集め、寄付することにしました。全校生徒に呼びかけをすると、思っていたよりも文房具がたくさん集まり、生徒全体で協力し



ようという気持ちが強く感じられ、とても嬉しく思いました。

この取組は新聞で取り上げられ、その記事を読んだ地域の方や、仙台市にお住まいの方も文房具寄付に協力し

ていただきました。集まった文房具は、段ボール3箱分にもなり、NPO法人宮城・ミャンマー友好協会を通して、ミャンマーに寄付することができました。この活動は、SDGsの1番「貧困をなくそう」4番「質の高い教育をみんなに」などに関連していると思います。新聞記事一つで、誰かの心を動かし、大きな力へと変わっていくのだと、実感しました。

岩出山中学校では、毎年、社会福祉協議会を通じて、地域のお年寄りの方々に「ことばのギフトカード」を送っています。「ことばのギフトカード」とは、新聞から好きな言葉や写真を選び、コラージュしていくものです。これが作品例です。作ってみると、とても楽しくて、私自身も時間を忘れるくらい夢中になってしまうほどでした。私は、地域のお年寄りを励ましたいという気持ちを込めて、カードを作りました。

先日、社会福祉協議会の方にメッセージカードを

渡しました。地域のお年寄りが元気に笑顔で過ごせると嬉しいです。この活動は、SDGsの3番「すべての人に健康と福祉を」、11番「住み続けられるまちづくりを」などに関連していると思います。地域のお年寄りに元気を届ける活動として、今後も継続していきたいです。

その他にも、1学年では、はがき新聞で、小学校の恩師に中学校生活の近況報告をしました。また、総合の授業で新聞を使って、食品ロスについて学び、みんなで意見の交換をしました。2学年では、河北新報社の丹野記者を講師にお招きして、新聞の見出しの付け方を学びました。それを生かして、職業講話のまとめ新聞をつくりました。3学年でも、朝のNIEタイムで食品ロスや共生社会についてなどの新聞記事をたくさん読みました。

最後に全校生徒で取り組んだNIE川柳とSDGs川柳を紹介します。NIE川柳の優秀作品「新たな情報知って広がる 自由な思考」「新聞を 読んで広がる自分の未来」「新たな思考 新たなつながり 新聞で」SDGs川柳の優秀作品「行動を 起こしてつながる世界の平和」「今こそが 未来に向けて 動く時代」「ミャンマーに 文具届け 願う平和」学年を問わず、NIEを通して、SDGsへの関心を深めることができました。SDGsは、国や企業、大人だけが考えていけばいいものではなく、私たち中学生が取り組めることもたくさんあるのだと気付きました。

これからも、持続可能な社会の実現に向け、強い心と高い志をもって、学習していきたいです。今日は、岩出山中学校でのNIEの活動について紹介でき、嬉しかったです。

<宮城県泉高等学校 生徒 2 名 教員 1 名>

T 泉高では1年生がNIE活動として、朝学習の10分間を使って、教師が面白そうな記事を選び、廊下に掲示し、生徒に紹介します。また、5分程度で読める興味ある記事を河北データベースから選び、500～600字で感想を書くようにしています。

例えば、ヤングケアラーの記事を提示し生徒にヤングケアラーの課題について考えさせながら、さらに記事を調べることにより深くこの課題について考えさせるようにしました。では、総合的な探究の時間で2人の生徒がどんな記事を選び、どんな考えを持ったのか発表してもらいます。



生徒 A 僕は台風19号豪雨によって丸森町が甚大な被害を受けた記事を選びました。洪水によって大きな被害を受けながら2年が経過してもまだ生活再建が31.9%の状況であることが分かりました。

この記事を読み、県からの支援をもっと増やして早く復興すべきだと考えました。丸森町は2年前の台風19号の災害ばかりでなくこれまでも何度も氾濫していて、そのたびに川の強化を促しているが、何度も川が氾濫しているところを見るとされていらないのではないかと思います。東日本大震災など大きな災害では、国や県の支援が早いので復興や復旧も早いと感じます。丸森町への支援も強化し早く再建できるようにすべきだと思います。

生徒 B 私が興味を持った記事は、青森県弘前市でパートナーシップ制度を開始することを発表したという記事です。私は、LGBTQの当事者の方々への理解が不足している人が多い現状は、全ての人が平等ではないのが大きな問題だと思っています。そんなLGBTQに関するこの記事を読んで私が驚いたのは、制度導入に関して寄せられた89件の意見の内、反対の意見が44件も寄せられたということです。この制度が導入されたからと言って反対している人たちに迷惑が掛かる訳ではないのに、なぜ他人の自由を認めようとしないのか私には不思議でたまりません。全ての人が平等な社会を実現するために一人一人が互いの個性を尊重し合うべきと改めて考えさせられました。

T 総合的な探究の時間では、生徒たちは携帯を使いながら河北DBを使って記事を検索し情報を収集しています。

〈仙台城南高等学校 生徒1名〉

バーチャルリアリティーの発展が教育に改革をもたらすかというテーマで発表します。まず、二つの新聞に目を通してみましょう。一つ目はネット通信制「N高」の入学式です。この新聞は沖縄県うるま市の中継映

像を現実のように体験できるバーチャルリアリティー（VR）の技術で楽しんでいます。参加した人は「ネットで学べる事で自由な時間を作りやすい。この高校なら続けられると思った」と期待しています。二つ目の新聞は「ロボが分身！遠隔で授業参加」というタイトルです。病気などで日常的な通学が難しい生徒も自宅などから遠隔操作ロボットを「分身」にして操り教室でみんなの中をめぐって議論に加わっています。

二つの新聞記事を紹介しましたが、VRとはどんなものなのかを簡単に説明します。VRとはVRゴーグルを着用することで作られた映像がまるで本物であるかのように感じる事ができる技術のことです。寝ている時に見る夢みたいなものではないでしょうか。皆さんも夢を見ている時、目が覚めるまで現実か夢かわからなくなったこともあると思います。ARについても知っておきましょう。ARとは位置情報を利用することで現実世界がそのままゲームの舞台になり、プレイヤーを世界に没入させることができます。

ここで問いの確認をします。バーチャルリアリティーの発展が教育に改革をもたらすのかでしたね。

そこで、VRを使った北京の教育の取組について資料を見ていきましょう。中国の北京では天体物理学を題材にVRを用いた授業と従来の教育手法を比較した実験が行われました。学生がVRを使った授業と従来の授業を受けるグループに分かれ授業が終わった直後と授業から2週間後にテストを受けるグループに分かれて実験を行いました。

結果は、VRを使ったグループの方がともにテストの平均点が高かったです。図を見てもらうと分かりますが、授業直後にテストを行ったグループの平均点を比較してみると約93点と約73点で27.4%も平均点が違いました。2週間後もほぼ同じでVRを使って学習した方が従来の授業



よりも32.4%もの差がありました。以上のことからVRでの学習は記憶により定着させることができ、時間が経っても忘れにくいということが分かりました。

まとめです。一つ目は様々な事情を抱えて学校へ行けない生徒にとっても学ぶツールとして役立つ。二つ目はVRを用いた授業の方が生徒の理解度及び知識の定着率が向上し、学習意欲も高まるデータもありました。また、SDGsの視点からも考えて見ました。SDGsとは17のグローバル目標のことです。今回調べたVRを使った学習効果や様々な事情を抱えている人にもVRで学習を続けられることから4番の「質の高い教育をみんなに」という目標に繋がっていくと思います。

最後に展望です。今後はさらにVRの需要や用途、活躍シーンは増えていくでしょう。またVRを通すことで、様々な分野で大きな進歩や発展を遂げることが予想され、その動きは日本だけではなく世界中の人々を今後も魅了してくれるでしょう。展望に向けてFacebook社がメタバース事業に注目していることも紹介しておきます。興味があれば見てもらえると幸いです。

【質疑応答】

Q 城南高→岩出山中

文房具の寄付は、年にどれくらい集めているのか。

A 今年の5月から始めたばかりです。まだ1回だけです。

Q 泉高→湊小

会津の方と投書をしたことから文通を始めたようですが、同じ内容のことで文通が続いているのか。文通の中身について教えてほしい。

A 1年前から文通が始まりました。文字をきれいに書きたいとの投書から文通を始めています。内容もそのことが中心です。

Q 岩出山中→泉高

NIEタイムを進めています。新聞の良いところはどこだと思いますか。

A インターネットで検索すると、いろいろな広告のサイトなど余計なものが入ってくるので、調べるまで時間が掛かってしまう。新聞だとすぐに必要な情報がつかめて効率が良い。また新聞記事を読むことで、今まで知らなかったことを知ることができ、深く考えることができ自分の成長を感じることができる。

【感想】

- ・ 他校の取組が分かり、いろいろな新聞の活用が分かってよかった。自分の学校でも取り組みたいことがあった。
- ・ 新聞を使っているいろいろな方法で取り組まれており、高校で行っていることが中学校でも行われていることが分かった。新聞にしかできないことがあることを改めて気づかされた
- ・ 新聞を読んで何かできないかを考えることができた。
- ・ 小学校ではNIEの取組をしていなかった。中学校でNIEに初めて取り組んだ。小学校でも中学校と同じような活動をしていてすごいと思った。高校では、同じ取組をしてもレベルが高いと思った。家では新聞を取っていないが、新聞でいろいろなことが知ることができ、これからも読んでいきたい。
- ・ このような会に参加し大変良い機会になった。家でも新聞を取っているので、家庭でも今日の話を生かして自分に必要なことを考えていきたい。他の学校の取組を聞いて、これからの学習に参考にしたい。
- ・ 新聞をもっと深く読んでいきたいと思う。生徒会活動を行っているので、岩出山中学校の活動を参考にし、生徒会活動にも取り入れたいと思った。

3 講評

<塩竈市立第一小学校 奥山勉校長先生>

初めて参加しましたが、今感動しています。

どの学校もリモートでのプレゼン、本当に慣れていて去年・今年と取り組んだ成果が各学校出ているなどうれしく思います。

二つ目です。小学生と中学生と一緒に発表するのはどうかなと思っていましたが、質問したり意見交換したり小中学生がかかわるということは素晴らしいことだと改めて思いました。

簡単に各学校ごとにコメントします。

大沢小学校。本物の記者さんに直接取材の仕方やポイントを教えていただけるというのは本当に良かったですね。自分たちも取材されて、新聞に載ってますます実感したのではないかと思います。新聞のどんな小さい記事でもそこには書き手、記者の思いや願いが詰まっていることを理解しながら新聞を読むとますます伝わってくると思いました。こども新聞づくりも頑張ってください。

矢本東小学校です。国語の勉強ですよ。『新聞記事を読み比べよう』や総合的な学習の時間で取り組んでいる中身でした。私も勤務していました。鼓笛隊が懐かしいです。5年生の皆さんも伝統を引き継いでください。地元の新聞店にも協力してもらっているというのも素晴らしい取組です。SDGsで自分たちの町を良い町にしていこうという取組も新聞というアイテムを使ってこれからも頑張ってください。

利府西中学校さん。7割の家庭が新聞を取っていないということで私もびっくりしました。だからこそみなさんの取組がとても大事です。SDGsの取組とNIEの取組を関連付けた、それから学年に留まらず生徒会も関わって学校全体に広げていくという報告もありました。ぜひ継続して利府西中の伝統にしてほしいと思います。最後は角田中学校です。2年目の取組ということで積み上げを感じる報告でした。記事を読んだら自分の考えを書き留めておくという積み上げをずっと継続してきたということで、吸収するだけでなく、自分が何を感じたかを発表したり表現したりすることはとても大事な学習です。高校に進学しても継続してほしいし角田中全体にも広げていくということでみんなの力になると思います。

今日感じたことですが、今学校で一番大事にしていることは「主体的、対話的で深い学び、アクティブラーニング」を聞いたことがあると思います。なぜだろう、もっともっと知りたい、どうしたらいいんだろう、みんなで考えようか。自分の意見や考えを多くの人たちに伝えよう、新聞で伝えよう、この活動がアクティブラーニングですね。皆さんが自分から問題を発見して、様々な立場の人たちの意見を聞いて、対話をしながら解決策を考えて、よりよい社会を作っていくことを目指し考えていく、この学習がとても大事です。このNIEの取組をますます充実させてほしいです。各学校の代表の皆さん、指導された先生方本当にありがとうございました。

＜河北新報社防災・教育室長佐藤克弘氏＞

小中高校の皆さんの発言を聞いてこれほど新聞に馴染んでもらって利用していただき、作り手としてやりがいを感じていますし、これからも役に立つような新聞を作りたいと思い新たにしました。皆さんの発表を見た結果です。

湊小学校、廊下の掲示から始まって読書・新聞タイ

ム、新聞記事のリレー、4コマ漫画を並び替えてみんなでストーリーを考え直してみるという取組を聞きました。本当に新聞を隅から隅まで利用して学習に役立てようという意欲を感じました。

新聞への投書ですね。投書を読んだ感想をワークシートに書いて投書した人へメッセージを送るという内容を聞いて頭が下がる思いでした。中学校高校でも続けてほしいです。

岩出山中学校では、SDGsにも絡めて取り組んでいくという発表がありました。今年はミャンマーでクーデターを境に若い人たちがSOSを出している、それに対して教育の機会を奪ってはいけないという純粋な思いから全校で使わなくなった文房具を集め、ミャンマーの子供たちに送ろうということをお教えしてくれました。その運動が学校の枠を超えて地域にも広がり、段ボール3個分も集めてNPO団体を通して現地まで送るという成果まで、5月からまだ半年の間に一気に攻めていくスピード感、若い人たちのエネルギーを感じました。日常的にも社会福祉協議会を通して、新聞の見出しや写真などを切り貼りして言葉のギフトカードを贈るという地道な活動にも感銘を受けました。

泉高校では朝の授業の前に行われる朝学習の時間に河北新報等のDBを基にしてテーマにして考えていく、特にヤングケアラーの話から今まで知らなかった人がそれをきっかけにどんどん学んでいこうという話があり、これがNIEの原点と思われる取組で感激いたしました。

城南高校では、新聞のVRの記事をきっかけにVRとはどんなものか、教育に対して発展・改革をもたらすかということ进行深入し結果としてこれは将来性があると結論付ける新聞記事をきっかけに高めていく方法、これも方向性を示していただきました。

皆さんの発表は、独創性にあふれていて、作り手側としてももっともっといい記事を書いて皆さんのお役に立てればいいなと思いました。今後とも皆さんの活躍を期待しています。ありがとうございました。

(文責 NIEコーディネーター 畠山 厚子)

GIGA 時代に生きる新聞社の「技術」と「人脈」

1 はじめに

令和3年度から NIE 実践指定校となった本校は、主に5学年の子供たちが、社会科や総合的な学習の時間において実践に取り組んだ。

一人一台の Chromebook と組み合わせて河北新報データベースからダウンロードしたデジタル版の新聞記事を活用する実践にチャレンジしてきた。現役記者から取材のコツを学び、河北新報の記事に取り上げられた地元の企業人に、子供たちがオンラインで直接取材をするコラボ授業にも取り組んだ。

デジタルシフトが進む教育活動に、新聞社が培ってきた「技術」、紡いできた「人脈」を取り入れることで、子供たちの「社会の目」が広がる手応えを実感している。

2 実践の概要

【出前授業「取材のコツ」】

5年社会科「これからの工業生産とわたしたち」の単元と関連して、地元の中小工場の方々へのリモートインタビューを計画した。それに向けて、10月27日（火）河北新報社の末永記者から「取材のコツ」を学んだ。

肝心なことを相手から聞き出すために大切なことは次の3つである。

- ① 下調べ
- ② 質問予想
- ③ 準備

良質な問いは「良い準備」があってこそ生まれることを学んだ。末永記者が実際に使用している取材メモを間近で見させていただいたことも大きな刺激となった。①～③の跡が分かるメモだったからである。この後の社会科の学習に、子供たちは一層意欲的に取り組んでいた。



【地元企業コラボ授業「リモートインタビュー」】

11月9日（火）気仙沼のオイカワデニム社長の及川洋様、11月12日（金）石巻の北上電設工業の田代賢治様に、ZOOM を用いてリモートインタビューを行った。河北新報社にご紹介していただいた方々である。



事前に河北新報で取り上げられた2社の記事を読んだ。PDFの記事はGoogle Classroomで瞬時に共有でき、拡大・縮小や加工も可能である。



Google スプレッドシートを学級で共有（一人が打ち込んだ情報が瞬時に全員のデータにも反映）して質問を書き出したところ、2クラス合わせて300を超える質問案が出された。新聞記事に触れることができ、級友の意見が見合える環境を整えたことで、知りたいことが子供たちからあふれ出てくることに驚いた。



リモートインタビューを含むオンライン授業当日は、厳選した問いをそれぞれの方にぶつけてやりとりした。真剣にメモを取る子どもたちの姿は、まるで記者のようであった。

「及川社長に、事前に考えていた質問ができ、オンラインでいい取材ができたと思います。」

「田代さんに、調べていたエコシルフィについてもっと聞いてみたくなりました。そこで、失敗談も質問できました。」

離れた場所との画面越しにでも、主体的に学習に臨む子供たちの姿に、これからの授業の大いなる可能性を感じた。

【東北地区学校図書館研究大会公開授業】

11月25日（木）第40回東北地区学校図書館研究大会宮城大会において、この単元のまとめに位置付く授業を公開した。これからの日本の工業生産で大切なことを、資料と結び付けた説明づくりを行う授業である。全国の例と身近な地域の例の「往還」によって深い学びを試みた。根拠となる資料に河北新報の記事を選んだ子もいた。地方新聞は身近な地域の具体例に触れることに最適な教材であることを、東北や全国各地の先生方と研修することができた。



【オンライン新聞クイズ】

こども新聞や河北新報の記事から子供たちがクイズを作り、答え合う取り組みを、Google フォームを使って行っている。

「クイズを作るためにすみずみまで新聞を読んでいたら、新聞って意外と面白いと知りました。」
「友達のクイズを解いていると、自分もこんなクイズを作れたらいいなと思い、もっと新聞を読んでかきこくになりたいです。」

先生がワークシートを与えるのではなく、子供たち自身がクイズを作り、クラウド上で交流し合うという点が肝である。印刷・配付する手間も無い。異年齢での交流などにも今後積極的に活用していきたいと考えている。



3 おわりに

一人一台端末（仙台市は Chromebook）が配付された学校現場と河北新報データベースの相性がとても良い。実践指定校として、無償で活用させていただけたことが大変ありがたかった。新聞社が育ててきた叡智は、GIGA スクール構想における授業を成功させることに結び付くものである。“教育に新聞を！”の理念を実現するためにも、他校にも活用の幅が広がることを期待している。（担当 教諭 鈴木 優太）

SDGs への関心を高める N I E 活動

1 はじめに

本校は、東松島市の中心部に位置し、南には、航空自衛隊松島基地がある。児童数は、481名。たかのご児童会では、「あいさつ運動」や「デジタルメディアコントロール」などに力を入れて取り組んでいる。また、第61代まで続く伝統的な鼓笛隊がある。今年度からN I E活動実践指定校として活動している。

2 初年度 of 取組方針

(1) N I E活動のテーマ

「SDGs への関心を高めるN I E活動」

(2) 目 標

N I E活動を通して、児童に新聞に触れる機会を増やすことにより、SDGsの17の目標への関心と実践意欲を高めるようにする。

(3) N I E活動の取組の方針

N I E活動としての取組は、年間指導計画に基づき、新聞を活用できる教科等を検討する。また、教職員は、気軽に新聞を活用し、新聞の良さを実感しながら授業実践できるようにしていく。

3 実践の概要

(1) N I Eタイム

目的は、教科等において新聞に慣れ親しむことを第一に考え、新聞の基礎を学ぶことで、広く社会に目を向け、自分事として考え、読解力、表現力等の向上を図る。業前の時間を活用して週に一度新聞を読んでいる。最近では、ポプラ社の「Motto Sokka!」の活用により、朝日小学生新聞デジタル版の一面を無料で読むことができ、児童はタブレットで新聞を読んでいる。

(2) 新聞コーナーの設置

社会で話題になっている記事や関係する図書室の本を合わせることにより、児童は興味をもって新聞を手にしたり、本を読んだりする学びの場に繋がっていった。また、子ども向けの新聞だけでなく、大人向けの新聞でも見出しに目を向け記事を読んでいる児童もいた。新聞コーナーは、2か所に設置している。



(3) 各教科等での授業の展開

(1) 4 学年 教諭 新田はぎ子

教科：国語科

単元名：「みんなで新聞を作ろう」

目標：「新聞の形式や特徴を知り、新聞作りに関心を持ち、意欲的に取り組むことができる。」

新聞の構成を理解するために、新聞や高学年作成の新聞を活用したり、河北新報社の記者の方をゲストティーチャーとして招いたりした。児童は、新聞の情報量の多さに驚いていた。学習を基に、誰もが読みたくなる新聞作りをした。



(2) 5 学年 教諭 川綱義朗 菅原徳晃
教科等：総合的な学習の時間
単元名：「考えよう 調べよう SDG s」
テーマ：

「SDG s を基にした
住みよい町にするために」

目標：

SDG s を通して、現代社会の様々な課題を学び、SDG s 未来都市に選定された東松島市を住みよい町にするため、自分なりの解決方法を考える。また、取材活動により新聞にまとめる活動を通して、SDG s の「持続可能な 17 の目標」への関心と実践意欲を高める。

◎活動内容

- ① 「私たちがつくる持続可能な世界」SDG s について考える。SDG s の 17 の目標ごとにグループ編成。
- ② 「住みよい町にするために」をテーマに、「住みよい町・東松島市」について考える。グループで追究したい課題を考える。
 - ・安全・安心な町づくり
 - ・気候変動に強い町づくり
 - ・不平等のない平和な町づくりなど 12 グループ編成
- ③ 河北新報社記者による出前授業 1
新聞の読み方や新聞の構成、東日本大震災で果たした新聞の役割について教えていただいた。児童は、より新聞を身近に考えることができた。
- ④ 河北新報社記者による出前授業 2
取材の仕方やマナー、取材活動の大変さを教えていただいた。児童は、取材に興味をもち、取材活動の準備をしていた。
- ⑤ 取材活動
市役所職員の方やHOPEみらいとし機構などのNPO法人の方にも

協力を依頼し、8 名の方々に取材活動を行った。

<主な質問内容>

- ・東松島市の防災対策について
- ・まちを活気づけるために行っている取組など 62 の質問を考えた。

⑥ 河北新報社記者による出前授業 3

取材したことを振り返り、新聞のレイアウトや記事の書き方、見出しを考え新聞作りをする。

⑦ 完成した新聞に基づき保護者に発表するとともに、地域の市民センター等に展示したり、地域に配布したりする。



4 成果と課題

- 児童が新聞に触れる機会が増えることで、新聞に興味をもち、幅広い情報を得て、知識量が増えた。
- NIE 活動を実践していくために、年間指導計画に基づき、新聞を活用できることが分かり、児童の学びを深める機会となった。
- 児童は、新聞作りを通して、地域の方との交流を深めるなど学校と地域を繋ぐ一助となった。
- NIE 事務局のバックアップにより、児童の学びだけでなく教職員の研修も行い、充実したNIE 活動ができた。
- NIE 活動の実践発表会で、他校の児童生徒と意見交流ができ、NIE 活動の児童の意欲が高まった。
- さらに教職員向けにNIE 活動を周知し、気軽にNIE 活動ができるように工夫していきたい。
- NIE タイムでは、記事を読むだけでなく記事のスクラップをしたり、SDG s に関する記事を集めたりして各学年でできる活動を増やしていきたい。

(担当 教諭 川綱 義朗)

新聞を身近に感じることができる NIE の取り組み

～日常的な新聞の活用や投稿を通して～

1 はじめに

「新聞への親しみ」をテーマに、昨年度から引き続き実践を進めてきた。「日常的」に、新聞が身近にある環境を整えることで、児童が「気軽」に、多くの活字に触れる機会を増やしていきたいと考えた。また、昨年度の実践において、成果があったと思われることは継続するとともに、各学級での新しいアイデアを出し合い、実践をしていくことにした。

以下には、4月～12月の活用（掲示・実践）について、紹介する。

2 実践の概要

(1) 「NIE コーナー」

職員室前の廊下に掲示板を設置しており、湊小学校が記事に掲載された新聞を掲示している。写真は令和3年12月に撮影したものある。12月9日に開催された「児童・生徒による意見交換会（オンライン）」で紹介した内容や発表の様子の写真なども掲示している。児童や来校者が足を止めて、眺める姿が見られる。



【職員室前の掲示板】

(2) 「新聞の読み比べ」（6年生）

高学年の教室がある廊下（4階）にコーナーを設置している。6年生の新聞担当の児童がおり、異なる新聞の一面が見えるよ

うにして、掲示をしている。画像は河北新報と産経新聞の比較である。新聞社によって、一面で大きく扱う記事が異なることに気付き、興味をもって新聞を見るようになってきている。



【比べてみよう！今日の一面コーナー】

(3) 「新聞タイム」（5年生）

毎週、金曜日の朝の時間に行っている活動である。朝に届いた新聞を大型テレビに映し出して、社会的に大きな事件や事故を児童と一緒に見ている。また、地元の新聞「石巻かほく」に掲載されているニュースに注目できるようにしている。さらに、児童が気になった新聞を切り取ったり、担当が選んだりした記事をワークシートに貼る。そして、児童が読んだ感想を書いている。ワークシートには、担当や友達からも感想を書いてもらい、交流することにつながっている。



【ワークシートに感想を書く児童】



【児童のワークシート】

(4) 「新聞リレー」(4年生)

毎日、児童が輪番で新聞記事を選ぶ。選んだ記事をノートに貼り、感想を書いて友達に渡している。友達がどんな記事を選んで、どのような思いをもったのかを知ることができる。また、友達の感想にコメントを追加

して書くことができ、楽しさにつながっている。

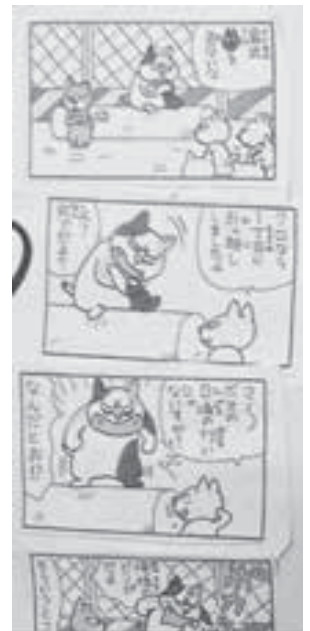


【新聞リレーのノート】

(5) 「4コマ漫画の並べ替え」(3年生)

新聞に掲載されている4コマ漫画を使った実践である。

4コマ漫画を切り取り、並べ替えを行う。起承転結で並んであったお話を自分で並べ替え、オリジナルストーリーをつくった。完成したストーリーを友達に紹介し合い、感想を伝えあった。自分と同じ並び順であっても、ストーリーが違うおもしろさがあった。



【並び替えた4コマ漫画】



【ストーリーを紹介する児童】

(6) 「ニュースあれこれ」(5・6年)

複数の記事を読み、キーワードを読み取るワークシートである。文章の構成を考えながら、感想を書いていく。児童は感想に対して、指導者からコメントをもらうのが楽しみになっている。また、同じ記事を読んで、友達がどのような思いをもったかを知ることができ、交流につながっている。



【廊下の壁面への掲示】



【指導者からの付箋を貼ったワークシート】

(7) 「新聞への投書」(5・6年)

河北新報の「声の交差点」に、5年生1名、6年生2名が投書した。新聞へ掲載され、多くの方々に自分の思いや考えを読んでもらうことが大きな喜びとなっている。



【掲載された児童の投書】

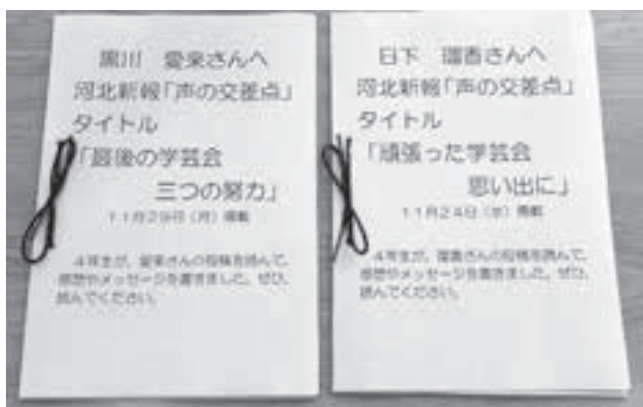
(8) 「投書を読んで」(4年生)

新聞に掲載された投書をワークシートにして、他学年の児童が読めるようにしている。下級生が、上級生の投書を読んで、様々な気付きがある。また、教室に届く河北新報の「声の交差点」に目を通すようになってきている。

投書を載せたワークシートを冊子の形にして、掲載された児童へプレゼントしている。受け取った児童は、笑顔を見せ、下級生と上級生の交流にもつながっている。



【投書を載せたワークシート】



【掲載された児童へのプレゼント】

(9) 「紙面での交流」(6年生)

昨年度、「声の交差点」に掲載された児童の投書に対して、福島県会津若松市在住の方が、紙面上でコメントを寄せた。それを契機に、文通が始まり、交流が続いている。6年生が修学旅行で福島県会津若松市の鶴ヶ城を訪ねた際には、会いに来ていただき、校長と6年生の児童、会津在住の方が対面を果たすことができた。紙面を通じて、心温まる交流へと

つながったことは、とてもうれしいことであった。



【鶴ヶ城を背景に記念撮影】

(10) 「宮城県 NIE 研究大会」

～児童・生徒の意見交換会～

オンライン開催で、6年生の代表児童3名が参加し、日常的な新聞の活用について、報告した。中学校や高等学校の実践には、今後の活用の参考にもなることがたくさんあった。発表を聞いた後には、中学生や高校生へ向けて、しっかりと感想を伝えることができた。



【参加校の発表を聞いている場面】

3 おわりに

自然に新聞を読む児童が増え、社会へ目を向けるようになり、視野が広がってきた。また、教員や児童が自発的に新聞活用のアイデアを出し合い、実践してきたことで、新聞への親しみが増した。

「日常的」に、そして、「気軽」に活用するという視点が、「新聞を身近に感じること」ができることにつながったと感じる。今後も継続して、実践を積み重ねていきたい。

(担当 教諭 相澤 洋之)

新聞に親しみ、楽しく活動するNIEの実践

1 はじめに

本校は松島町のほぼ中央に位置し、全学年が単学級の全校児童145名の学校である。

実践指定校初年度である昨年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、6月からの授業開始となり、授業日数や学校行事等が大幅に縮小、または変更された。

その中で1年目は、教員自身が先行実践等に学び、試行錯誤しながら取り組む年と位置付け、教員も児童も「新聞に親しむ」ことを第一に考えて取り組んだ。児童は新聞が掲示されているという今までになかった環境に興味を持ち、新聞に抵抗を感じることなく見たり読んだりすることができた。

2年目の今年度は昨年度の経験を生かし、新聞をより積極的に学習に取り入れ、教員の創意・工夫を生かしながら実践に取り組んだ。

2 実践の概要

(1) 教員研修の実施

1年目は教職員全員でNIEについての理解を高めていくために、「NIEガイドブック」を購入し、それをテキストにして学んだ。また、職員会議終了後に「ミニ研修会」を毎回開いた。

2年目はミニ研修会を1学期で終了し、その後は随時情報交換をするようにした。「こんな新聞記事を見つけた。」「この記事は授業に使えるのではないか。」など教職員間での会話が増え、指導のアイデア等を共有していった。

(2) 新聞コーナーの設置

1年目は玄関前に新聞コーナーを設置した。全児童が一番目にする場所はどこかを考えての選定である。玄関前は、登下校時はもちろん、業間や昼休みの外遊びや外体育などで必ず通る場所(＝何度も目にする場所)である。児童が新聞を身近に感じるためには新聞がいつも目に入る場所が必要と考え、設置した。児童の反応

はとてもよく、誰かが立ち止まって新聞を読んでいると、周りの友達もそれにつられて見たり、「何読んでいるの?」と会話が弾んでいる様子も見られた。

2年目は2階手洗い場脇にも設置した。先述した(1)の教職員間の情報交換の中で、ある職員から



「児童が手洗いを待つ間に新聞を読むのではないか。」というアイデアを出したのがきっかけである。さらに図書室にも設置し、新聞を手にとって見られるようにした。この試みも児童の興味をひき、より多くの場面で新聞に触れる機会が増えた。

(3) 付箋の活用

1年目は掲示された記事を読み、自分が気に入った記事に自分の名前を書き、貼るという取組をした。慣れてきたところで、付箋を大きなサイズに替え、感想などのコメントを書いて貼るようにした。



2年目もその活動を継続した。さらに、授業場面では友達が選んだ記事を読み合った時に付箋に書いて貼るといった活動も行った。



(4) 新聞を活用した授業

1年目は年間指導計画の中で新聞が使えるような場面を選び、朱書きした。

2年目は新しくその学年を担当した担任がそれを参考にすることで新聞の活用をより計画的に行うことができるようになった。

また、総合的な学習などで学んだことを1枚新聞にまとめるようにした。1年目にも行っていたので、より洗練された新聞作りを行うことができた。

(5) オリンピックの新聞の活用(2年目)

オリンピックが日本で開催され、聖火リレーをこの目で見るができるのは極めて貴重な経験である。松島町では全校児童がオリンピック聖火リレーの応援を行うために、6月20日は日曜日であったが、振替授業日とし、全校で応援する体制をとった。その際、オリンピックのすばらしさを学校としてどのように児童に伝えていくかが課題となった。その中で新聞の活用こそが有効な手段なのではないかと考え、以下の実践を行った。

① 日本地図を用いた聖火リレー記事の掲示

今、聖火がどの場所を通っているのかを日本地図上にシールを貼りながら掲示を行った。また、その周りを囲むように聖火リレーの記事や写真を掲示した。

児童は毎日日本地図を見ながら、「今、北海道だ。」「近くまで来た!」など会話をしながら話を弾ませていた。

聖火ランナーの写真を貼ったコーナーは、児童の他に、学校にみえるお客様も足を止める場所となった。聖火ランナーすべての方の笑顔がすばらしいからである。あるお客様からは「見ているだけで思いが伝わってきます。」「(新型コロナウイルス感染が広がり)オリンピックへの盛り上がりが欠けているように



感じていましたが、心が明るくなりました。」などの感想をいただいた。また、児童も「このランナーたちが聖火を繋いできたから松島にもやってくるのだ。」という気持ちになり、聖火応援への期待が膨らんでいくのを感じた。

② オリンピック号外新聞の活用

児童会の運営委員会がオリンピックで感動したこと、学んだことの募集を行った。それに関連させて新聞の



号外の掲示を行った。号外は見出しが大きく、本文も大きな字で読みやすい。また、写真もすばらしいものばかりで、掲示するだけで児童は記事やコメントをよく見る姿が見られた。

(6) 全校スクラップ展覧会の実施(2年目)

新聞のスクラップ活動はこれまで各学年で行っていたが、家庭も巻き込み、NIE活動に理解・協力していただくために実施した。

まず、児童は新聞を読み、気になったり面白く感じたりした記事を選んで切り取り、ワークシートに貼った。次に記事を選択した理由と分かったこと・思ったことなどを記入した。担任がコメントを書き、その後は家庭に持ち帰り保護者にもコメントしてもらうようにした。集まったシートは廊下に掲示し、お互いに見合うようにした。保護者のコメントは児童にとっても励みになった。また、教職員からも好評であった。授業参観ではたくさんの保護者に見ていただいた。保護者からは「子供が選んだ記事で会話する機会を持つことができた。」「我が子の関心がどこにあるのかを知る手がかりになった。」などの感想が寄せられた。



1年生

① 新聞に触れる～新聞ってなあに？～（朝の会）

1年生は読み書きを始めたばかりであり、これまで新聞を読む習慣はもちろん、新聞を手にとったこともない児童がほとんどであったため、まず「新聞に触れる」ところからスタートした。朝の会の時間を使い、1年生が興味を持ちそうな記事や、その日のトップニュース、今学習している内容に関連する記事などを選んで紹介してきた。紹介した新聞記事はしばらくの間教室内に掲示した。文字は読めなくても、教師が声に出して読むことと、絵や写真といった文字以外の情報から記事の概要を理解していったようだ。そのように日常的に新聞に触れることを通し、新聞が身近なものとなり、家庭でも新聞を読んだり話題にしたりする児童も出てきた。



② 絵・写真を見て～カッコいい！きれい！直感で選ぶ～（学活）

新聞を広げて真っ先に入ってくる情報は、食べ物、風景、スポーツ、漫画などの写真や絵であった。まず写真や絵を手掛かりに記事を選び、それを一緒に読んで聞かせる活動を通して内容を理解した。友達がどんなことに興味を持っているかを知る機会にもなった。



③ 記事を選んで一言感想～思い浮かんだ言葉を拾って～（国語）

1年生にも理解しやすい記事をあらかじめ担任が選んでおき、そこから選んだ記事に感想を書く活動を行った。他者の思いや考えを知り、自分も思いや考えを持つ姿から、新聞は思考を鍛えるツールになっていると感じた。



2年生

① かたかなでかくことば（国語）

国語の単元で、「片仮名で書く言葉」について学習した。片仮名で書く言葉にはどんなものがあるか確かめ、身の回りから、片仮名で書く言葉を探して書く活動を行った。

主に、子供新聞の記事から探し出すこととした。探す過程で、多くの記事に触れ、記事の内容についても考えながら片仮名を書いている様子が見られた。国の名前や動物、スポーツなどの言葉の他にニュース等のタイムリーな言葉を好んで書き写したり、意味を教え合ったりする姿が見られた。



② まいごになった赤ちゃんくじら（道徳）

生きものなかよし大作せん（生活）

読書活動をしていると子供たちは自然や動植物に関するものを好んで選んでいる姿がよく見られる。生活科での経験や命について考える道徳の授業などでも自分たちの体験を元に学習に取り組んでいる。そこで、新聞の記事の中から動植物や恐竜など、テーマを絞って新聞記事を紹介し合う活動を行った。好きな動物の記事が重なってしまった場合は無理せず共同で紹介することとし、新聞を読むことへの抵抗を減らした。

記事の選択の場面から、互いの興味のある記事について話したり、読めない字を教え合ったりするなどの交流が見られた。また、友達の選んだ記事について自分の意見や体験を話す積極的な姿が見られた。



3年生

① 蒲鉾新聞を作ろう（総合）

松島蒲鉾本舗多賀城工場見学で学んだことや、体験したことをまとめる学習で「蒲鉾新聞」作りに取り組んだ。

新聞の構成を考えるために、本物の新聞を使って、見出しや本文があることを確認した。また、写真や表などの資料があると、記事の内容をより分かりやすくしていることにも気付かせることができた。

新聞の構成を参考にしながら、工夫して作成した「蒲鉾新聞」を使って、2年生に向けて学んだことを発表することができた。



②新聞記事から分かったことを伝えよう（学活）

一冊の新聞から、気になった記事を探して読み、分かったことを友達と伝え合う活動を行った。

漢字が読めず、苦戦する子供たちが多かったが、生き物の記事や新型コロナウイルスの感染状況など、興味のある分野の記事や時事関連の記事について、意見交流をしている様子が見られた。

また、子供たち同士で、お互いの興味関心の違いを知る機会になり、事象の見方や考え方の広がりを感じることができた。

③新聞を読もう（課外）

朝の活動の時間に読書をする代わりに、新聞を読む時間を設定した。

初めは、新聞を広げることも不慣れな様子だったが、次第に慣れ親しみ、どこにどんな記事があるのか、きちんと理解しながら読むことができるようになるなど、新聞の構成が分かるようになり、楽しんで記事探しができるようになった。



4年生

① みんなで新聞を作ろう（国語）

国語の「みんなで作ろう」の学習で、学校に関する記事を記事にする活動をした。

この単元の中で実際の新聞を使った活動を、次のように取り入れた。

まず、新聞にはどのような記事があるのかを探す活動を行った。児童は、その日の出来事やニュース、天気、テレビ番組表などの記事が載っていることに気付くことができた。

次に、記事にはどのような工夫があるのかを探す活動をした。児童は、文字の大きさに



違いがあることや、1つの話題が写真や他の話題と混じらないように区切られていること、丁寧な言葉遣いで文章が短いという特徴を見つけることができた。児童が見つけた特徴から見出しや割り付けを詳しく教えることで、実際に新聞を書く時に取り入れることができていた。

実際の新聞を手元に置きながら記事を書く活動をしたことで、児童は新聞に触れる機会も増え、どんな風によくか見通しを持って学習を進めることができた。



② 自主勉強で新聞スクラップ

新聞に興味を持つ児童が増え、学校で新聞記事を切り取り、その記事についてまとめるという自主勉強を行う児童が増えた。選ぶ記事はオリンピックに関する記事から政治に関わる記事まで様々である。記事やインタビューの内容を読んで「〇〇に興味を持ちました。」「〇〇という言葉は初めて聞いたのでもっと調べてみたいです。」と感想等を書く児童がおり、新聞を通して児童が様々なことに興味、関心を広げることができたことが分かった。

5年生

① みんな知ってる？ どう思う？

～NIE コーナー（課外）

朝刊から担当が記事を選び、掲示している。



【掲示する主な記事】

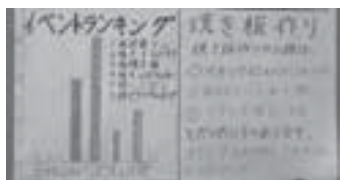
- ・社会科や家庭科などで学習している内容にかかわる記事。
- ・宮城県や松島町に関する記事。
- ・その日のトップニュース。

【児童の反応や効果】

- ・授業で学習した「フードロス」や「食糧自給率の低下」についての記事から、実際に行われている具体的な取組を知ることで、「自分には何ができるか」など、主体的に考える反応が見られるようになった。
- ・「子育て世帯への臨時特別給付」についての記事を掲示したときは、他学年の児童や教職員も掲示板に注目し、共通の話題でたくさんの人が交流する姿が見られた。

② 様々な形態、書式による新聞づくり（総合）

5年生の学校行事である野外活動のまとめとして、2つの形態による新聞づくりを行った。



- ・個人によるB4判原稿用紙での新聞づくり
- ・4人グループによる模造紙での新聞づくり

【児童の反応や効果】

- ・個人新聞の良さをグループ新聞に生かすために、それぞれの個人新聞を比較して、見出しの効果や文章表現などの大切さに気付くことができた。
- ・わかりやすく正確に伝えるためにグラフやイラストを活用していた。実際の記事や新聞紙面を参考にしてデザインについて話し合っていた。

6年生

① 修学旅行新聞を作ろう（総合）

修学旅行で体験したことや感じたことを新聞形式でまとめる活動を行った。

まとめる活動に入る前に、実際の新聞を見て、構成や見出しについて確認した。紙面の上部に主となる記事が配置されていることや、見出しが読み手の興味を引くように工夫されていることなどに気付くことができた。

新聞を参考にすることにより、児童が作った新聞では、構成のバランスを工夫したり、イラストや写真の配置を工夫したりするなどの様子が見られた。また、相手に問いかける言葉を使ったり、文字の大きさを変えたりするなど、見出しの質も向上した。

② 興味のある記事を切り抜こう（学活）

興味のある記事を切り抜き、それに対する自分の考えや感想を書く活動を行った。

初めは、スポーツ欄や大きく写真付きで載せられている記事に目が行く児童が多かったが、友達を選んだ記事をお互いに見せ合うことにより、投書欄があることに気付いたり、地域のニュースに目を向けたりすることができる児童が増えてきた。

また、記事を切り抜きながら友達同士で回し読みをして感想を交流し合ったり、記事の内容について知っていることを教え合ったりするなどの姿も見られた。



③ 新聞のコラムを読もう（課外）

週に1回程度、家庭学習の音読として、新聞のコラムを読ませる活動を行った。

未習の漢字も多く、初めは内容を捉えきれない児童が多く見られたが、次第に難しい漢字も推測して読めるようになり、概要がつかめるようになってきた。

特別支援学級

① 新聞で遊ぼう（図工）

新聞に興味・関心を持たせるために、体全体で楽しめる活動を取り入れた。

初めは新聞を敷いて寝る姿が見られた。しかし、活動が発展してくると、新聞を「ひねる」「丸める」楽しさを覚え、最後は全員でオリンピックの聖火を作ることができた。

「新聞は、いろいろ使える」ことを学ぶことができた。

② 片仮名を探そう（国語）

新聞から片仮名を探して赤鉛筆で○で囲む学習を行った。

「オリンピック」「パラリンピック」「コロナ」「アメリカ」「インド」「シュート」などの片仮名をたくさん見つけて子供たちは大喜びであった。

③ 児童の興味・関心がある記事の提示

ある日、「先生、「土砂」って知ってる？」と聞かれた。熱海の土砂災害をテレビで見て言葉を覚えたのである。教師はその記事が載っている写真を見せた。道路が寸断され、家屋が崩れている写真を食い入るように見ている。漢字は読めなくても、新聞記事が大きく扱っている様子を確認することができた。

④ 記事を貯金していこう（学活）

「切り抜いた記事を集めよう」という貯金作戦を継続して行った。

児童にとって新聞が「分からない紙」から「いろいろなことが書いてある紙」と認識が変わってきていることに大きな成長を感じている。



3. 成果と課題

（1）成果

・「学校で新聞を読んでいますか」という質問に対して1年目は49%、2年目は63%となり、新聞を読むことに対する意欲・関心が伸びた。

また、「付箋に書いてコメント書きましたか」についても1年目の57%が2年目は69%と伸びた。自主的に新聞を読み、自分が気に入った記事について、自分の考えを書こうという主体性が高まってきているのを感じる。

・新聞に対する認識の変化は教職員にもあてはまる。実践指定初年度のスタート時は「新聞は小さい字で読めない漢字も多く、本当に新聞を読むことができるのか。」と不安に思う教職員が多かった。しかし、実践を積み重ねると、「どの局面で新聞が使えるか。」等の発見があり、また担任の工夫で自由に行うことができるので、「楽しく実践できた。」という声が多くなった。

・新聞の掲示版をコミュニケーションの場として活用することができた。児童同士はもちろん、教員と児童が対等な関係で記事の内容について率直に感想を述べ合う場を作ることができた。児童が掲示版に貼られた新聞についてどう思っているか、などをアンケート等で詳しく調べ、さらに活用できれば、掲示版は人間関係を育くむ場の1つになるのではないかと考える。

・教職員の指導のアイディアを尊重したので持続可能な活動ができた。来年度以降も同様規模の活動が継続できると考える。

（2）課題

・実践指定校を終えた来年度からの継続した取組が大切であると考えます。新聞の掲示版をコミュニケーションの場としてさらに活用させていきたい。

・NIEの活動のメリットを引き続き各種便りやホームページで発信していくとともに、児童自身が「新聞は役に立つ」と家の人に言えるような取組を今後していきたい。

（担当 教諭 秋場 文東）

新聞に毎日ふれる環境を

1. はじめに

本校では昨年度から NIE 実践指定校となった。1年目は、国語や算数などの教科授業の中で新聞を活用する場面はないか各自考え、実践を行った。

2年目の今年度は、NIE 担当3人の担当学年である4年生、特別支援学級、5年生を対象として、個人研究という形で進めていった。

2. 実践の概要

(1)4年生

①<4年>学級活動での活用

今新聞を取っている家庭が少ないため、新聞に親んでもらうために毎週河北新報の「かほびょんプレス」を配り、朝読書の代わりとして活用した。子ども向けの内容ということもあり、興味を持って読む姿が見られた。また、読んだ中で気になった記事や内容を、朝のスピーチで児童に発表させたところ、「なるほど。」「そんなのが載っていたのか、もう一回見てみよう。」など、さらに興味を深めるきっかけとなっていた。同じ記事を発表した児童もいたが、前の児童とは違う視点で読んでいたことも興味深かった。

②<4年>総合での活用

総合で川について学んだことをまとめる新聞を作成する際に、新聞名や見出し、記事、絵の配置などのレイアウトを考える例として新聞を活用した。実際の新聞を見て、いくつ記事が載っているのか、記事の書き方はどのように書かれているのか、見出しの大きさや文字のレタリングはどう表現されているのかなどを確認し、自分の新聞作りに生かしていた。見出しは端的に分かりやすく書かれていることに気づき、自分の書いた新聞と見比べて修正する児童もいた。

③<4年>国語科での活用

国語「広告を読みくらべよう」では、薦めたいところや狙っている年齢層によって広告の色使いや写真、キャ

ッチコピー、レイアウトなど、同じ商品でも全く違う広告になっていることを学ぶ際に、新聞を活用した。その広告は何を伝えたいのか、どの部分を強調したいのか、その広告を見てどんな印象を持つかなど、各新聞の広告を探してノートにまとめる活動を行った。教科書のような同じ商品だが内容の違う広告は見つからなかったが、教科書以外の例として新聞を活用したことで、実生活の中でも本単元で学んだことが利用されているという学習意欲に繋がったと思う。



④<4年>外国語活動での活用

アルファベットを学ぶ单元の中で英字新聞を活用した。まず、新聞の中から教師が指定したアルファベット1つを制限時間内に何個見つけることができるかを行った。次に A~Z、a~z までのアルファベットを書き出し、制限時間内に新聞の中から何種類見つけることができるかを行った。最後に、隣同士でお互いにアルファベット1つを指定し、制限時間内に何個見つけ出せるかを行った。一部の児童からは、自分が知っている英単語を見つけたり、写真や一部の英単語から記事の内容を推測したりする子も見られた。児童はなかなか接することのない英字新聞に興味を持ち、夢中になって取り組んでいた。



(2)特別支援学級

①<特別支援学級>国語科での活用

特別支援学級3年生2名を対象に、「想像を広げて物語を書こう」の单元と関連付けて学習を行った。

子供たちは新聞の4コマ漫画に興味を持って読み、「これ、面白い」、「どれどれ?」と声を掛け合っている姿が見られたため、新聞を使って取り組むことにした。また、グーグルクロームのスライド機能を活用し、デジタルブック風4コマ漫画にして4コマ目のセリフを考える活動を行った。



まずは新聞の写真1枚を使い、場面設定を考える学習を行った。初めは予想で日付やお店を言っていたが、「時」は、行事や季節などでも表せること、「場所」は、施設や町、~の中など、幅を持たせることで、設定を考えられるようになった。

4コマ漫画の実践では、4コマ漫画に興味があったこともあり、4コマ目のセリフが溢れるように次々と思いついていた。初めは「ありがとう」などの単語だけだった児童も、ユニークな文章を考えられるようになり、発想に柔軟性が出てきた。

設定を考える際、「町」という言葉は知っていたが、イメージと結びついていなかったことも分かり、写真を使うことで呼称と写真をリンクさせて教えることもできたのはよかった。



どんまい猫



(3) 5年生

① 国語「新聞記事を読み比べよう」

宮城県 NIE 推進委員会小学校部会からの援助を受け、1人に1紙ずつ本物の新聞を使い、授業を行った。

第1・2時

「新聞探検をしよう」

実際の新聞を使って、新聞について学んだ。

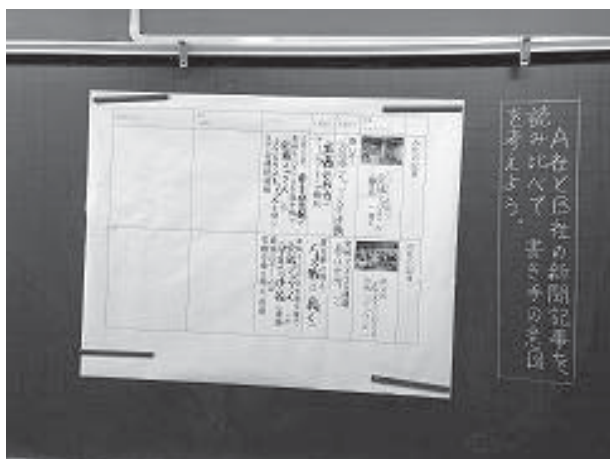


(アナログとデジタルの融合)



GIGA スクール構想により、1人に1台ずつクロームブックがあるので、グーグルフォームを使って、授業を進めた。

第3時



教科書の新聞記事を使って、読み比べをした。

(4) 新聞紹介の工夫

① 新聞コーナー

児童が目にしやすいように、図書室前に NIE コーナーを設け毎日展示した。楽しみにしている子は、朝、職員室まで取りに来るようになった。



② オリンピック・パラリンピックの切り抜き

昇降口に、切り抜きの掲示を行った。



③ 元旦の記事の読み比べ

タイムリーな掲示を心がけた。



3 成果と課題

<成果>

- ・新聞に興味を持ち、学習活動に生かしていた。低学年では、新聞の中から興味のあるものを見付け出す力が身に付いた。高学年では、单元ごとにどのように利用できるかをよく考えるための材料として活用する力が身に付いた。
- ・新聞に親しみを持つ児童がととも増えた。

<課題>

- ・各教科の学習に繋がるような記事を紹介し、児童が学習内容に興味を持てるように活用したかった。
- ・特別支援学級や低学年では、一見したときの「できそう!」と思える写真や文字の量が意欲に影響するため、单元ごとにどのように活用するかを考え、新聞の記事を厳選する必要がある。
- ・今年度も NIE 担当のクラスでしか実践することができなかった。来年度は全校児童がもっと新聞を身近に感じられるように、各社ごとの新聞コーナーの設置だけでなく、コーナーにある新聞を手にとって読んでもらえるような工夫をしていく必要がある。

(担当 教諭 吉岡 健悟)

新聞を活用した探求活動～SDGsの取組を通して～

1 はじめに


本校は、今年度からNIE実践指定校となった。実践は、NIE担当者が所属する学年の3学年を中心に行った。

利府町では、町内の小・中・高・特別支援の学校が連携した取組を毎年行っており、通称ブラザーシップと呼んでいる。今年のブラザーシップのテーマは「SDGs（持続可能な開発目標）に関する取組」ということで、利府町では、SDGsにまつわる取組を各学校で考えている。そこで、本校では、SDGsとNIEを関連付けさせる取組を中心に活動を行った。

2 実践の概要

(1) 新聞閲覧コーナーの設置

本校では、学年ごとの取組と学校全体の取組を行った。学校全体の取組として行ったのは、新聞閲覧コーナーの設置である。本校の3学年の家庭での新聞の普及率を調べると、132名中94名、つまり約7割の生徒の家庭では新聞を購読していないということが分かった。また、新聞を購読している家庭でもいつも見ている記事は、テレビ欄や4コマ漫画など、偏りがあることが分かった。そこで、生徒全員が通る職員室前に、新聞閲覧コーナーを設置し、




新聞に親しみをもってもらうことから始めた。生徒だけでなく先生方の利用も見られ、新聞に触れるきっかけとなる取組となった。


(2) NIEを活用した総合学習

学年での取組として、3年生では、「実社会でSDGsがどのように実践されているか」を、新聞を使って調べた。この活動は「総合的な学習の時間」3時間を使って行った。

1時間目は、日本国内でどのようなSDGsにまつわる取組を行っているかを新聞記事の中から探した。学年のホールに200部以上の新聞を並べ、興味のある項目や記事を切り抜く作業を行った。生徒の関心も高く、着目する記事のジャンルも多岐にわたった。



2時間目は、切り抜いた新聞記事をまとめる活動を行った。1時間目で切り抜いた新聞記事の要約や自分の感想をワークシートにまとめた。中には、見やすいようにイラストなどを交えてまとめる生徒もおり、新聞記事を通して自分の考えを深める貴重な時間となった。



3時間目は、自分の作ったSDGs調査プリントをグループで発表した。SDGsの17の目標を活用し、それぞれの目標に関連する内容ごとにグループを編成して発表した。他の人の意見を聞くことで、ものの見方や考え方を広げることができた。また、発表後はまとめた資料を学年のフロアに展示した。発表では聞くことができなかった他のグループの展示物を見る生徒も多く、新聞記事を身近に感じる機会をつくることができた。



3 成果と課題

(成果)

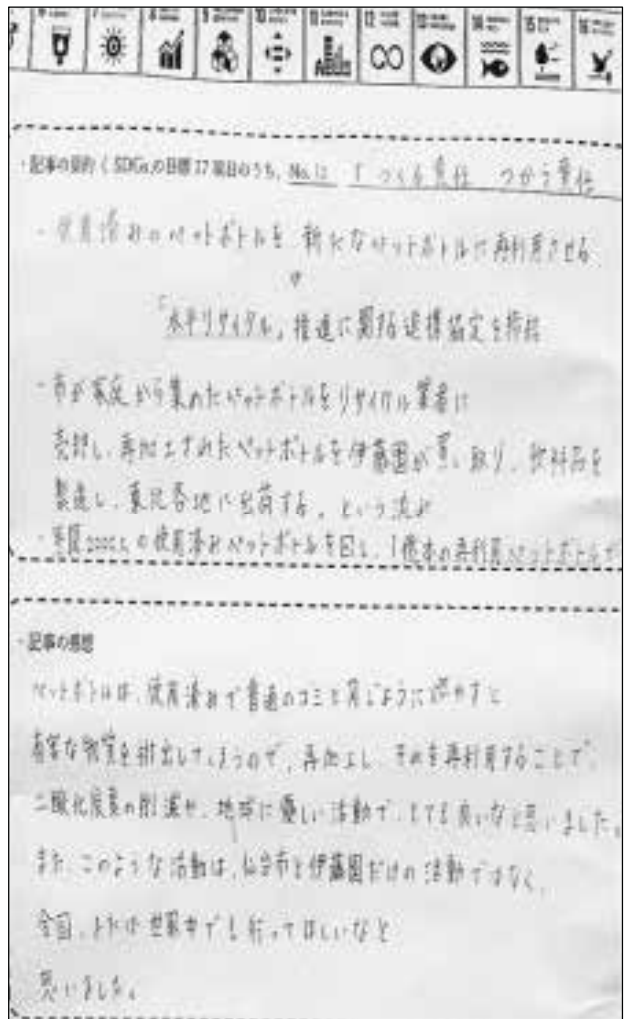
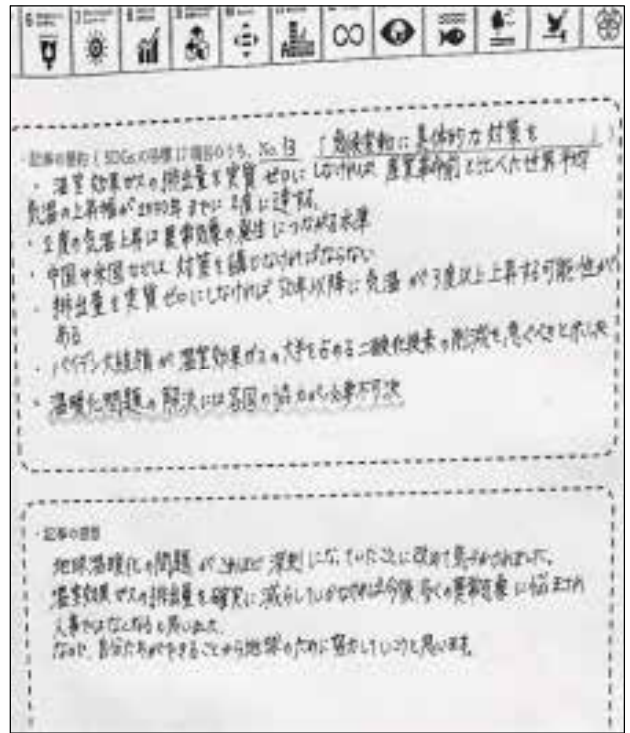
- ・生徒の振り返りを見ると、「地球温暖化の問題がこれほど深刻になっていたことに、改めて気づいた。」「ペットボトルを再利用する活動を企業だけでなく、全国で行ってほしいと思った。」など、今回の活動を通して、新聞の有用性やSDGsの必要性を感じさせることができた。
- ・持続可能な開発目標に関する学習では、新聞記事を通して知識や理解を深め、社会問題に対する意識を高めることができた。
- ・興味のある新聞記事の中から、自分たちにできるSDGsの取組を考え、グループごとにまとめる力が身に付いた。



(課題)

- ・新聞閲覧コーナーの設置については、新聞を読む生徒が固定化してしまったことが課題である。設置したことを各学級で呼びかけたり、設置場所を定期的に変更したりするなど、工夫する必要があると感じた。
- ・今年度は、NIEを担当する教員の学年を中心に取組んだ活動が多かったため、新聞記事を学習活動に生かす場面が少なかった。今後は、学年だけでなく学校全体で取り組む活動を検討していきたい。

(担当 教諭 山家 渉)



【生徒が作成したワークシート】

自ら考え、考えを広げる NIE の取り組み

1 はじめに

本校では、学校教育目標「郷土を愛し、未来を切り拓く心豊かでたくましい生徒の育成」のもとに、心身ともに健康で、進路実現に向けて「志」をもち、進んで学習する生徒を育てることを目指している。本年度は、「主体的に学ぶ力と態度の育成」を重点事項とし、目標の具現化に向けて取り組むこととした。そこで、生徒が課題の解決に向けて調べたことを基に自ら考え、他者に説明したり議論したりする表現活動を通して、自ら考える習慣を身に付けられる学習を設定することとした。生徒一人一人が自分の考えを他者に説明したり議論したりする中で、考えが広がる楽しさや課題をよりよく解決する有効性を感じることは、主体的に学びに取り組む態度を育むためには欠かせないと考える。

自ら考え、他者に説明したり議論したりする表現活動をより充実させるために、新聞を活用した。以下に実践を紹介する。

2 実践の概要

(1) ディベカッション

本校では、朝の帯活動として全校でディベカッションを行っている。ディベカッションとは、ディベートとディスカッションを組み合わせた本校独自の造語である。一つの記事について、投稿欄の意見なども参考にしながら、生徒一人



【資料1】ディベカッションの様子

ディベカッションで思考力を鍛える 【4月21日・22日】

高校の男女共学化に 賛成・反対

アンケートでは、「制服は失われる」とか、たか、逆に共学化した方がより個性が出ると思う。

2023年 2021.7.29 河北新報「+7」より

東北学院中・高
「自然な流れ」制服廃止も

高松中学校よりアンケートへ寄せられた声
★共学化に対する意見
- 選択制が増えるのは良いことだ
- 中高生のうちから同年代の異性と接する機会があることは大事だ
- 異の多様化を目的とする、共学を強要は賛成してない
- 共学には賛成の意見がある、なんでもかんでも共学するのは考えものだ
- 共学によって校風も伝統も失われる、共学に賛成してない
※「共学」とは男子校・女子校のこと

本日のディベカッションの感想

男子校の共学にしてはいい、それは、女子校の共学、制服や伝統が失われてしまうのは良くないと思う。

ぜひ制服も廃止してほしいから、制服も共学してほしい。制服は個性に個性はいいのでぜひ共学してほしい。

【資料2】ディベカッションのワークシート

一人が賛成・反対の意見を持ち、グループで話し合いをする。

今年度は、「高校の男女共学化」や「就職試験の面接官がAIになること」についてディベカッションを行った。

活動の最後にディベカッションの感想を書かせた。生徒からは、「私は賛成だったから反対の人の意見を聞いて『そういう考えがあるんだ』と思いました。考えを深めることができました」「私は賛成だったけれど、班のみんなで意見を言ったり、他の班の意見を聞いたりして、自分が思いつかなかった考えがたくさんあった。〇〇さんの『制服の廃止』の反対理由については思いつきませんでした。こんな風にみんなで話し合うことは大事だと思います」「私は賛成の意見

です。異性とかかわることで、差別を無くすことにもつながると思いました」などの感想があった。

(2) 気になる記事を紹介

新聞に慣れ親しみ、視野を広げることを目的に、記事を学級で紹介する実践を行った。グループで新聞の中から気になる記事を選び、朝の帯活動で紹介した。



【資料3】記事を探す様子

気になった理由は何か、選んだ記事からどのようなことを考えたのかを学級で伝え、記事の内容やグループの考えを共有した。紹介した記事は、職員室前の新聞コーナーに掲示し、他の学級で紹介された記事を見られるようにした。

(3) 記事进行分析する実践

情報を多面的に読み解き、自ら考える習慣を身に付けることを目指し、記事进行分析の実践を行った。全校生徒に新聞を一部配布し、SDGsに関連する記事を探して分析させた。記事の分析の仕方やワークシートは、朝日新聞社の『SDGs マッピング』で記事分析ガイド「新聞でSDGs ワークシート (A3)」を活用した。



【資料4】ワークシート

ワークシートは、学級毎にファイリングし、職員室前の新聞コーナーに置き、他の学年・学級の生徒がどのような記事を探し、分析したのか見られるようにした。

生徒からは、「SDGs についてもっと調べてみたい」「持続可能な社会について、深く考えることができた」などの感想が寄せられた。

3 成果と課題

(1) 成果

- 新聞コーナーの設置や記事を探したり分析したりする課題を意図的に設定したことで、生徒が新聞に触れる機会が増えた。また、新聞に興味を持つ生徒も増えた。
- 全校生徒対象に行った学習についてのアンケート（2021年12月20日実施。152名中142名回答）では、ディベカッションにおけるグループでの話合いで、自分の考えや意見を言うことについて「よくできた」「できた」と回答した生徒の割合は全体の94.4%であった（資料5）。記事の内容を理解し、自分の考えを他者に説明したり議論したりすることを通して、生徒一人一人が自分の考えを持つことができた。



【資料5】学習アンケートの結果（一部抜粋）

(2) 課題

- 新聞を進んで読み、情報を得ようとする生徒は少数である。新聞を読むのが楽しいと感じる実践を考えていきたい。
- 自分の考えを学校外にも発信することが今後の課題である。様々な意見を得ながら、主体的に学ぶ力と態度を育成したい。

（担当 教諭 小川 康輔）

NIE 2年目の実践報告

～新聞を使った学習指導をとおして～

1 はじめに

本校は令和2年よりNIE実践指定校になった。昨年度1年目は、生徒たちが新聞をとおして活字に親しむことをねらいとし実践をスタートさせた。主な実践例として河北新報社から記者の方に来校していただき、生徒たちを対象とした新聞づくりに関する講座を3日間行った。また、図書室に新聞閲覧コーナーを設置し、いつでも新聞が生徒たちの目にふれることができるように環境を工夫したことなどが挙げられる。その結果、新聞に興味を持ち読もうとする生徒が増えたことから一定の成果があったと言えるであろう。

今年度は2年目の実践にあたる。①昨年度までの取組を継続しながらさらに新聞に興味を持たせる。②各学習活動において新聞を活用することで読むこと、書くことの力を高める。この2点を主なねらいとして取り組んだ。私が3年生の授業を担当していることもあり、新聞を高校受験に活用させたいという希望もあった。以下、本校の2年間のNIE活動報告をまとめた。

2 実践の概要**①新聞閲覧コーナーの設置**

昨年度、生徒対象のアンケート調査で、本校の家庭における新聞購読の割合が4割に満たないことが分かった。本校には昨年度まで、生徒たちが新聞を目にするような機会や場所がなかった。家庭で新聞を購読していない状況では、新聞にまったく触れないまま卒業していく生徒がいるということになる。この状況を少しでもなくすため、新聞が多くの子供に触れるよう図書室の一角に新聞閲覧コーナーを設置した。新聞を置くだけでなく机と椅子を用意し、ゆっく

り新聞を閲覧することができるように工夫した。昨年度の実践報告でも触れたが、物珍しさからか1人が読み始めると、2人3人と引き連られるように新聞を読み始める生徒が増えていった。

今年度は、さらに生徒たちを引きつける方法はないか、図書支援員の方と相談し教員や支援員の方が気になった記事や生徒が興味を持ちそうな記事を選び、閲覧コーナーに貼り出した。地元の小さな記事やスポーツ、芸能等の記事を貼っておくと効果があった。



新聞閲覧コーナー

②関連記事の掲示

昨年度、生徒たちに新聞を身近に感じてもらうために、本校や地域に関する記事を切り抜きラミネート加工したものを廊下に掲示した。今年度も引き続き掲示をすることにした。昨年度までは掲示しなかったような地域の小さな記事や地区の大会の結果を拡大して掲示することで、自分や友達の名前を見つけ、喜んでいる生徒の姿を見ることができた。この取組も生徒が新聞に興味を持つきっかけになったのではないだろうか。



関連記事の掲示

③講演・研修会（生徒）

本年度も個人新聞づくりに挑戦した。昨年度は、河北新報社より現役の新聞記者である丹野綾子氏、末永智弘氏に来校していただき、1年生の生徒たちに新聞づくりに関する講義をしていただいた。今年度は学校行事との都合がつかないため、講演の機会を設定することができなかったが、昨年度教えていただいたことを受講した教員が経験を活かし、新1年生に教授した。来年度以降も講義を受講した教員が受講したことがない教員、生徒に教授していくことが必要だと感じた。そして、現役の記者の方から直接教えていただくことは我々教員にとっても生徒にとってもたいへん勉強になる良い機会である。ぜひ、活用していきたい事業である。



講演・研修会（生徒）

④講演・研修会（教職員）

N I Eの活動を周知し、より良いものとするために本校職員、本市教育長、教育委員会、近隣の学校の職員に声を掛け、教職員対象の研修会を昨年度実施した。内容は、読売新聞社の池辺英俊氏から「新聞づくりをする上でのニュース、取材のポイント」と題した講演。河北新報社の末永智弘氏からは「見やすい新聞づくりのコツ」をワークショップ形式で取り組みながらご教授いただいた。池辺氏の講演は興味深く、参加者からは「楽しむことができた」、「活用法が参考になった」、「今後の授業にぜひ活かしたい」といった前向きな内容の意見が寄せられ大いに刺激を受けた。末永氏からは実際に使用された新聞写真を提示され、各々が見出しを考えるとといった頭と手の両方で取り組む実践的な学びを得ることができた。この講演・研修会の様子は河北新報にも取り上げていただき、近隣小中学校や高校にも本校のN I E活動の取組を周知することができた。



講演・研修会（教職員）

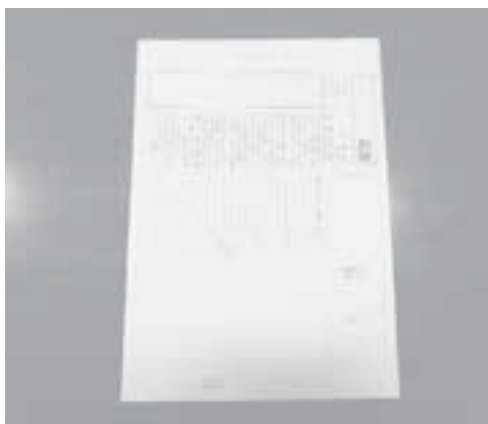
3 各学習活動での取組

①国語科

各学年で新聞を活用した学習を行っているが、ここでは3年生の国語科の授業における実践を紹介したい。特に3年生は高校受験を念頭に授業を展開している。宮城県公立高校の国語の問題において作文は必須である。問題演習には新聞の記事は最適であり、特に読者による投稿コーナーなどは中学3年生にとっては取り組みやすく分かりやすいと思われる。記事を読ませ、

こちらが指定した時間や字数、構成にそって生徒に書かせる活動を続けてきた。初めは時間も字数も守ることができない生徒が多かったが、継続していくうちにほとんどの生徒がこちらの指示したとおりに書けるようになってきた。繰り返し読んだり、書いたりすることで、読むことについても、書くことについても抵抗感がなくなってきたことは間違いない。書いた作文の内容は、こちらが期待するレベルまではまだ至らないが、4月当初、読むことも書くことも嫌いで、苦手だと言っていた生徒が時間内で読んだり、書いたりしている姿から大きな成長を感じる。

また、今年度は新たに新聞のコラムコーナーを読んで表題を考え、その表題を付けた理由を指定字数で書くことにも挑戦した。表題を付けるためには何度も記事を読み、理解しなければならない。また、読み手や聞き手を納得させ、伝わるよう理由を述べなければならない。朝日新聞では毎月同様の取組を行っており、作品を公募している。高校生等の若い世代でも多く投稿しているようである。本校でも団体で投稿し、挑戦させてみたい。新聞社の投稿コーナーに本校の生徒の名前が載ることを期待したい。今後こういった取組を一過性のもので終わらせるのではなく、授業の中で様々な生徒の表題や理由を発表させたり、聞いたりしながら読む力や書く力を育てていきたいと考えている。



ワークシート

②教科外

ここでは教科以外での実践を紹介したい。N I E活動に積極的に名乗りを上げてくれた学年主任がいる。毎週定期的に発行している「学年だより」の中のワンコーナー(N I Eコーナー)で新聞を活用した取組を行っている。具体的には、学年担当の教員が適当に記事を選び出し、その記事を読んで生徒が感想を書くという至ってシンプルなものである。毎号、数名の生徒の感想文が学年だよりに掲載されるので、自分の感想文がいつ掲載されるのか楽しみにしている生徒がいる。また、保護者も同様に楽しみにしている。



学年だより

4 成果と課題

N I E活動をとおして

①成果

- 明らかに活字や新聞に触れる機会が増えた。
- 世の中の動きに興味を持つ生徒が増えた。
- 読むこと、書くことに抵抗を感じる生徒が減った。
- 生徒だけでなく、教員も新聞を活用することにより授業に幅が出てきた。
- N I E活動の実践に取り組む教員が増えた。

②課題

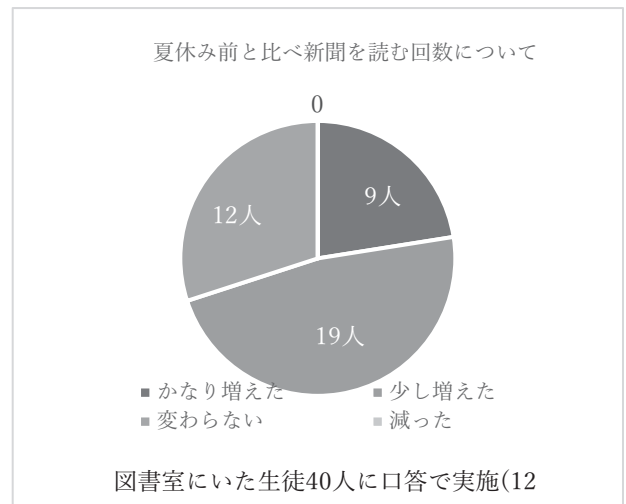
- コロナの影響もあり、2年間の継続した検証を行うことができなかった。
- 他教科での新聞を使った取組がまだ少ない。

- 生徒の取組の様子から、読むこと書くことの力が付いてきていることは分かるが、具体的な数値で示した方が良かった。
- 授業では教科書があくまで中心になるので、教科書と新聞教材とのバランスをとることが難しかった。

5 おわりに

令和2年度、3年度の2年間、NIE実践指定校として新聞を使った取組をさせていただいた。コロナの影響もあり、当初の計画通りにはいかない面も多々あったが、参加することができて良かったと思っている。特に外部から講師の方々に来校していただき、新聞づくりのノウハウや裏話を聞くことができたことは私にとってたいへん貴重な経験になった。また、生徒たちも現役で活躍する新聞記者に直接、新聞づくりのアドバイスをいただいたことは今後、文章を読んだり書いたりするときに生きてくるのではないだろうか。そして何よりも休み時間に新聞を手に取り、読んでいる生徒の姿が見られたことは喜ばしいことである。今後、このような生徒の姿が多く見られるようになれば、生徒たちは読む力・書く力が付くだけでなく、ものの見方・考え方も変わってくるであろう。

最後に2年間、河北新報社をはじめ、事務局の方々に大変お世話になりました。この紙面を借りてお礼を申し上げます。ありがとうございました。



新聞閲覧コーナーで新聞を読む生徒は増えた

(担当 教諭 吉田 啓介)



他者と共に考え、議論しながら、自分の未来を創造することができる生徒の育成 ～道徳に志教育とNIEを関連付けた実践を通して～

I 主題設定の理由

本実践は、第1章総則の第1の2の(2)に示す道徳教育の目標に基づいている。よりよく生きるための道徳性を養うためには、道徳的諸価値を理解し、物事を広い視野で多面的・多角的に考える力が重要である。そして、自己を見つめながら人間としての生き方についての学びを積み重ね、道徳的判断力、心情、実践意欲と態度を育てることができる。

道徳教育の目標を達成するためには、特別な教科道徳を要として、全教育活動を通じて行わなければならない。インターネットや人工知能を活用する社会を迎えたこの時期に、新型コロナウイルス感染拡大防止への対応は、私たちの生活様式を含め、社会全体を大きく変えることになった。しかし、このような時代であるからこそ、正しい情報を効果的に活用して問題を発見し、協働で考え、議論しながら、主体的に自分の考えを形成していく学びが重要である。そこで、本実践では、道徳の価値項目を「志教育」と「NIE」に関連付けて継続的に学びを深めることを手立てとし、目標の達成を目指している。

【手立て1】

志教育の3つの視点で考え、議論する道徳

「人とかかわる・よりよい生き方をもとめる・社会での役割をはたす」を掲げている志教育では、生徒一人一人が社会的・職業的自立に向けて、他者と考え議論しながら自分の生き方を考え、強い心と高い志をもって、自分の未来を創造するための能力と態度の育成を目標としている。この目標の実現に向けて、学級の枠を超えた学年道徳・全校道徳の実施や地域との連携・交流を生かした豊かな学びを構築する。

【手立て2】

NIEで道徳的価値や人間としての生き方の学びを深め、未来を創造する道徳

社会の縮図とも言われる新聞を活用することで、今、世の中で起きている様々な分野の情報をタイムリーに知り、考えることができる。新聞記事には、興味のわく見出しや写真なども掲載され

ているので、生徒も記事に迫りやすく、議論が深まる。知識や経験のある人々の意見や体験に触れながら、自己の生き方を見つめ直す機会にもなる。学習指導要領で求められている思考力・判断力・表現力や情報活用能力を育みながら、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、自分の未来を創造する力を育む。

コロナ禍において、ソーシャルディスタンスという言葉が生まれ、生徒同士が直接関わりにくくなっている。このような非常事態であるからこそ、教科や特別活動などの中で有効な手立てに基づき、全教育活動を通じて道徳教育を行うことが重要である。

本実践では、志教育とNIEを手立てとし、特別な教科道徳を学校の教育活動全体と関連付けながら授業実践を行いたい。そして、生徒一人一人が自己を見つめ、他者と共に考え、議論しながら人としての生き方について学ぶことができれば、自分の未来を創造することができる生徒の育成につながると思う。

II 実践発表

1) 主題名

岩中SDGs

ミャンマーの子供たちに文房具を届けよう

2) 本時の目標

新聞記事を通して、国際社会の問題（紛争・貧困・難民）に関心をもち、SDGsと関連付けながら世界の平和と幸せのために自分たちにできることを考え、貢献しようという態度を育てる。

3) 志教育・NIEとしてのねらい

新聞記事を通して、今、現実には起きている紛争・貧困・難民などの社会問題を知り、国際理解・国際貢献について考え、議論することができる。また、ミャンマーの取材に尽力している新聞記者との交流やミャンマー協会への文房具の寄付活動などの実体験を通して、さらに理解を深め、社会の一員として果たせる役割について考えることができる。

4) 資料として扱った新聞記事

【事前指導】

- 河北新報 朝刊 令和3年4月7日(水)
ミャンマーの人々にコメを
- 河北新報 朝刊 令和3年5月13日(木)
日本の皆さん 祖国助けて

【本時】

- 河北新報 令和3年6月18日(金)
3度失敗 最後まで葛藤
- 朝日新聞 令和3年7月13日(火)
ミャンマー 五輪参加表明一人だけ

【事後指導】

- 河北新報 令和3年9月14日(火)
ミャンマーに支援の輪 文房具こどもの希望に
- 朝日中高生新聞 令和3年9月5日(日)
難民と認められ日本で新たな出発
- 河北新報 令和3年9月15日(水)
ミャンマー難民選手入団 フットサルYS横浜

5)資料の内容

事前指導では、NIEタイム(毎週水・木)の時間を活用し、国軍の弾圧により混乱しているミャンマーの状況を伝える記事やクーデターで食事のままならないミャンマー人にコメを配って奮闘する日本人起業家の生き方を紹介する記事を使って学ぶ。

本時の全校道徳では、勇気をふりしぼってミャンマーの平和を訴え続ける2人のスポーツ選手の生き方に焦点をあてた記事を使って全校生徒で考え、議論する。

事後指導では、難民申請後のスポーツ選手が強い決意をもって努力する姿を伝える記事やミャンマーの子供たちのために取り組んだ岩中SDGsについての記事を取り上げ、約半年間の学習を振り返る。

6)全体の学習過程と生徒のワークシートの記録

【事前指導①:NIEタイム(5月上旬)】

題材：日本人起業家奮闘

～ミャンマーの人々にコメを～

混乱が続くミャンマーで食事のままならない人達に米を配る活動をしている日本人についての新聞記事を読み、世界の諸情勢に目を向け、国際協力や国際協調の視点で考えることの大切さに気付かせる。



〈生徒のワークシートの記録〉

- 拘束されるリスクもあるのに頑張っていてすごい。
- 「今ここ(ミャンマー)にいて何もしないのは

あり得ない」という高田さんの言葉が心に響いた。

【事前指導②:生徒総会議案(5月下旬)】

題材：岩中SDGsについて考えよう
～日本の皆さん祖国助けて～

国軍の弾圧で混乱しているミャンマーの現状を取材した新聞記事を読み、岩中SDGsについて議論する。取材に尽力した新聞記者と座談会も行い、ミャンマーについての理解を深め、ミャンマーの支援方法について具体的に考える。



〈生徒総会における生徒の声〉

- 初めてミャンマーの現実を知り悲しい。できることがあれば協力したい。
- 家を焼かれてかわいそう。助けてあげたい。平和になってほしい。
- ミャンマーのSOSを受け止め、動くことが大切だと思った。

【実践:岩中SDGs～ミャンマーの子供たちに

文房具を届けよう～(5月～9月)】

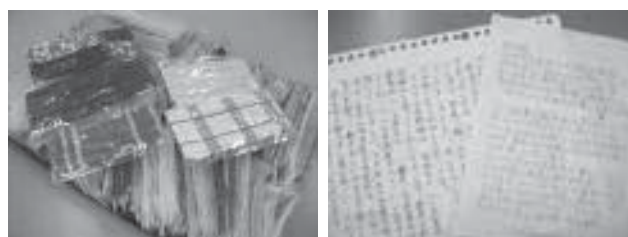
- 手作りの小さなポスターから始まった文房具支援



- 集まった文房具の仕分け作業



- 仙台の皆さんから届いたマスクと励ましの手紙



●ミャンマー協会を通じて文房具支援



【本時：全校道徳（7月中旬）】

題材：岩中SDGs

～2人の選手の思いから学ぼう～

〈本時の流れ〉

- ①全校生徒や地域の皆さんから寄付された文房具と応援メッセージの手紙を紹介する。
- ②2人のミャンマー出身のスポーツ選手（唯一東京五輪に参加を表明したバドミントン選手・難民申請をしたサッカー選手）の新聞記事を読み、考えを伝え合う。

発問1：賛否両論の中、なぜ五輪参加を表明したのだろう。（バドミントン選手）

発問2：葛藤の末、どんな思いから難民申請を決めたのだろう。（サッカー選手）

発問3：私達は、どんな気持ち・行動を大切にすべきだろう。



〈生徒のワークシートの記録〉

○ミャンマーが差別のない平和な国になってほしい。

○文房具でミャンマーの子供たちに笑顔届けたい！

○2人の勇気ある行動に感動した。思いやりのある行動が大切だと思う。

○強烈な批判に負けず、自分の意志で行動してすごいと思う。少しでもミャンマーの人達の力になりたい。

【事後指導：全校集会・NIEタイム(9月下旬)】

題材：岩中SDGs

～文房具ミャンマーの子どもの希望に～

ミャンマーの子供たちに伝えたい想いをまとめた「ことばのギフトカード」と文房具をNPO法人宮城・ミャンマー友好協会へ届けたことを全校集会で報告した。その後、この取組が紹介された新聞記事を読み、岩中SDGsを振り返った。難民申請をして日本で生きる決断をした選手が日本のフットサルチームへ入団することを報じた新聞記事も読み、全校生徒で祝福のメッセージカードを作成した。



7) 評価

新聞記事を通して国際社会の問題（紛争・貧困・難民）に関心を示し、世界の平和と幸せのために自分たちにできることを考え、貢献しようという態度をもつことができたか。

8) 成果

生徒は、新聞記事を通して、ミャンマーで起きている紛争の状況、貧困による苦難、難民問題などの情報をタイムリーに収集して学んだ。また、ミャンマーの取材に尽力している新聞記者との座談会や文房具を寄付して下さった方々との交流を通して、自分たちが果たせる役割を考え、地域の協力を得ながら、岩中SDGsを実践することができた。このように、生徒総会や全校道徳で、全校生徒が共通の題材を用いて道徳的価値を共有しながら学んだことで、生徒の国際理解、国際貢献における関心も高まったと考える。

Q ミャンマーへの関心	関心がある	関心がない
①事前指導前	16%	84%
②本時の学習後	79%	21%
③全ての学習後	82%	18%

Ⅲ 実践のまとめと今後に向けた課題

道徳教育及び道徳科に求められることは、生徒一人一人が多様な価値観に誠実に向き合い、他者と共に多面的・多角的に考え、議論しながら、自分の未来を創り上げるための道徳的判断力・心情・実践意欲と態度を育む道徳への転換である。

実践では、道徳の本時1時間の指導に収まらず、生徒の実態を踏まえながら、志教育の3つの視点（かかわる・もとめる・はたす）とNIEを手立てとし、事前・事後の指導を工夫した。生徒が各分野で尽力されている方々・地域の皆さんとかかわることで、広い視野から多面的・多角的に考え、議論することができた。実践の成果で示したアンケート結果からも、生徒一人ひとりが課題と誠実に向き合い、自己のこととして捉え、人間としての生き方につなげていることが理解できる。

新聞記事から得られるタイムリーな情報をもとに、志教育の3つの視点で道徳教育を進めていくことは、主体的・対話的で深い学びを実現し、生徒自身の未来の創造にもつながると考える。

今後の課題としては、中1～3年の道徳の教科書の題材を価値項目ごとにつながりを大事にして学びを進めることである。見えない心を育て、鍛えるためには1時間の授業では不可能である。つながりのある学びを構築し、生徒の道徳性を高めていく指導を工夫していきたい。

Ⅳ 学びの深まりにつながった活動

1) 新聞記者との座談会

①河北新報社 記者 佐藤理史氏

ミャンマーの紛争についての新聞記事（河北新報朝刊：令和3年5月13日「日本の皆さん 祖国助けて」）を担当した佐藤氏から、ミャンマーの現状を詳しく聞いたり、取材に協力してくれたミャンマーの皆さんの様子などについて教えてもらった。また、SDGsの観点から、ミャンマーに関する問題にどう向き合ったらよいのかについて、佐藤氏と語り合った。



②読売新聞東京本社 記者 住吉由佳氏

ミャンマー文房具支援や食品ロスの学習を振り返りながら、SDGsの観点から中学生にできることについて、住吉氏と共に意見を交わした。Mission、Action、Goal というステップを踏みながら、よく考えて行動し、学んだことを周囲に広げながら歩み続けることの大切さを理解した。



2) ピエ・リヤン・アウン選手との交流会

実践の本時で扱った新聞記事に掲載されていたミャンマー出身のピエ・リヤン・アウン選手（フットサル横浜YSCC所属）へ応援メッセージを送ったところ、オンライン交流（令和4年1月26日）が実現した。生徒会が中心となって取り組んだミャンマー文房具支援、本校の伝統行事（すずめ踊り・リズムなぎなた）について紹介した。その後、アウンさんの日本での生活の様子や今後の目標、祖国ミャンマーへの願いなどについて質問した。最後は、アウンさんへ岩中応援団がエールを送った。



Ⅴ 3年間のNIEを振り返って

生徒の学びの手立てにNIEを取り入れたことで3つの成果があった。1つ目は、世の中で起きている様々な分野の出来事をタイムリーに知り、考えることができた。2つ目は、知識や経験のある人々の生き方を知ることで、自分の生き方を見つめ直すことができた。3つ目は、NIEタイムの継続により、学習指導要領で求められている思考力・判断力・表現力が育まれたことである。

新聞記者が全力で取材した新聞記事をきっかけに学びを深め、自分たちにできることを日常生活で実践し、新たな学びや生き方につなげていくことは、生徒たちの“生きる力”を育むことにつながる。今後もNIEを取り入れた学びを継続していきたい。（担当 教諭 齋藤 美佳 星 千裕）

探究活動を中心とした NIE 活動の実践

1 はじめに

本校は、平成22年度より文部科学省から、第一期のスーパーサイエンスハイスクール（SSH）指定校として、様々な、特色のある教育活動に取り組んできた。さらに平成29年度からは第二期のスーパーサイエンスハイスクール（SSH）指定校として、理数科のみならず、普通科も含め、生徒自らの学びを大切に学習活動を中心に据えている。特に文系、理系の垣根を越えて総合的な学習活動に重きを置いて実践してきた。その中で、NIEの活動も活用しつつ、新たな教育活動を模索したものである。

2 探究活動での取組

(1) 概要

本校では、自らの学びを実践するものとして、特に理数科では「課題研究」、普通科では「探究」を位置づけ、様々な教育活動を実践している。

その中で特に、普通科の「探究」においてNIEの活動を実践したものである。

(2) 年間購読した新聞各紙の利用

学校内の図書館の司書の協力の下、NIEの活動の紹介も添えて、本校図書館に、購読した新聞を置くスペースを確保し、生徒が自ら、記事を調べることができるようにした。その際は、各学年の「探究」の担当者と連携し、「探究」の時間の年間の予定を考え、利用しやすい期間で購読することにした。また、長期間、生徒の「探究」の活動に利用できるように、購読する新聞は3社ずつ分け、3社の新聞の比較もできるようにした。

具体的には、本校では、5月の「三高探究の日」、11月の「グローバルサイエンスフェスタ（GSフェスタ）」、12月の「授業づく

りフォーラム」という、大きく3つの「探究」の活動の中での、生徒の発表の機会がある。それに合わせた、生徒自らの調査やポスター作成、発表のリハーサルの時間があるが、この予定に合わせた予定での新聞購読を行った。

生徒は、自由に利用し、「探究」の時間の自分のグループのポスターの発表に役立てることができた、と考えている。



(3) 1学年の「探究」の取組

「探究」においては、おおよそ、1学年後半から本格的に、自分の関心のあるテーマを考え、今後どのような分野を「探究」していきたいか決める。その後に、同じようなテーマを考えている生徒とグループを形成して、3学年前半までの「探究」のテーマを決め、本格的に調査、研究活動を行う。しかし、1学年の前半では、まだ具体的な段階ではない。そこで考えたのが、これからの「探究」活動のための意識づけであった。

具体的には、夏休み中の「探究」の課題として、5月から購読した各社の新聞の中でこれからの「探究」活動のために、関心のある記事を数点探し出し、その記事に関して、自

分が思ったことを記述し、夏休み明けに提出させた。

この課題によって、1学年の生徒たちは、これからの「探究」のテーマ設定に向けて、意識づけができたのではないかと考えている。

(4) 2学年の「探究」の取組

2学年は本格的に「探究」の活動を行う学年である。前述したように、すでに自分のテーマが定まり、類似のテーマを持つ者が集まり、話し合いが行われ、グループが決まっている。そして、話し合いの中で、グループの中の「探究」でこれから行うテーマも決まっている。

その中で、河北新報社の特別のご配慮もいただきながら、河北新報のデータベースを「探究」の生徒の活動に利用することにした。すなわち、2学年の「探究」の担当者から協力を受け、「探究」の年間の予定をあらかじめ調べ、その時間の度に、生徒たちが自ら、学校のPCや学校から貸与のiPadやクロームブック、自分のスマートフォンから直接、河北新報データベースにアクセスし、自分たちの「探究」のテーマに関わる新聞記事を調べることができるようにした。

生徒たちは、「探究」の時間に、自分自身で調べ、前述した、3つの「探究」の学校行事では、すばらしいポスターの作成、そして発表をすることができた、と考えている。生徒たちのグループあるいは個人の中には、学校外のポスターの出品や発表の機会をとらえ、応募し、各種の賞を受賞した生徒たちも多く出てきた。生徒たちが率先して、真剣に取り組んだ結果である。今後も、河北新報のデータベースを「探究」に活用させていきたい、と考えている。



3 おわりに

今後さらに、河北新報データベースを中心にどのように「探究」に向けて活用できるか検討していきたい、と考えている。また、次年度3学年においてどのようにこのNIEの活動を実践していくか、今後検討していきたい。

(担当 教諭 佐々木淳一)

～『SDGs』×『NIE』×『地域連携』～

本校では、総合的な探究の時間を毎週金曜日6校時に設定しています。今年度からは、全学年・全クラスに探究委員を設置しました。

探究委員は、総合的な学習の時間の事前準備の呼びかけ、作品等の回収などを主に行います。また、NIE委員会より提供される各社の新聞を事務室へ取りに行き、1年生と2年生の教室棟間に準備した新聞掲示スペースへ設置することも仕事の1つになります。

探究委員会は、概ね水曜日の昼休みに開催し、金曜日の授業についての連絡等を行います。

先生方の打ち合わせは、月に2回、放課後に開催される学年会において、担当者から授業指導案の説明があり、それをもとに授業が行われます。この場において、先生方の共通理解をはかっています。

今年度、私が担当する2学年のおもな活動は、次の4点となります。

- 1 新聞に触れる活動
- 2 小論文に関する活動
- 3 関西地域に触れる活動
- 4 日本の都道府県・市町村に関する活動

まず、1つ目の新聞に触れる活動ですが、前半時期と後半時期において、その取り組み方を多少変えています。

前半時期は、教師側でテーマ等を決めずに、自分がとにかく気になった話題を見付け、その新聞記事の内容を他者に紹介するといった内容です。そして、紹介された内容が、SDGsの17のどの目標と関連しているかをグループで考えさせます。生徒にはこの活動を通じて、社会で起こっている様々な出来事がSDGsの目標と大きく関わっていることを理解させたいと考えています。

後半時期は、東京オリンピック・パラリンピ

ックとSDGsに関連した新聞記事を見付け、その新聞記事の内容を他者に紹介するといった内容としました。このテーマは話題性もあり、生徒はたくさんの新聞記事を見付けることができ、比較的取り組みやすい活動であったと思います。ただ、競技結果を紹介するだけではなく、参加した選手の個性や、今まであまり興味関心を持たなかった競技や国・地域などにも触れることができ、前半時期よりも増して新聞が身近な存在になったと考えています。なかでも、SDGsの17の目標のうち、「ジェンダー平等を実現しよう」や「人や国の不平等をなくそう」について取りあげた生徒が多く見られました。

2つ目の小論文に関する活動は、探究活動を行ううえで必要な表現力、思考力、探究力の向上を目指して取り組んでいます。

まずは、小論文と作文との違いを理解し、どう書けば小論文になるのかを知り、より説得力のある小論文が書けるようになることを身に付けさせます。最後には、課題文の読解、要約の練習も行い、外部講師による小論文講演会や小論文模試にも挑戦させています。

3つ目の関西地域に触れる活動は、修学旅行と絡めた活動です。本校では、毎年12月に2年生が関西方面へ3泊4日の修学旅行に出かけます。その中に班別自主研修が1日行われています。その研修のため、どこへ、どんなテーマで、何をしにいくのかなどの事前準備を行い、実施後に後輩（1年生）へ研修の様子を伝える機会を設けています。

あいにく、今年度も関西方面への修学旅行が中止となりましたが、今年度は、もし訪問していたならば、どのような研修を行ったのか、または、後輩へのお薦めといった内容で活動を行いました。

生徒は、数名のグループをつくり、それぞれのテーマ、訪問先、その訪問先の魅力などを画用紙にまとめる、ポスターセッション形式で行いました。

2年生なので、日本史や地理で学習した神社仏閣、地域などを実際に訪問してみたいと考える生徒が多く見られました。

その他にも東北地方との食の違いについてまとめたグループもありました。

あまり身近ではない地域について、興味関心を抱かせる活動としては有意義なものであったと思います。完成した作品は、校内に掲示しています。

4つ目の日本の都道府県・市町村に関する活動は、これまでの探究活動をふまえたまとめた要素に位置付けています。

これまで身に付けてきた情報の収集や資料の見方などを用いて、日本全体から興味関心のある都道府県・市町村をグループ毎で選択し、それについて模造紙にまとめ、発表する活動を行います。

地域の選択はグループによってかなり異なります。あえて身近な地域である仙台市や富谷市などについて探究するグループや自分たちが進学先として希望する地域について探究するグループ、特色ある取り組みに関する新聞記事を見付け、そこからその地域についてさらに深く探究するグループなどさまざまです。

取り組みについては、グループごとに自分が担当する部分を決め、準備したもののどの部分を排除・採用し、さらに不足する資料についてはどのように収集するかなどを何度も繰り返しながら作品を完成させていきます。

また、作品に付け加える写真や図などのレイアウトや発表する方法などについても話し合いながら決めていきます。

本来は、クラスを取り払って自由にグループを作成させる方法で活動を行う予定でしたが、昨今の状況をふまえて、今年度も同じクラス内でのグループ作成としました。同様に発表についても学年全体ではなくクラス内で実施するこ

とにしました。

この取り組みから、自分がどんなことに興味関心を持ち、進学先や将来の職業としてどんなことを行いたいのかなどを具体的に考えさせる機会に結び付けたいと考えています。

生徒においては、この取り組みで学んだことを来年度の大学進学において、総合型選抜の自己アピール等に記載する者も年々増加しています。

このような2年生での取り組みを次年度は、日本の都道府県・市町村に関する活動から世界の諸地域に関する活動へ発展させ、グループ探究ではなく個人探究とし、スライドを作成させ、それをもとに発表する形式を行う予定です。

今回は、2年生と1年生の活動の一部についてここで紹介させていただきます。

<2年生：SDGsについて考える>

2年生は、昨年の2年生と同様に「SDGs（持続可能な開発目標）」について考えることをテーマに、探究活動をおこないました。最初に「SDGsとは何か」について、総合的な探究の時間担当者から説明を聞き、掲げてある「17の目標」にはどのようなものがあり、なぜそのような目標を掲げたのかについてグループで考えました。



その後、夏休みの課題として、自分が気になった新聞記事の切り抜きを2つ以上持ち寄り、その内容が「SDGsのどの目標と関連しているのか」について、グループで話し合いを行いました。生徒が持ち寄った新聞記事には、「東京オリンピック」に関連すること、「ジェンダー平等」に関連することなど様々であり、たいへん興味深いものが多数ありました。



その他の活動としては、今年度も関西方面への修学旅行が中止になりましたので、「もし関西方面の修学旅行が行われていたら自主研修で

どこを訪問したかったか」について、グループで調べ、画用紙にまとめるポスターセッションを行いました。

行き先をどこに定めるか、その場所を訪問したかった理由やその場所の魅力等について調べ、写真やイラストなどを取り入れながら各グループで工夫した作品を完成することができました。完成した作品は校舎内に掲示し、1年生などにも見てもらえるようにしました。

今後は、「日本のある地域について考える」をテーマに、再びグループで探究活動を進めていきたいと考えています。それに関連する新聞記事を探し、内容を読み取り、そこから新たな課題を見つけ出し、見つけ出した課題の解決方法を探究させていきたいと考えています。

＜1年生：社会課題の解決策を探る＞

1年生は「社会課題の解決策を探る」というテーマのもと、生徒自身が興味・関心に基づいて「課題」を設定し、外部人材との協働を図りながら探究活動に取り組んでいます。

情報収集の手段として、新聞を活用する場面を設けることが多かったのですが、本稿では『朝学習の時間を活用した新聞記事の紹介』『総合的な探究の時間』における情報収集の2点について、事例紹介いたします。

まず、『朝学習の時間を活用した新聞記事の紹介』についてです。

本校では、朝のSHRの前に10分間の「朝学習」の時間があり、金曜日に「新聞」の時間を設けています。5分以内で読める分量（500～600字程度）の記事を教員が選び、生徒に読んでもらった上で、思ったことや感じたこと等を自由に記述してもらう形で実施しています。



「孤立学生政治頼らず」「電力の地産地消再生モデル」「自治体によるパートナーシップ制度施行」等、取り上げた記事は多岐に渡ります。反響が大きかったのは、「ヤングケアラー」の問題を扱った記事（河北新報 2021 年 4 月 13 日）で、後日「ヤングケアラー」の特集の記事（毎日新聞 2021 年 5 月 17 日）を廊下に掲示し、考えを深めてもらいました。



続いて、『「総合的な探究の時間」における情報収集』についてです。先述のように、1 年生の「総合的な探究の時間」では「貧困問題」「エネルギー転換に関する問題」等、自身の興

味・関心に基づいて「課題」を設定し、その解決策を探る活動に取り組んでいます。情報収集の場面では、インターネット上に飛び交う情報を集めるだけでなく、「河北新報データベース」を活用しました。

1 年生の様子を観察していると、新聞等の活字媒体に触れる機会は多くないものの、新聞記事に関心を持つ生徒が増えてきたことを実感できます。進級後も新聞に触れる機会を与え、その活用方法を生徒とともに探っていきたいと考えています。

(担当 教育企画部
教諭 引地 功 佐々木貴芳)

楽しくNIE

1 はじめに

本校は、特進科、探究科、科学技術科の3学科を擁する学校であり、平成28年度からNIE実践指定校の認定を受け今年度で6年目となる。

初年度は、主に探究科の生徒たちに自分が興味を持つ記事だけでなく、時事的な話題にも触れさせながら、自ら考え、表現する力を育むことを目標に活動を行った。2年目はさらなる発展・拡充を図るため、探究科以外の学科や学校の委員会活動へNIE活動を取り入れた。3年目はそれまで行ってきた活動を踏襲しつつ、新たに「河北新報新聞記事コンクール」への応募や新聞大会への参加、定期試験や大学入試対策の小論文指導への新聞記事活用を行った。4年目は、高校1年生

(探究科、科学技術科)対象にNIEに関する講演、長期休業中の課題に新聞記事を活用し、学年全体でNIE活動に取り組むことで、年間を通して継続的な活動を目指した。5年目は、図書委員会の中からNIE委員を選出し、「河北新報新聞記事コンクール」や「オンラインによる意見交換会」に参加した。また、今までは主に国語や英語での教科指導の中に取り入れていたNIE活動を、新たに家庭科でも取り入れた。6年目は、国語科で新たに新聞の投書欄に投稿する活動を取り入れた。これまで以上にNIE活動が学校全体に広まりつつあるのを感じている。以下、本校の6年間のNIE活動の概要をまとめる。

2 実践の概要

2-1 NIEコーナーの設置

新聞が多くの子の目に触れるよう校舎1階の職員室前、探究科職員室前の2か所に「NIEコーナー」を設置している。日々届けられる新聞(河北新報、日経新聞、産経新聞、毎日新聞、英字新聞)や本校生に関する新聞記事、現在話題になっている記事を誰でも自由に閲覧できるようにした。また校舎や教室の壁には、各授業で生徒が取り組んだワークシートを掲示し、付箋を用意して、生徒が互いに自由に感想を書けるようにした。



図1 各職員室前のNIEコーナー
(平成28年度、令和2年度)



図2 ワークシートの掲示板と意見の書き込み(付箋)
(平成28年度)

2-2 教員研修

教員側のスキルアップを図るため、2016年7月20日に本校会議室にて、宮城県NIE委員会の齋藤昭雄氏、NIE教育コンサルタントの渡辺裕子氏をお招きして、ワークショップや新聞活用オリエンテーションを含む研修を行った。また、毎月の定例職員会議において活動報告を出している。(平成28年度)

2-3 NIEに関するアンケート

NIE活動を進めていくにあたって、生徒のNIEに対する興味関心を把握するために、1学年対象のアンケートを行った。アンケートは9月と1月の計2回行った。

1回目と2回目ともに「自宅では新聞を購読していない」と回答したのが約7割、「新聞を全く読まない」と回答したのが1回目約6割だったのが2回目はや

や減少し、「新聞を読む」と回答したのが約3割から約4割に増えた。「新聞を読むメリット」でもっとも多かったのは「社会事象に詳しくなる」「読解力が身に付く」「語彙力が身に付く」だった。一方「スポーツ面」を読むという回答が多く、今後は生徒たちが他の面にも目を通すよう教師側での工夫が必要である。

(令和元年度)



図3 NIEに関するアンケート

2-4 NIEに関する講演

生徒たちに新聞に対してもっと興味関心をもってもらうために、NIE委員会主催の講演を企画し、河北新報の丹野綾子氏に本校に来ていただいた。講演では本校生が載っている記事を例に出しながら、新聞とインターネットの違い、新聞を読むメリット、新聞の読み方等を話していただいた。講演後の生徒からの感想では、「今までは自分の興味があるところだけを読んでいたので、読み方を変えると興味がないところも面白く読めるようになるかもしれない」という感想があった。(令和元年度)



図4 NIEに関する講演の様子

2-5 NIE活動の目標設定

以下の目標を掲げ各授業、学年、委員会でNIE活動に取り組んだ。

①新聞に親しむ。

- ②新聞を継続的に読むことにより、自分自身の興味・関心の幅を広げる。
- ③新聞の構成や役割を知り、情報を主体的かつ批判的に読み取る力を身に付ける。

2-6 各授業での取組

初年度から継続して国語科、英語科で取り組んでいる。5年目は家庭科でもNIE活動を取り入れている。

(1) 国語科

小論文対策の一環として新聞記事を使用した。教員側で選択した新聞記事に対する生徒各自の考えをグループ内で共有させ、各自の考えの幅を広げさせた。その後、記事に対する自分の意見を意見文としてまとめさせた。この意見文の中から何点かを河北新報新聞記事コンクールに応募した。(平成30年度：探究科3年)



図5 扱った新聞記事

1年を振り返るために、毎年日本漢字能力検定協会が発表する「今年の漢字」の記事を読ませ、生徒たちが中学校から高校に進学した1年間を振り返る機会をもたせた。(令和元年度：探究科1年)



図6 扱ったワークシート

新聞記事を3通りの教材として扱った。

- ①定期試験の問題に「スマホ依存」の記事を引用し、生徒の意見を書かせる問題を出題した。
- ②学校に届く新聞を使って、課題と意見をまとめさせるグループ活動を行った。
- ③小論文対策のためのワークシート作成に使用した。(平成30年度：科学技術科3年)



図7 扱った新聞記事

環境問題を扱った評論文と SDGs を関連付けて展開する授業では、河北データベースを使用し、地元の地域社会で SDGs について取り組んでいる実践例を調べた。(令和2年度：探究科3年)



図10 掲載された意見文

(2)英語科

コミュニケーション英語Ⅱの授業で、英字新聞を用いたワークシートに取り組んだ。まずは、記事の英文を写し、キーワードとなる単語を抜き出し、最後に記事の見出しを英語でつけた。生徒たちに馴染みのある記事を選んだためか、英文を読んでいる途中で「分かった!」と叫ぶ生徒もいて、楽しんで取り組んでいた。

(平成29年度：探究科2年)



図8 扱った新聞記事

探究科3年生対象の現代文演習の時間に、生徒自身が新聞記事を選び、意見文を書いた。河北新報社の「声の交差点」に投稿し、掲載された意見文を授業内で共有した。生徒同士で「どんなところが良かったか」「どんなところを参考にしてみたいか」等の意見交換を行った。その結果、生徒は自分が書いた意見文が新聞に掲載されることで励みになり、「書く」ことのモチベーションにつながった。進路決定後も生徒たちが学習意欲を保つための新たなチャレンジに結びつく活動になった。(令和3年度：探究科3年)

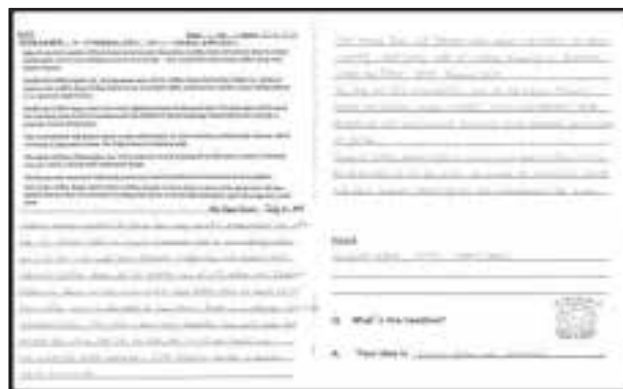


図11 生徒が取り組んだワークシート

コミュニケーション英語Ⅰの授業では、新聞のテレビ欄以外の記事からカタカナ英語を抜き出す作業を行った。また、抜き出した単語を調べさせ、自分たちが何気なく話している言葉の真の意味を理解させるとともに、英語への興味・関心を引き出す意図で実施した。クラスを数グループに分け、制限時間を設けて取り組ませたところ、「探して」書き出すという作業を新鮮に感じたためか、生徒たちは積極的に取り組み、特にノルマを課したわけではないが、抜き出す単語の数を競うグループも見られた。また、自分で見つけた単語には思い入れが強いのか、普段の授業の際に教科書に出てくる新出単語を調べるよりも熱心に調べている様子が見られた。

(平成29年度：科学技術科1年)



図9 掲載された意見文

コミュニケーション英語Ⅰの授業で、教科書で扱ったトピックを深め、自分の事として捉えるために新聞記事を使用した。授業で扱ったトピックに点字に関することが出てきた。点字を意味する単語は生徒たちに馴染みがなかったが、校内で購読していた英字新聞に点字に関する英文記事があった。教師側でその英文記事を読むための質問を用意し、ワークシート形式で生徒に取り組みさせた。(令和元年度：探究科1年)



図12 生徒が取り組んだワークシート

コミュニケーション英語Ⅱの授業では、教科書で扱ったトピックをSDGsの観点から深め、自分の事として捉えるために新聞記事を使用した。生徒はそれぞれのレッスンで扱ったトピックについて、英文や日本語のサイトをチェックした後、河北新報データベースで新聞記事を検索し読み込むことでより理解を深めた。調べたものはスライドにまとめ、班ごとに英語でプレゼンテーションを行った。(令和2年度：探究科2年)

(3)家庭科

食との関わり方を再確認させるために、授業で新聞記事のコラム欄を読み込み、生徒の食への意識を高めた。

またコンビニエンスストアで販売している食品に関しての新聞記事を使用し、SDGsの観点から食と経済活動の関係を生徒に考えさせた。(令和2年度、3年度：2学年全科)



図13 扱った新聞記事

2-7 学年での取組

小論文対策として、段階的に取り組むために夏と冬の長期休業中にNIEに関する課題を出した。ワークシートは、A3用紙両面印刷をし、1時間程度でまとめられるものである。生徒は分からない語句等を端末を使用して調べ、要点を読み取りながら時事問題に対して考えを深めた。(令和元年度：1学年 探究科、科学技術科)



図14 生徒が取り組んだワークシート

小論文対策として希望者にスクラップノートを用意し、本校で購読している新聞記事から気になる記事を選ばせ、要点や意見を書く取組を行った。自分が気になる記事を継続的に収集することで、その分野に対する知識・理解を深め、自分の進路選択の一助とするだけでなく、小論文や面接対策に役立てた。

(令和2年度：2学年 探究科)

小論文対策として、担当教員が新聞記事をジャンル毎に分類し、職員室に準備した。生徒は自分の志望する学部に関連した新聞記事を自由に閲覧することができ、自分が受験する学部への知識・関心を深めるのに役立った。(令和2年度：3学年 探究科、科学技術科)



図15 ジャンル毎に分類した新聞記事

2 学年、3 学年探究科・科学技術科対象に小論文、面接対策として「河北データベース」と「朝日時事ワークシート」（小論文のテーマから関連記事を検索する）を利活用した。朝の読書の時間に各自の端末を使用して取り組ませ、各テーマに関する知識を身に付けた。（令和 3 年度：探究科、科学技術科）



図 1 6 扱った新聞記事

本校探究科 1 年生 2 名の意見文が読売新聞の投稿欄に掲載された。新聞への投稿は生徒たちの励みになった。（平成 2 9 年度）



図 1 8 新聞に掲載された生徒の意見文

2-8 委員会活動での取組

より多くの生徒たちが新聞に親しみを持ち、記事に対して各自の意見を述べる力を伸ばしていけるよう、教科や学科の枠を超えた委員会活動でも取り組むこととした。

本校の委員会活動の一つである ICT 委員会は、各クラスから選出された生徒たちで構成されている。それらの生徒たちが輪番で、取り組みたい新聞記事を選び、その記事に関するワークシートを作成した。ワークシートの内容は、言葉の意味調べ、記事の内容に対する自分の考えとその理由を述べるものとなっている。

（平成 2 9 年度）

また、図書委員から NIE 委員を選出し、スクラップノートづくりを行いながら、意見文の新聞社への投稿や発表活動を行っている。（令和 2 年度、3 年度）



図 1 7 生徒が取り組んだワークシート

(2) 新聞大会への参加

平成 3 0 年度度の全国新聞大会は仙台での開催が決定していたことから、河北新報社のご厚意で本校生 2 0 名ほどをご招待いただき、各クラスから選出された生徒たちで構成される ICT 委員会の生徒たちを参加させた。当日は、ベストセラーとなった「AI vs 教科書が読めない子どもたち」の著者で国立情報学研究所の新井紀子教授の講演が予定されていた。そこで、参加する生徒たちには事前に、新井紀子教授の著書について書かれた新聞記事に目を通させ、自分の考えをまとめるワークシートに取り組みさせた。参加後の生徒たちの感想には、「事前に新聞記事を目にしていたので、講演の内容が良く理解できた」といった記述が見られた。（平成 3 0 年度）



図 1 9 ワークシートの新聞記事

2-9 その他

(1) 新聞社への投稿

(3) オンライン意見交換会への参加

2年生の図書委員からNIE委員を選出し、NIE活動を行った。各自が気になる新聞記事をスクラップし、河北新報新聞記事コンクールに応募した。入賞は逃したものの、生徒にとってアウトプットを行う良い機会となった。また、宮城県NIE研究大会「児童・生徒による意見交換会」に令和2年度、3年度と参加し、2年度は河北新報の「ヤングケアラー」に関する記事、3年度は朝日新聞のVRに関する記事をきっかけにメンバー内で話し合い、調べたものをスライドにまとめ「バーチャルリアリティーの発展が教育に改革をもたらすか？」という題で発表した。

(令和2年度、3年度)



図22 扱った新聞記事 (令和3年度)



図20 扱った新聞記事 (令和2年度)



図21 扱った新聞記事 (令和3年度)

3 成果と課題

初年度は手探り状態で活動を行ってきたが、徐々に取り組む教員が増えてきた。6年目となる今年度も校内でNIEの言葉が日常的に飛び交うことがさらに多くなり、これまで以上に活動の広がりを感じる年になった。生徒たちも調べ学習や小論文対策に新聞を利用することが多くなり、新聞が身近な教材として活用されていると感じている。

教科での活動の他にも、NIE委員を選出し、定期的に活動を行う委員会活動へ「NIE」を広げることができた。生徒は自分の興味がある記事を継続して読むことでその分野についての理解を深めた。昨年度から新たな試みとして企画された「児童・生徒によるオンライン意見交換会」に今年度も参加した。ある生徒からは、「新聞を読むことが好きである」、「NIE活動で自分が今まで考えてこなかったテーマについて考えることができた」、「NIE活動を通して今まで気付かなかった問題や社会の現状を改めて発見し考えたことが良かった」といった感想があり、生徒にとって良いアウトプットの機会となった。

新聞記事をきっかけに生徒同士が話し合い、自分とは違う視点に気付き、互いの考えを深めることで生徒は自分の意見というものを持てるようになる。さらに、意見文としてまとめ、スライドを使って発表することで、次の学習への意欲につながったことは大変意義深い活動になっていると感じる。今後も活動を継続し活発な意見交換を進めていきたい。

(担当 鈴木 理恵教諭)

V 第26回NIE全国大会（札幌）

（1）パネルディスカッション

新しい学びを創るNIE

—家庭、教室、地域を結ぶ—

コーディネイター

フリーアナウンサー・監修キャスター
松本 裕子 様

パネラー

札幌市
アスパラ農家
内山 佳奈 様

札幌道新高校
教師
古畑 理絵 様

札幌道新高校
2年
為国 結菜 様

札幌道新高校
2年
浜田 亮太 様

北海道
農家
鈴木 翼 様

北海道
スクールサポートスタッフ
鈴木 桃子 様

学校法人 田中学園 理事長
元北海道日本ハムファイターズ選手
田中 賢介 様

<それぞれにとって新聞とは>

司会 皆さんにとって新聞はどんな存在ですか。

内山 2世帯6名の家族で新聞を4紙取っている。新聞は身近な存在で農業の業界紙は欠かせない。子ども新聞も取っている。アスパラを地方発送しているので、仕事の面でも活用している。考え方が偏らないように全国紙は何年かに1度変えている。

古畑 新聞は授業の教材の一つであり、進路指導の情報源の一つで活用している。社会科室の前では、最近であれば縄文遺跡の記事などその都度更新して貼っている。学校図書館には、新聞閲覧コーナーがあり、複数の新聞を常時閲覧でき、データベース検索もできる。学校図書館司書が生徒の興味関心の持てそうな記事を切り抜き、図書館前に掲示するなど校内のあちこちに新聞を掲示している。

為国 私にとって新聞は生活に欠かせないもの。新聞から得た情報は人とのかわりに大切になると思っている。学校で友達と話しているときにニュースについて話題になることがあるが、私がニュースの内容を知らないと話が広がっていかないので人とコミュニケーションをとるためにも重要になる。暮らしのコーナーなど日常のことをよく見る。

浜田 世の中の情報は、テレビ・ラジオ・インターネットで知ることができるが、新聞ではこれらの媒体では伝えきれない内容を得ることができ、自分の知識を幅広く深めるのにとっても有効な存在だと思っている。

鈴木翼 情報源である。500世帯ぐらいの小さな地域だが、ほぼ全世帯が新聞を購読している。地域欄に自分の記事が取り上げられると声を掛けられ、影響力があると思う。

田中 実家が小さな印刷会社をやっていて小さい頃から紙に触れることが多かった。父も新聞好きで小さい頃はスポーツ新聞から始まり野球の記事や一般紙の記事を見ながら育った。どのように話したらその真意を書いてくれるか取材を受ける側の難しさを感じた。引退してからは取材をする側で、その選手がどのように思っているか汲み取ることの難しさや月1度のコラムを読んでいる方々へ自分の思いが伝わるかという全方向から新聞に携わらせてもらっている。新聞とは、人生と共に成長を支えてくれる先生のようなものととらえている。

<授業と新聞>

古畑 高校2年の古典で学習する「十訓抄大江山」の単元で、本文に歌合せという語句が出てくるときに新聞を使った。歌でコミュニケーションをとるといえるのは千年前の価値観と



思われがちだが、古典を学習する目的の一つとして現代に通じる普遍的なものの見方を学ぶことが挙げられている。歌を通して思いを伝えるという文化は千年前の出来事では

はなく現在進行形である。古典と現代をつなぐツールとして記事を用いた。

生徒の反応は、歌合せ自体は百人一首と混同している場合があり、辞書に載っている対戦型とか全部知らないのそこからスタートして、なぜ歌で返すのかということも丸暗記ではなくリアルに伝わることができ、理解度が深まる材料にはなった。

為国 もっと NIE の授業を多く取り入れるべきと思う。新聞は読めば読むほど考えられる。教科書を読んでも何を言っているか分からない。教科書を読むと勉強させられているという意識で面白くないと思うけど、新聞に関する記事があるともっと知りたいと考えていけるので大事だなと思う。

浜田 小論文や小説では難しいが、新聞だと今の情報が流れているので自分の立場になって考えることもできるので僕は好きだ。古典だと自分も覚えているか確認できるので助かっている。

田中 NIE を授業で取り上げたいが先生方はやりたいけどやれないという難しさを耳にした。具体的に何が難しいのか教えてほしい。

古畑 先生が難しいと思う気持ちは分かるが、最初から堅苦しくせず、この記事を読んで感動したということから始まって十分だと思う。

＜新聞のある生活＞

内山 13年前農家になってから、4紙何かしら触れている。家のいたるところに新聞が置いてあるのでいやでも新聞が目に入る。子供たちには最初読みなさいと言っていたが、自分から手に取って読むようになってきたので

成長したなと思うようになった。習慣づいたところはある。

内山 コロナ禍でこんな世界的な問題に直面することはもうないと思うが、子供にも考えてもらうことがきっかけで購読しようと思った。毎日世界の状況が流れていたし、子供が興味を持って知ろうとか世界の課題って何だろうと気付くのはいいタイミングだったと思った。

為国 子どもの生活に合わせた記事が載っているから読まれていると思う。中高生向けにも天文学が載っていたり英語の和訳では単語一つ一つを訳した内容が載っていたりしたので勉強になった。

浜田 スポーツやエンタメなど自分たちの興味を引く記事が載っているところが普通の新聞と違って良いところ。文章を読むことが好きな小中高生もいれば苦手な子もいる。苦手だと文章だらけの本や記事を見ると手が出しにくい。子ども向け新聞は児童自ら手が出しやすいと思う。様々な分野の知識や文章の表現があるなど勉強になる部分が多い。



司会 地域の新聞の役割は？

鈴木翼 影響力が大きい。地域で青年部の部長もしているが、魚の販売会やイベントがあるときに事前に取材してもらい新聞に載せてもらう。新聞見て来たよと言ってくれる客が多くて影響力の強さを実感している。

鈴木桃 野付小学校では月に1回、朝のNIEタイムがある。町内の全児童・生徒に新聞が配られる。新聞を取っている世帯が多いので、新聞を扱うのは抵抗感なくすんなり入っていると思う。参観日などで取り組んだものを掲示しているのを見ると、子供はこんな記事に興味をもってこんな考えをしていることが分かって保護者目線で面白いと思う。

司会 「回し読み新聞」とはどんな活動ですか。

鈴木桃 地域の小学生と中学生と地域の方がグ

ループになり、同じ新聞から一番気になる記事を選ぶ。その記事に対して自分の意見を書いてグループで一つの新聞にするという活動を行っている。同じ新聞の中から選んでいるが、重なることがなく、それぞれ興味のもつところが違うと思った。子供たちはスポーツの記事が多い。漁業を営んでいることもあり、違う地域の漁業の記事を選んだりして関心を持っているということを感じた。

田中 うちの小学校でもこういうことができたらいと思う。新聞により親しむ近さというのは身近なことが載るということも一つだと思ふ。最初に読むきっかけになったのは、地域のイベントがあるという写真が載ったとき。地域のイベントに子供も参加することによってつながっていくように思う。

<今、なぜ新聞なのか>

司会 どうして新聞を読まなくなったのか。

為国 サイズが大きいところ。大きい新聞を広げて読むのは子供には大変。大人でも広げて読むのは首が痛くなるし、じっくり広げて小さい文字を読むと時間がかかる。スマホもあるのでぱっと必要な部分だけ見る人が多いのかなと思う。

浜田 新聞は内容が詰まっている分読みごたえはあるが、朝の時間にどちらが手軽に入手できるかという片手で読めるネットニュースへ行ってしまう。紙をいちいちめくっているよりも電子版でサクサク見た方がいいと思う。インターネットの普及が新聞を減らしていると思う。

古畑 新聞の大きな特徴である一覧性、開いたときに興味のないものも目に入る。ネットの意見交流を見ていると0か100か、白か黒か、はっきりしたものが好まれるが、事実は複雑で白黒つけられるものではない。新聞は最後まで読んでもどっちなのかはかなり考えないと分からないし考えても分からないときがある。結果がすぐに分からないものは難しい、面倒くさいとなっているのではないか。

司会 日本新聞協会広告委員会のメディア接触信頼度調査によると、ほぼ毎日接触する媒体の上位3位、3位がSNS 81%、2位紙の新聞が83%、1位がテレビ88.4%となっている。新型コロナウイルス感染拡大により接触メディアが変わってきていると思うが。

内山 コロナ禍でリモートワークになって、情報を取る時間も余裕ができたからと思ったが、農家では時間的余裕にはつながっていない。でも、報道関係は気になって聞いたり見たりするようになった。私は新聞のニュースサイトをよく読むが、子ども新聞の方をよく読むようになった。イラスト、写真、分かるように書いてあるのでよく読む。

鈴木桃 大人の読む頻度はあまり変わらないが、子供たちが読むようになったと感じる。コロナウイルスに対する不安や感染者数を新聞でチェックしているのかなと思う。

司会 新聞やテレビは情報源がはっきりしている分、信頼できる存在であると認識されてきていると思うが。

古畑 新聞の存在感自体は増した気がする。2020年8月7日朝日新聞デジタルでは、コロナ禍で新聞を読む回数が増えたと答えている人の理由として要点がまとめられている、信頼できる、幅広いが挙げられている。いざという時人が何を求めているかが明確になった。

田中 コロナ禍で、正確な情報が欲しいということだけでなく、たくさんの方が読まれていると思うし、これまで正確に情報を伝えてきた新聞の実績が、新聞＝正確だということが伝わったと思う。これからの子供たちは自分で正確な情報を取ることができるようにならなくてはいけないし、そのことを新聞を通して学ぶことがいいと思う。新聞だから正解だよといわれて育つ子供の方が怖い。

司会 なぜなんだろう、どうしてなんだろうという気持ちを育てていく。受け手側の意識の向上がこれから求められてくるかもしれない。

<新しい学びとメディア>

司会 ICTの導入が進んでいく中で新聞の存在感はどのように変化していくのか。新学習指導要領で新聞活用が盛んに謳われているが。

古畑 中学校の国語の教科書では池上彰さんの文章が載っていたり、新聞の記事を比較したりするページがある。高校の教科書では、メディアの特性に関する小論文は載っているものの記事そのものを教材として掲載している教科書は少ないと思う。以前より新聞記事を素材として考えさせるという問題集などは増えてきたと思う。

司会 デジタル教科書はどう思うか。

為国 私はデジタル教科書はあまり好きでない。私は書いた方が記憶に残ると思う。作ったノートはテスト勉強にも後で役立つ。デジタル教科書ではデータが消えたら終わり。

鈴木翼 親としては、教科書が無くなると子供たちは楽になるのかなと思う。ランドセルに重たい教科書を持たなくて済む。授業でも、料金のことを考えなければ教科書の読み比べとかたくさん出版社があるのでメリットが多いと思うが、やり方は現場の先生に丸投げしていることが多いので、共通の指針とか専門の教師をつけるとかが必要になってくると思う。

内山 家庭学習用の通信教材を使っているので、タブレットやスマホでいつでもどこでも勉強できる環境になっている。子供にとってはなじみやすく取り組みやすいものなのかなと思う。学校で使えば家庭に持ち帰った時、親がフォローできるような形だとありがたいと思う。

田中 ICTの定義は文房具。次代の流れは止められない。良い面がたくさんある。算数では問題をどんどん解いていくようなデジタルの方がよい授業が



ある。AIによって間違っただけの傾向が分かりその子の学力の向上につながるとか、国語や道徳では国語の読み取りをグラフ化することでどの場面で考えが変容したかが分かるという使い方ができる。算数に戻ると黒板で計算問題を解かせる時間をもったいない。デジタルですればその時間を有効利用できる。ICTを進めなければならない理由の一つなので、我々（大人）が頑張らなければならない。デジタルドリルのように早く進むものと深くゆっくり学ばなければならないものがあると思う。

司会 新聞にも紙と電子版がある。記事データベースは、検索で瞬時に記事が出てくる。

古畑 漢文で故事成語を学ぶが、現代における故事成語の使われ方を学ぶことも学習目標の一つである。「塞翁が馬」とか「虎の威を借る狐」とかのキーワードを検索すると記事が出てくる。最初は教師が伏字にして出すが慣れてきたら生徒が検索して出題者になっていくことも可能だと思う。

司会 記事ベースデータではどんなことを調べたいですか。

為国 探究の活動で、地域活性化をするためにはどんな取り組みをすればよいかをグループでテーマを決め学習をしている。定



山溪について調べているので歴史とか新聞に取り上げられた記事を調べたいと思う。

浜田 学校での調べものに使うことが多いと思う。たくさんの情報から発見ができるし、新聞の方がネットに比べて明確性があるので、レポートが作成しやすい。

司会 図書館にもデータベースがあるかどうか。

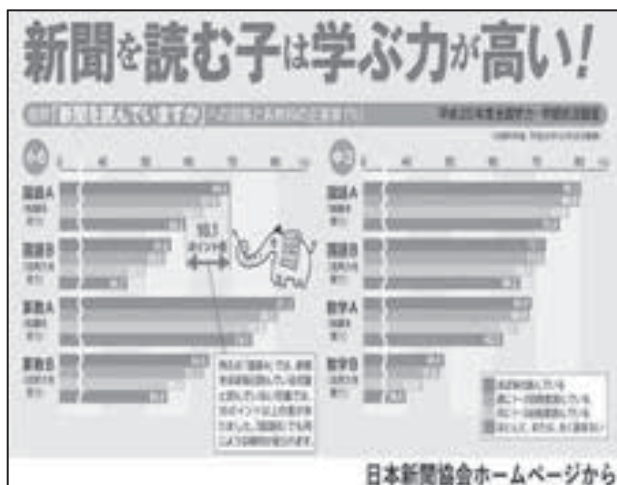
鈴木翼 地元の小中校へ行って漁師の出前授業をすることがあるが、新聞で使っている漁業のデータや近くの日にあった新聞に載っていた記事を使うこともあるので、あれば便利だと思う。

内山 住んでいる美唄市には「美唄」の副教本

があり、歴史とか産業とか政治を学ぶみたいだが、学校の教科書ではなく自分たちが自由に自主的に生きた記事として知りたいと思った時に、調べられる教材として使用することができたらいいと思う。

<NIE と学力>

司会 NIE はどんな力を育むのか。



小学6年生の国語Aを見てみると新聞をほぼ毎日読んでいる児童と読んでいない児童とでは10ポイント以上の差がある。教育現場ではどのように受け止めているか。

古畑 私は国語科なので新聞などの文章に触れる機会が多ければ多いほど点数が上がるのは当然と思う。注目すべきことは算数や数学でも少なからず影響を与えていることで、読解力が高まると他の教科にも良い影響があるのではないかと思う。

鈴木桃 新聞を読むことが直接学力につながる



かは分からないが、新聞でグラフを使っている記事がある。これは算数の分野である。また言葉の意味が分からなければ何が書いて

るか分からない。それは国語の分野に関わっている。新聞を読むことが様々な学びの分野につながっていると思う。

浜田 継続的に読むことで学力が上がっていくのではないか。たくさんの証言や情報を収集

できるので知識が増えて視野が広がると思う。勉強方法やテストのアドバイスなど学習に役に立つ記事もあるので参考になる。

内山 学力に直結しているという実感は余りない。テストの点ではなく視野を広く持つとか社会の課題を知るとか物事を考えるという社会に出てから役立つようなことが育っていると思う。うちの子供たちもこの記事良いねとかこんな悪いことする人がいるんだという感想が出てくるようになったので、どうして起きるのか解決できるのかを考えるきっかけとして新聞を活用できている。将来仕事を考えるきっかけや自分の行動の軸を作ってくれる支えみたいなものになってほしいと思う。点数に留まらない学びを得られることができるのが新聞の良いところ。

田中 もともと学力の高い子が新聞を読むのか新聞を読んでいるから学力が高くなっているのかは分からないが、いきなり子供たちが両親に新聞読みたいとはならないと思う。小さい頃から新聞や子ども新聞を見て、子ども新聞は子供に何か刺さる、どっかが刺さるようにできているし対話できるようなクイズ形式になっている。親が子供に関わるツールとして子ども新聞を読むことで自然と学力が上がってくると思う。我々世代は新聞を読まない世代なので我々が読むということが子供たちにつながるということを感じる。

<新聞って役に立つ?>

「いや読む気になれんわ」と思ってしまった。雑誌やテレビや広告は美しい写真や人目を引く見出しを使い読者を魅了することを重要視しているが、どうも新聞からはその気合が感じられない。時代は変化しさまざまな娯楽が登場した現代、必死に姿を変えるマスメディアの中で、新聞だけが取り残されてる気がする。朝の少ない時間、はたしてどれだけの若者がネットニュースやテレビに代わり新聞を開こうとするのだろうか。

若者の読者を増やすために新聞は新たな見せ方を考えなくてはならない。興味湧かないものは誰も読まないのだ。

自分のふがいなさを実感しつつ、どこかで

司会 高校生の作文の朗読。

関係者としては胸に突き刺さる意見の作文ですが。

為国 作文の意見は一理ある。参考書を選ぶときは、白黒や文字の羅列は集中力が途切れるので、イラストや写真などがあるものを選ぶ。文字ばかりではなく見せ方の工夫が必要。私は新聞は面白いと思う。

浜田 個人的には新聞は面白いと思うが、興味のある記事でないと読む気があまり起きないし、新聞を読む機会がなければ見ようとしにくい。能動的に情報が得られて様々な分野の知識が得られるというメリットがあるので、子供の頃から新聞に触れる習慣が大事。

<新聞に期待すること>

古畑 新しい学習内容としてグローバル化、探究学習、地域創生、防災、持続可能性とかの課題は新聞社が毎日取材する得意分野だと思う。ギガスクールが意味する全ての児童・生徒のための世界につながる革新的な扉も新聞の存在意義につながっていくと思う。これからも公正・公平な立場で確かな取材に基づく客観的な事実を報道してほしい。

内山 記事で新しい言葉と出会い、その意味や使い方を知って自分の世界を広げたり、何かを読み取って思考力を育てたりする教育は幼い頃からやってほしい。

社会で起きていることや課題を、自分事として問題意識を持てるような紙面づくりをしていけば、自然に子供たちは自分の考えの作り方を学べると思う。

鈴木翼 地方の新聞社

は、地元の声拾いやすいと思うので期待している。法律や制度などの大きな事象については、他のメディアでも報道されるが、それによって影響を受ける声というのは反映されないし放送されない。地元の声を発信しても



らうことは有難い。

田中 NIEの内容は素晴らしいのでどうやって普及させるか悩んだ結果、新聞を読めば学力が高いというデータもあるので、出口である6年生の卒業時に新聞を読むのが楽しいと思うような学習を進めることが僕の役割と考えた。新聞社は正確な情報を扱うメディアなので、情報とNIEをセットに、入口としてMNI教育(マスターオブニュースアンドインフォメーション)をこの学園でやろうと考えている。どんなことをやるかというNIEと基本的には変わらないが、子供は物語がないと学ぶのがつまらないと思うので、MNIを6年間トータルで行う。

例えば5年生の国語の図書館を使いこなそうという単元があれば、プロの方が図書館の調べ方を教える、保健体育ではインターネットの正しい使い方をプロが教えてくれる。そこにはつながりがある。途中では新聞もあるし家庭科でも使える。最終的に「情報を生かす私たち」という答えのない単元、これが全部の物語になって本当に正しい情報をつかんで発信する力を子供たちに身に付けてほしいと考えている。最終的な出口は新聞を楽しんで読もうとする子供を育てたい。実現し、成功できるよう北海道新聞と頑張っている。

司会 新聞の良いところはたくさんあり、多くの人に信頼されているメディアで、社会的な影響力が大きいと認識されている。学力



を伸ばす、知識をふやすNIEだけでなく新型コロナの不安定な世の中だからこそ、子供たちが深く考える力を、情報過多の中で正しい情報を見極める生きる力を、新しいNIEの形を模索し進化してほしいとメディアの一人間として感じた。

(文責 NIEコーディネーター 畠山 厚子)

(2) 記念講演

演題 「歴史と出会うー新聞という回路」 講師 梯 久美子 氏

梯 久美子 (ノンフィクション作家) プロフィール
2005年大宅壮一ノンフィクション賞受賞「散るぞ悲しき 硫黄島総指揮官・栗林忠道」
でデビュー。「原民喜 死と愛と孤独の肖像」など



この基調講演の依頼を受けたときに、新聞に発表するためこんなコメントを出した。「世界の今を切り取って届けるのが新聞だ。その今を長きに

わたって積み重ねることで漸く歴史の姿が浮かび上がる。それができるところに新聞の価値がある。教育現場においては児童や生徒に日々のニュースの中で見付けたテーマに沿って過去の記事をたどる経験をぜひしてほしい。今起きていることを知るだけでなく長いスパンで物事をとらえ、歴史観を養うために新聞は有用なツールである」。

砕いて言うと、新聞を広げてみると何ページもあるが、そこには世界の今が載っている。今日の時点で輪切りになった世界の姿がある。それは札幌の今であり、東京の今であり、今日はアフガニスタンの今というのが、それぞればらばらに載っている。それを積み重ね、縮刷版や図書館とかに新聞が積み重なっていると、ここに長い時間の層がある。その時間の層が即ち歴史であるが、何か一つ自分の知りたいこと、テーマや言葉を持って層に潜っていくと1本降りていく道が付く。新聞が発行された頃の近代史の時間の層があって新聞と自分のテーマによって遡っていくことができる。底の底までおりて、そこから層の上の方を見ることによっていろんなことが分かってくる。

私には戦争というテーマがあり、最初のデビュー作である「硫黄島」いわゆる玉砕した島の

歴史を中心に見ていくことで、それが起きた時代、それにつながった時代、それが起きた後の時代、さらには歴史的な事実でなくてどのように語られてきたかも新聞によって知ることができる。

全国小中学生作文コンクールがあり、全国から勝ち抜いたすぐれた作文が集まってくる。私は2009年から審査をしているが、この作文コンクールが非常に面白い。身の回りに起きたこと、家族の話、学校の話、小説でも創作、自分でテーマを決めてそれについて調べて書く、新聞記事に近い書き方をしてもいい。何を書いてもいい。すぐれたルポルタージュが出てくることもある。何年か前にパーム椰子の問題について書いた生徒がいて、パーム椰子は洗剤に使われたりお菓子に油脂として使われたりするが、東南アジアではそれを植林するために熱帯雨林がどんどん切られ、自然災害が起こっていることをテーマとした大変優れた作文があった。本格的なルポで、実際にNPOの人たちと現地へ行ったり新聞記事を調べたりしている。国際的には大きな問題になっているが、日本ではパーム椰子の大きな消費国のため、全然報道されていないことに気付く。新聞に何が書かれているかではなくてどう書かれているか、何が書かれていないか、中学生がこんなふうに新聞を使って学びをしていると思った。

このコンクールは、夏休み明けに提出したものが集まってくるので戦争をテーマにした作文も毎年多い。ある年、小学生高学年部で地元の町の空襲の話調べた子供がいた。お年寄りの話を聞き役所へ行って市の歴史を調べ、地方紙でその空襲時にどのように報道されたかはもち

ろん、戦後になって空襲の経験者が語った記事も調べている。

私がやっていることと同じで、私自身がこれまで新聞を活用してどんなことを知ってどんな出会いがあったかそのような話をさせていただきたい。

初めて本を出したのが 2005 年で 44 歳の時。それまでは編集者とか雑誌のライターで、主に女性雑誌に実用記事を書いていた。

小説家の丸山健二先生をインタビューしていた時、硫黄島の栗林中将の話になった。日本人には珍しく大変合理的な人で家族思いの人だったので、丸山さんに「梯さんが書いたら面白いんじゃないか」と言われ、何冊か関連文を調べた。それが 2003 年くらい。私の本が出た後に「硫黄島からの手紙」の映画で硫黄島が結構有名になったが、その前は一般的に手に入る本は 2 冊ぐらいしかなかった。

私が入手した本の 1 冊に、栗林中将は硫黄島の総指揮官として 2 万人の兵士を率いて最後は島で亡くなったことと、硫黄島に赴任したのが昭和 19 年 6 月で、その直後に奥さんに出した手紙が載っていた。その手紙はこれから子供たちを頼むという遺書のようなもの。原稿用紙にすると 5 枚ぐらいの長い手紙、最後に追伸がある。こまごまといろいろなことに気が付く方で追伸三つのうちの一つに「家の整理はたいがいつけてきたことと思いますが、お勝手の下から吹き上がる風の始末をしてこなかったのが心残りです。」と書いてあった。2 万人の兵士を率いて全滅覚悟で島へ行き、大変な戦いをした方である。戦争終盤の島を争う戦いで、亡くなった人の数は圧倒的に米軍より日本の方が多かったが、この硫黄島だけは戦傷者と戦死者を合わせた数は米軍の方が多かった。もちろん死者は日本の方が圧倒的に多い。2 万人のうちの 95% が亡くなっている。非常に厳しい戦いをして米軍に最大の損害を与えたということで、アメリカでは大変有名な将軍である。それでクリントイーストウッドが映画化した。

勇猛果敢で立派な軍人だが、遺書の中で最後に書いたことが家のお勝手の隙間風を修理してこなかった、それが人生の心残りということで、

私は非常に驚き、興味を持った。いろんな偶然が重なり、当時 70 代の栗林中将の息子さんを紹介され、東京都の自宅で栗林さんから届いた大量の手紙を見せてもらった。細々と取材を続けていたら、遺族の方が栗林中将の部下の軍属だった貞岡さんを紹介してくれた。高知県に住んでいて、栗林中将を父親のように慕っていた。貞岡さんは軍の縫工部、軍服の修理・修繕をするセクションで針仕事をして、栗林さんの何かを繕っているうちに親しくなったが、硫黄島へは行けなくて泣く泣く 20 代の時帰ってきたそうだ。

栗林中将が死を覚悟して出撃をする前に、大本営に電報を打っている。玉砕の島では指揮官が電報を打つことになっている。「決別電報」で、沖縄の指揮官もサイパンの指揮官も電報を打っている。

「栗林さんが亡くなり、硫黄島が陥落したというニュースを知ったときにどんなお気持ちでしたか」との問いに、貞岡さんはずっと沈黙され、栗林中将の電文を私の前で暗唱してくれた。

「戦局、最後の関頭に直面せり、敵来攻以来麾下将兵の敢闘は真に鬼神を哭かしうるものあり」

（鬼も泣くような大変な奮闘を部下はしました）と言っている電文で、亡くなった時どう思ったかの返事の代わりに、栗林中将が最後に打った電文を暗唱して「これはうちの閣下が最後に残した言葉です。だからこれを一言一句忘れることはできません」とおっしゃった。私はとても感動し、メモや録音をしながらいろいろな話を聞き東京へ帰った。

その数日後に図書館へ行って新聞を検索した。硫黄島には昭和 20 年 2 月 19 日米軍が上陸した。米



軍には5日で陥落することができるという記録がある。しかし実際には36日間かかっている。日本軍が36日間抵抗したわけだ。なんのために戦うかという、硫黄島は東京とサイパンの間にある真っ平な島で、飛行場を作るのに最適だった。太平洋上の不沈空母でそこに飛行場があればサイパンやテニアンから飛んだB29が、途中から援護機をつけることもできるし補給することもできる。空襲の後、傷ついて戻る米軍機を途中で直すことができる。そこがアメリカの手にわたってしまうと日本国内の空襲が激しくなり一般市民が殺されてしまう、という認識があったので一日でも長く飛行場を敵に渡さないでおく、それだけが任務だった。

非常に苦しい戦いで、2月19日に上陸し3月26日に組織的な抵抗がなくなったと言われている。でも電報は3月16日に打たれ、翌日の3月17日に最後の出撃をすと書いてあった。実際には3月26日の明け方に出撃をするが、日本にいる人たちはもうすでに出撃したと思っているわけだ。3月22日付新聞に硫黄島、遂に敵手に墮ちるとい記事が出ている。その新聞記事の中に貞岡さんが暗唱した最後の電文が載っていた。ところが、読んでみると貞岡さんが言っていたものと違う。新聞に載っていた電文が間違っていた。なぜ貞岡さんの方が正しいかというと、戦後になって検証し作成した戦史叢書の中で電報の現物を見ることができたからだ。

電報の最後に栗林さんが歌を3首詠んでいる。そのうちの1首が「国の為重きつとめを果し得て矢弾尽き果て散るぞ悲しき」。しかし、最後の歌も改ざんされていた。新聞では「国の為重き勤めを果たし得て矢弾尽き果て散るぞ口惜し」と書かれ、電報の「悲しき」に墨で二重線が書いていて、その横に赤で「口惜し」と書き直されていた。新聞の誤報ではなく、大本営の作戦部が新聞に回すにあたって改ざんしている。「散るぞ悲しき」の言葉が志気を下げるに思ったからだろう。栗林さんは、この戦争末期の大変な時に「悲しき」と書くのはタブーだと分かっていたのではないか。それでも「悲しき」と書きたかった。

電報の最初の部分は「戦局、最後の敢闘に直

面せり、敵来攻以来靡下将兵の敢闘は真に鬼神を哭かしうるものあり」とある。武器、弾薬もなく水も食べ物もなく絶対死ぬと分かっている中で、栗林中将は部下に、万歳突撃はやめろ、内需の普通の人たちを守るためにこの島を一日でも長く死守しなければならないことを説得する。兵隊たちにとっては、生きて帰れないから、敵が上陸してきたときには、切り込み隊みたいに軍人として華々しく散りたいと思っている。

しかし、それは意味がないというのが栗林さんの合理的な考えで、自分たちの目的は華々しく散ることではなく、どんなに苦しくてもみともなくてもずっとこの島にいて米軍に取られないようにすることで、米軍が上陸する前に地下に18キロにも及ぶ地下壕を作って徹底抗戦をする。ゲリラ戦のようなことをしたのは日本軍史上この人だけである。最後の一人になっても抵抗せよとの命令で、部下は最後まで苦しい死に方をする。そのおかげで36日間持ちこたえ、この電文の最初に「靡下将兵の敢闘は鬼神を泣かしうるものなり」と書いたが、改ざんされてしまった。

どのように新聞に載ったかという「17日夜半おきし小官自ら陣頭に立ち、皇国の必勝と安泰とを祈念しつつ全員壮烈なる総攻撃を敢行す」。部下がどれだけ頑張ったかをあれほど書いたのに結局は決まり文句が最初に来ている。栗林さんは、鬼神を泣かしうるものありの後に、特に「想像を超えたる物量的優勢をもってする陸・海・空よりの攻撃に対し、宛然徒手空拳をもってよく健闘を続けたるは小職自ら悦びとするところなり」と書いている。敵の物量的優勢に対して徒手空拳で戦った。これは抗議文みたいなものでこの時代によくこういうことを言ったなあと思うが、その徒手空拳も削除されて発表されている。ぐちゃぐちゃに作文されたものが新聞載ってしまった。現物の電報の生々しい改ざんの痕を見た時に、私とその訂正記事を出さねばならないと思った。当時新聞で改ざんされて電報が載ったということは誰も触れた人はいなかった。電報が改ざんされた事実、新聞が嘘を載せた事実を知り、その時初めて、私が新聞の訂正記事を出すつもりで栗林さんのことを書

くべきではないかと思った。私が40過ぎてから作家になって本を出そうと思ったのは新聞が間違っていたためだった。

栗林中将の記事の隣に「本土決戦 築城設営 軍事特別措置法案なる」という文字がある。軍事特別措置法とは、本土決戦になった時、政府が土地建物を収容し個人を所要の業務に従事させ法人にも無条件で業務に従事させることに法的根拠を与えることで、それが成立したという記事だ。このとき小磯国明という人が首相で、演説の言葉がでていますが、「我々には勝利か死かいずれかがあるのみ、1億同胞は敵きたらば軍隊と共に戦い断じて敵を撃滅せねばならない」。こういう情勢だからこそ「悲しき」が「口惜し」に改ざんされたということが分かってくる。最初は どうして「悲しき」ではいけないかと思ったが、この日歴史の何日間は日本にとってどういう時期だったかが分かってくる。その流れの中で電報が改ざんされた。栗林さんも改ざんされることは分かっていた。「悲しき」という言葉をどうしても使いたかった。新聞を通じて歴史に触れたな、栗林さんに出会ったなと思った。この記事で電報が改ざんされたと分かった。歴史の片鱗に触れてもっと知りたい、知るべきだ、そして発見したので伝えるべきと思ったきっかけに新聞になった。



もう一つ、「原民喜」という詩人との出会いについて。「原民喜」は、広島で被爆してその経験を「夏の花」という短編小説に書いた人だ。同人

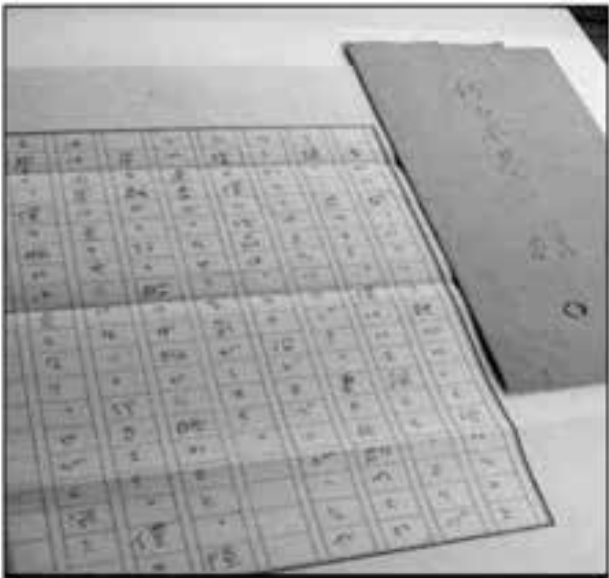
誌などに書いている世間的に見れば売れない作家。詩人で繊細で美しい文を書く人で、慶應大学に入るために広島から上京し、戦時中に最愛の奥さんを結核で亡くし、疎開のつもりで広島へ帰り野宿中に被爆した。自分が原爆を受けた瞬間から見たものを手帳に書いていった。その手帳をもとに「夏の花」という小説をその年に出した。占領軍の検閲などでなかなか出版ができず、翌年から「三田文学」というマイナーの雑誌に発表した。最初「原子爆弾」というタイトルをつけたが、検閲を通らないということで「夏の花」のタイトルで出した。

私の時代は、「夏の花」や「水ヲクダサイ」という原民喜の詩が教科書に載っていた。あるきっかけで、今の中高生にもわかるように共感できるような形で原爆を伝えられないかと思った。

そのきっかけとなったのは、アート写真家の石内都さん。石内さんは広島の原爆記念館に収められている遺品の中にきれいな洋服があることに気が付いた。花柄だったりワンピースだったり。地味なモンペなどの下に着ていた女の子たちがいた。原爆はとても遠いしあまりにも悲惨な歴史だが、戦争中でもちょっと隠れてきれいな服を着たかった女の子の気持ちなら分かるかもしれない。石内さんが撮ったバラの花のボタンが付いたブラウス取材し、印象的だった写真を1点買わせてもらった。

若い人たちに戦争の話をするとき、その写真を持っていくことにした。被爆しているのでブラウス自体はぐちゃぐちゃだが、赤いバラの形のボタンだけがなぜかきれいな形で残っていて、広島の女の子たちがこっそりおしゃれもしていたという話をするとう高校生や大学生は泣く。話をするよりも写真を見せるだけで悲惨な出来事が伝わる。悲惨さだけでなく、今の私たちと変わらない日常を送っていた女の子たちがそこにいたという回路が初めて生まれるという経験をした。講演を終えた時に女性の大学生が来て、「先生、初めて戦争がカラーになりました」とおっしゃった。「ずっとモノクロの写真ばかりを見てきて、戦前も戦時中も真っ暗だったような気がしていた。でもこんな赤いボタンの服とか着ていたんですね。今と変わらない人たちが生

きていた。そんな変わらない時代に戦争があったということは今の時代に何が起きるか分かりませんね。」といわれ何かが伝わったという思いで、思い出したのが原民喜だった。



今の時代でもそこらにいるような人が戦争にあってしまった。原爆直後は「夏の花」を書いて生き抜くが、昭和 26 年に鉄道自殺をしてしまう。戦後の大変な中で生き抜く力はなかったが、これだけは書きたいというものを書いて死んでいった。彼が書いた美しい詩があって「夏の花」や原爆を書いたものだけが悲惨で。大江健三郎さんが日本で最も美しい散文を書いた一人だと言っている。今でもいそうな、生活力はないが優しく家で文章を書くのが好き、こういう人を通して原爆というものに若い人が近づいていけないかと思ったのが原民喜を書いた理由である。

原民喜が鉄道自殺をしたときに遺書を書いている。奥さんの弟で国文学で有名な評論家の佐々木基一氏への遺書。「長い間いろいろ親切にさせていただいたことをうれしく思います。僕は誰ともさりげなく別れていきたいのです。妻と死に別れてから後の僕の作品はその作品のいろいろ全てが僕の遺書だった気がします。岸を離れていく船の甲板からながめると見ると陸地は次第に点のようになっていきます。僕の文学も僕目からは点となりやがて消えるでしょう。」詩のように美しい。岸を離れるとは彼岸のことで、もうあちら側へいるような文章。原爆とい

う未曾有の悲劇を経験して、その後鉄道自殺という悲惨な亡くなる直前にこんな美しい遺書を書いたのはなぜだろうと。世の中がどんどん立ち直っている時期、戦後 6 年目に自殺したのはなぜだろう、死の側から遡ってこの人の人生を見てみたいと思った。この遺書がどこにあるのか調べたら広島にあった。広島市立図書館。実際にその遺書を手にとってみる事ができた。

この人が自殺したことを書くことは迷ったが、私が心ひかれたのはこの人の亡くなり方で、なぜこんな悲惨な死に方をしたのか、亡くなる直前こんな美しく静かな文章を残したのか、このテーマから逃げたら若い人たちに伝わらないのではないかと思い、こんな死に方をした人なんだということをお頭において人生を見ていってほしいと思い、書き始めた。

原爆ドームの敷地の中の碑銘も原さんの遺書。2 人に書いた遺書にあった碑。そのうちの一人が遠藤周作さんで、もう一人は U 子さんという 20 代の女性。遠藤周作と優子さんは 20 代で原さんは 45 歳で亡くなるが、絶望して死んでいったかというところではなくて次の世代に希望を託して亡くなっていった人だと思う。「遠き日の石に刻み砂に影おち崩れ墜つ天地のまなか一輪の花の幻」この詩が若い二人への遺書に書いてあった。



私はいろいろな図書館へ資料を見せてもらいに行くが、個人での閲覧が厳しい図書館もある。

広島中央図書館は原民喜の遺品をたくさん収蔵している。もともと原爆でめちゃくちゃになって場所を移して今あるが、被爆地の図書館であることを自覚した開かれた図書館で、原民喜の遺品をたくさん収蔵している。保存や整理がきちんとされていて所蔵についての細かい目録をインターネットでも公開している。研究や勉

強のため使いたいという依頼には非常に積極的に公開している。遺書に心惹かれて興味があることを伝え、現物を見せてくれ、司書の方が請求した以外にも資料を出してくれ、その中に新聞の資料があった。原さんが自殺したときの中国新聞だ。この新聞記事からもいろいろなことが分かった。新聞に載ったときの肩書が原民喜(作家)と書いてあるが、本文を読んでいくと三田文学同人作家と書いてある。「夏の花」名作で有名で、群像という文芸誌に書いていて商業誌には2度ほど書いているが、亡くなったときの世間の受け止めは同人作家ということが分かった。

それから「永遠のみどり」という自筆の詩を自殺の直前に中国新聞に送っている。この詩は有名だが中国新聞に送っていることは知らないことだった。

「永遠のみどり ヒロシマのデルタに 若葉うずまけ 死と焔の記憶に よき祈りよこめれとわのみどりを 永遠のみどりを ヒロシマのデルタに青葉したたれ」希望を感じさせる詩。鉄道自殺する前にこの詩を書いたというのもすごいと思うが、原民喜という人はこれまで新聞に詩や小説を書いたことがなく、これに限っては新聞社に送っていた。これは広島の人たちへの遺言ではないかと思った。それは雑誌ではダメで、新聞でなければいけなかった。広島の地元の人が読む新聞だからこそ意味があったと思う。若い人たちに希望を託して自分は静かに世を去っていく、そのような形跡が彼が残したも

のや会話や若い人に当てた遺書からそういう感じが見える。これは、中国新聞へ送ったということで地元の原爆の被害を受けた人への別れの挨拶であり希望の言葉だったと思う。

新聞は事実が積み重なってクールな感じがするが、そこに書かれていないことも感じることができる。それはその時代を生きた人の姿・声が刻印されている。毎日発行されるからこそ、地方紙があるからこそできることだと思う。

最後に新聞社の人にメディアの人に提言がある。この中国新聞には、私が原爆のことを調べるときにお世話になったサイト、広島平和メディアセンターがある。ここは中国新聞に載った原爆関係の記事が読めるところだ。2008年以降は原爆のどんな小さい記事でも読める。ただ(無料)で。ただでというのが大事で、会員にならないと読めないということが多い。

他の新聞社もやってもらえないかと思う。地方紙ごとにテーマがあると思う。北海道新聞であればアイヌ関係の記事。東京で読めるものと質と量が違い、30数年ぶりに北海道に帰ってきて、もう一度アイヌのことを勉強し直さなければいけないと思った記事がたくさんあるが、過去記事を遡って1個1個検索するしかない。子供たちが自分の生まれ育った町に何があったのか、その歴史を遡るということは大切なことで、それを知る一つのツールとして新聞は大きい。

新聞に書かれなかったことはなにか、どのような書き方がされているか、原爆の問題についても興味深い。語られ方が時代によって変わっていく。終戦の1~2年後は原子力の平和利用ということが書かれたこともある。原爆の事故後はどのように語られ方が変わったか、という歴史の縦軸の中で一つのテーマを追いかけてながら語られ方を知ることができる。明治時代から延々と日々発行されてきた新聞という媒体じゃないとできないことが、教育のためにできることがあるのではないかと考えている

(文責 NIE コーディネーター 畠山 厚子)



(3) 授業紹介 ①

小5年生	国語科	資料を用いた文章の効果を考え それを生かして書こう	札幌市立桑園小学校 夏井 彩 教諭
------	-----	------------------------------	----------------------

<授業のめあて>

久保 吉史さんの主張「地下と地上が協力して駅前の魅力を向上させてほしい。」(新聞記事)
自分の主張を伝えるためにどの資料を使えば効果的に伝えられるか。

※資料を隠した新聞記事を提示。 隠した資料を考えさせる・

<提示した資料>

- ① 地図 (チカホの地図)
- ② 写真 (地下の人が多く分かる写真)
- ③ 写真 (地上の人が少ないことが分かる写真)
- ④ 「地上と地下の通行量」棒グラフ

<授業の流れ>

- 1 ワークシートに選んだ(または選ばなかった)理由を書く。
- 2 新聞記事を読み直しておく(ワークシート作成後)
- 3 理由を話す
 - ① お店が分かる(立ち寄る) 人が集まる理由 協力につながるか
 - ②③ 通行量が比較しやすい ぱっと見て分かる
 - ④ 比較 変化が分かる 色付きで分かりやすい 全体
- 4 久保さんへのインタビュー
資料はチカホの写真 しかし、子供たちの多数の意見と予想されたグラフについてもコメントした。
- 5 主張に合った資料とは? 一番大事
- 6 パソコンを開き、ストリームに上げる。
資料を選ぶ。自分の主張を見ながら 友達のものも見てコメントしてもよい。
- 7 向井君の主張と資料を見あう。理由を聞く。写真 主張がイメージしやすい。
村井さん グラフの資料を選んだ理由 資料を使って説明



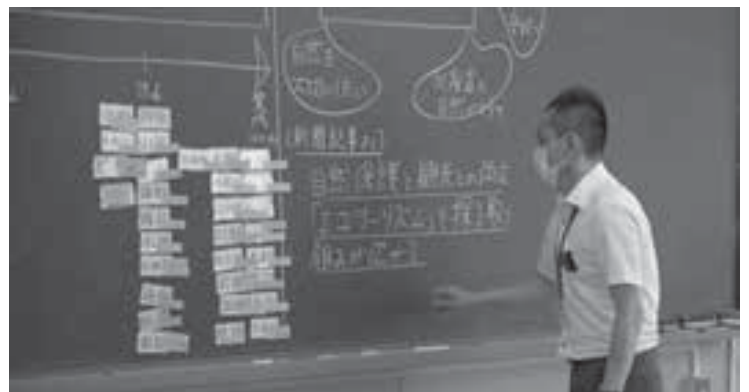
授業紹介 ②

中2年生	社会科 地理	北海道の産業	札幌市立真駒内中学校 山田 耕平 教諭
------	-----------	--------	------------------------

<学習課題> 「北海道の観光業の持続可能な発展に向けて必要なこととは？」

<授業の流れ>

- 1 問題① 資料提示 「何を表すグラフかな」
北海道を訪れる外国人観光客の数
問題② 都道府県魅力度ランキング1位は？
北海道
- 2 学習課題 「北海道の観光業の持続可能な発展に向けて必要なこととは？」
- 3 「新聞記事を見てください」
餌やり罰金の記事
餌やりに賛成か？反対か？ 自分の意見をワークシートに記入
ネームプレートに付箋を貼る
観光業の立場 赤い付箋
行政の立場 青い付箋
両方ある場合は 赤・青
- 4 共通の思い
自然を大切にしたい
北海道の自然が好き・・・
- 5 本当に・・・自然保護と観光との両立ができるか？
- 6 新聞記事を見てください
「自然と共生」
自然を大切にすることが観光客を呼び込める
ということ？
- 7 新聞記事からわかること
自然保護と観光との両立
「エコツーリズム」を探る取り組みが広がる。
- 8 まとめ
発展するために必要なことは？
ワークシートに記入



VI 研修会報告（1）

高等学校部会研修会

宮城県NIE推進委員会高校部会長

仙台城南高等学校 教諭 鈴木 理恵

1 はじめに

今年度の高校部会研修会は、令和3年11月26日（金）に河北新報社からオンラインで行った。内容は講話と実践発表の2部構成とした。講話「衆院選後の日本の政治」を時事通信社仙台支社長の藤野清光さん、実践発表「高校NIEはスクラップノートづくりから～高校におけるNIE指導実践のあれこれ～」を長野県松本工業高等学校教諭の有賀久雄先生にお願いしたところ快諾していただいた。

2 講話

衆院選を終えて、これまでの政治の流れやこれからの政治を見ていくポイントを政治家の人柄等を交えながら話していただいた。日本の政治課題として、権力を一番持っている人（総理大臣）の資質について述べた。国民に自分の政策を訴えて理解してもらう際には、国民の命と財産を預かる最高責任者としての覚悟と情熱というものを持つことが大切であると述べ、岸田総理にはその覚悟は見えつつも、政策の具体的中身がまだ曖昧であると述べた。一方で、岸田総理は「政高党高（官邸と与党が対等である）」という考えのもとに周りの話に耳を傾けながらも、総理自身がこだわる政策や人事については自分の意思を通して感じるという感じを受けるということだった。今後、岸田政権が長期政権になるかどうかは、来年の参議院選挙が鍵であり、そのためには新型コロナウイルス感染症で予想される第6波の影響をどれだけ抑え込めるか、今度の臨時国会と来年の通常国会で政権の実績をどれだけ積み上げることができるのかがポイントであると述べた。参加者からは「マスコミ全体や日本全体で自民党に代わる野党を育てるといった社会全体の空気や国民の姿勢が日本にはなかなか芽生えないと感じるがどのように考えているか」という質問があり、解答として「マスメディアの方でも与党について大きく報じざるを得ないところはあるが、今回の立憲民主党の代表選を見てもメディアは取り上げてしっかりと伝える努力はしている。日本の有権者の中には、旧民党政権が短期間で終わってしまったという失望感がかなり強く残っている。野党が目標を大きく持ち、どういうプロセスで目標を達成しようとしているのかという政策実現力を磨くことが大事である」と述べていた。

3 実践発表

冒頭に「not how、but why」という言葉を提示し、生徒の生活に根ざした授業、生徒が実人生に活かす力を育てる授業をしたいという思いがNIE活動を始めるきっかけだったと話され、「NIEガイドブック」に寄稿された取組をもとに実践例を紹介していただいた。一つめは新聞記事の投書欄をもとに生徒たちが自分の意見を出し合う「“投書”討論」、二つめは日頃会話の少ない高校生が家族で話す機会を増やし異なる世代との意見交換を行う「ファミリー・フォーカス」である。また、主権者教育として模擬投票を行う前に新聞記事を通して各党の政策を調べ、グループ内で話し合いを行っている。自分で記事を選び、対話し意見を深めることは、学習指導要領が示す「主体的・対話的で深い学び」につながる。また、互いに選んだ記事について話し合うことで、生徒は「雑談力（話を合わせたり発展させる力）」を身に付けることができた。これは進学・就職試験の際に「面接官（大人）とどれだけ雑談（世間話）ができるか」という力に通じる。生徒自身もスクラップ活動を通して自分の興味関心を知り、進路選択の一助となっている。参加者からの「生徒が多様な視点で政治を考え批判する力をつけるためにはどうすればよいか」という質問には「政治の見方の一つではない。新聞記事を使い、良い面と悪い面を生徒に提示する。そういう場を地道に作っていくことではないか」と述べていた。また「NIE活動を他の先生を巻き込んで行うにはどうしたらよいか」という質問には「最初は自分も周りにNIE活動を行っている人は少なかったが、研究会等を立ち上げて新聞社と協力しながら進めてきた。学校現場が忙しくNIE活動に時間を費やすことができないのが難点だが、志を共にする人と県内外でつながり、意見交流を行い徐々に広めていってはどうか」と述べていた。

4 最後に

昨年度は新型コロナウイルス感染症のため研修会を開くことが出来なかったが、今年度はオンラインではあったが研修会を開くことができた。講師を快諾いただいた藤野さん、有賀先生をはじめ、NIE事務局の方々に感謝申し上げます。ありがとうございました。

研修会報告（2）

宮城県NIE推進委員会 地区研修会（東松島市立矢本東小）

宮城県NIE推進委員会は12月17日、東松島市立矢本東小で、市内の小中学校の教員らを対象に令和3年度の地区研修会を開きました。矢本東小は本年度からNIEの実践指定校となり、NIE活動に取り組んでいます。実践指定校で地区研修会を開催することにより、周りの小中学校にもNIEの動きを広めたいと考え、実施しました。

矢本東小でNIEを担当する川綱義朗教諭が、同小での活動を報告したほか、オンラインで開催された県のNIE研究大会で発表する児童の様子を動画で紹介しました。

産経新聞東北総局長の村山雅弥さんは「新聞の読み方&取材の裏話」のテーマで講演。各紙の1面トップ記事に違いがあることを取り上げ、「何を知らせるべきなのかの価値判断の違いが、紙面になって表れる」と説明しました。北京冬季オリンピックボイコットを論じる社説も取り上げ、「同じテーマでも論調が異なる。新聞はどれも同じではなく、読み比べると考える力を養う」と述べました。

村山さんは見出しの大切さも強調しました。上野動物園の双子のパンダ公開日程が決まった際の各紙の記事を1枚の紙にまとめて配布。参加者に「どの見出しがいいと思いますか」と問い掛けました。「記事を読む気にさせるのが見出し。表現をめぐって何度もやりとりをする」と紙面づくりの

大変さに触れました。

取材の裏話では、「スクープなのに新聞協会賞を取れなかったニュースはどれ?」「政府専用機に乗る記者の飛行機代は誰が払う」といったクイズ形式での話しが参加者の興味を引いていました。

講演「新聞の読み方&取材の裏話」

産経新聞 東北総局長 村山雅弥さん



新聞の1面トップ記事は、社によって異なる。「何がニュースなのか」をそれぞれの新聞社が判断し、決めているからだ。社説も似ている。北京オリンピックのボイコットの是非を論じる社説では、意見が分かれた。新聞はどれも同じではない。

新聞は見出しから読む。見出しはその記事を簡潔に要約したもの。読者は大事なことから読みたいので、見出しが命になる。執筆する記者は重要な内容から書く。「逆三角形の構造で書け」と指導される。

新聞各社はNIEに力を入れている。探究学習に世の中の動きを取り上げる新聞はもってこいで、そのまま教材になる。記事を読んで、自分の考えをまとめさせれば思考力が身に付く。ぜひ授業で新聞を活用し、学力アップにつなげてほしい。



Ⅶ 研究組織

(1) 宮城県NIE委員会会則

(名称)

第1条 本会は宮城県NIE委員会と称する。

(目的)

第2条 本会はNIE (Newspaper in Education・教育に新聞を)の呼称にちなみ、新聞を生きた教材として活用し、文章作成をはじめ、社会問題への理解など教育内容を豊かにするとともに、情報化社会における情報の処理、活用能力を高めて、幅広い人間形成に役立てることを目的とする。

(事業)

第3条 本会は前条の目的を達成するために、次の事案について協議し、指導助言する。

- ①実施目的及び計画に関すること。
- ②研究推進組織に関すること。

(組織)

第4条 本会の委員構成は次に掲げるものとする。

宮城県教育委員会代表者
仙台市教育委員会代表者
宮城県小学校長会会長
仙台市小学校長会会長
宮城県中学校長会会長
仙台市中学校長会会長
宮城県高等学校長協会会長
宮城県連合小学校教育研究会会長
宮城県連合中学校教育研究会会長

宮城県連合小学校特別活動研究会会長
宮城県連合中学校特別活動研究会会長
宮城県連合小学校生活・総合研究会会長
仙台市中学校総合的な学習研究会会長
宮城県連合小学校国語研究会会長
宮城県連合中学校国語研究会会長
仙台市中学校国語研究会会長
宮城県内の大学の代表者
在仙の日本新聞協会加盟社の代表者

(任期)

第5条 委員の任期は2年とし、再任を妨げない。

(会長・副会長・監事)

- 第6条
- 1 本会に、会長1名、副会長5名、監事1名を置く。
 - 2 会長は委員会を代表し、会務を統括する。
 - 3 副会長は会長が指名する。
 - 4 会長に事故ある時は、副会長がその会務を代理する。
 - 5 監事は会計監査を行う。

(会議)

第7条 本会の会議は、会長が招集し、主宰する。

(顧問)

第8条 本会に次の顧問を置く。

宮城県教育長 仙台市教育長

(推進委員会)

第9条 本会の事業を達成するために、宮城県NIE推進委員会を置く。この会則は別に定める。

(庶務)

- 第10条
- 1 本会の庶務は、宮城県NIE委員会事務局が行う。
 - 2 会計年度は4月1日から翌年3月31日とする。

(報酬)

第11条 本会の会長、副会長及び委員には報酬を支給しない。

(補則)

第12条 この会則に定めるもののほか、本会に必要な事項は別に定める。

付 則 この会則は、平成元年7月7日から施行する。

改正	平成5年7月1日	改正	平成22年6月1日
改正	平成6年6月9日	改正	平成23年7月5日
改正	平成16年2月27日	改正	平成24年6月5日
改正	平成18年2月15日	改正	平成25年6月20日
改正	平成22年2月26日		

(2) 宮城県NIE推進委員会会則

(名称)

第1条 本会は宮城県NIE推進委員会と称する。

(目的)

第2条 本会は、宮城県NIE委員会会則の第2条(目的)を達成するために、次のことを行う。

- ①教科及び領域等における、新聞を教材として活用する実践の研究
- ②児童・生徒の現代社会に対応する情報活用能力の育成

(研究)

第3条 本会は前条の目的を達成するために、次のことについて協議し、研究する。

- ①NIE研究活動の推進
- ②研修会の開催、研究成果の公開及びその表彰
- ③新聞についての諸調査
- ④研究会誌の編集と発行
- ⑤その他の会の目的を達成するために必要なこと

(組織)

第4条 1 本会は、NIEに関心を持ち、加入を希望する教育関係者等で組織する。

2 本会の構成は次の通りとする。

委員長1名、副委員長、運営委員、専門委員、委員、事務局

3 委員長、副委員長を役員とする。

(任期)

第5条 役員、運営委員の任期は1年とする。ただし再任を妨げない。

(委員長)

第6条 1 委員長は別表に基づき、副委員長が輪番でその任にあたる。

2 委員長は委員会を代表し、会務を統括する。

(副委員長)

第7条 1 副委員長は、次に掲げるものとする。

宮城県連合小学校特別活動研究会長、同中学校特別活動研究会長、同小学校生活・総合研究会長、
仙台市中学校総合的な学習研究会長、宮城県連合小学校国語研究会長、同中学校国語研究会長、
仙台市中学校国語研究会長、本会小学校部会長、同中学校部会長、同高等学校部会長、アドバイザー一部会長

2 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるときはその会務を代行する。

(運営委員)

第8条 1 運営委員は、会員の互選により定める。

2 運営委員は、研究活動の運営及び推進を主導する。

(専門委員)

第9条 1 専門委員は、会員の互選により定める。

2 専門委員は、それぞれの所属する研究部門において実践にあたる。

(会議)

第10条 本会の会議は、委員長が招集し、主宰する。

(提携する他の機関)

第11条 本会の目的を達成するために、宮城県NIE委員会と提携する。

(庶務)

第12条 本会の庶務は、宮城県NIE委員会事務局が行う。

(補則)

第13条 この会則に定めるもののほか、本会に必要な事項は別に定める。

付 則 この会則は、平成元年7月7日から施行する。

改正 平成5年6月25日 改正 平成24年6月5日

改正 平成16年2月27日 改正 平成31年2月13日

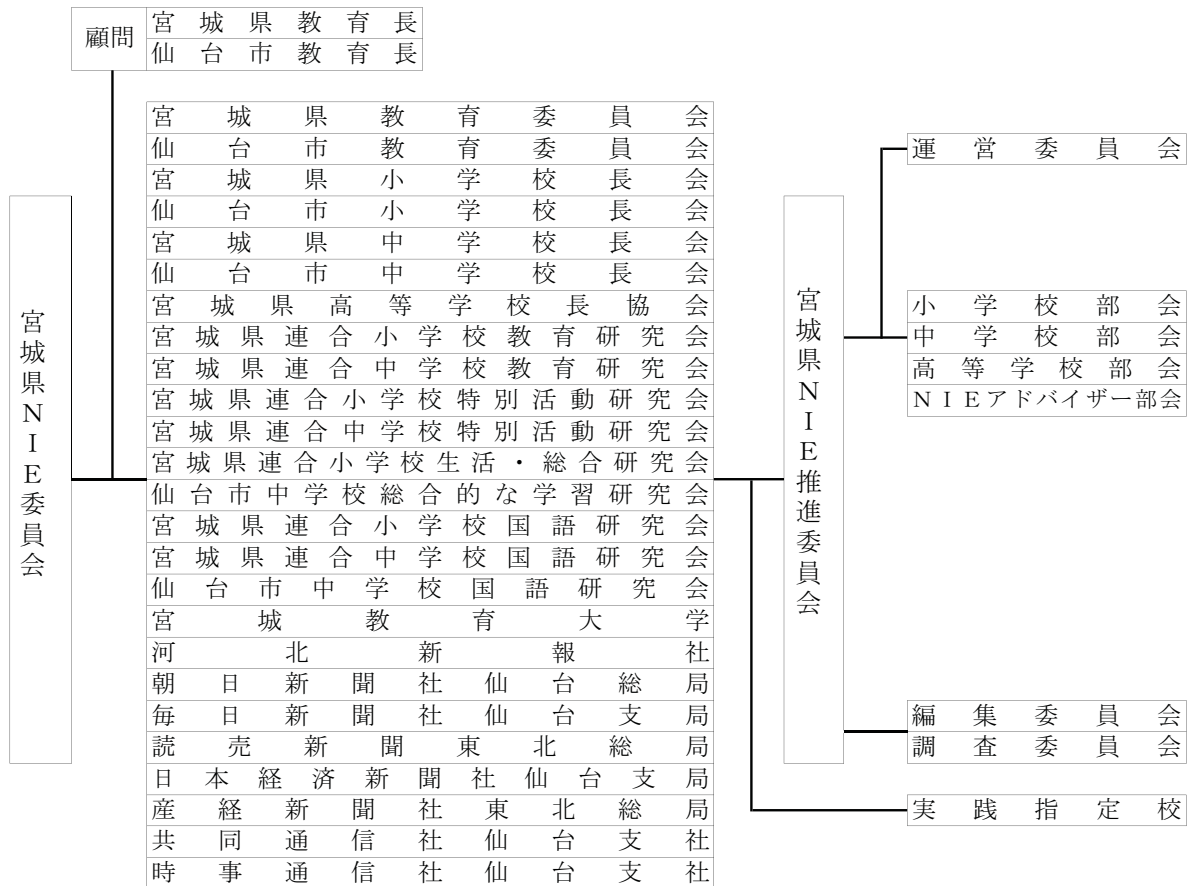
改正 平成20年1月16日 改正 令和3年3月10日

改正 平成23年2月25日

◆内規 *追加

1 宮城県NIE実践指定校は、教員1名以上が本会に加入し、運営委員を務める。

(3) 宮城県NIE委員会 及び 宮城県NIE推進委員会の構成



令和3年度宮城県NIE委員会役員

〈敬称略〉

役職	氏名	所属役職	役職	氏名	所属役職
顧問	伊東昭代	宮城県教育委員会教育長	委員	田中元昭	宮城県連合中学校特別活動研究会長(中山中校長)
顧問	福田洋之	仙台市教育委員会教育長	委員	森直	宮城県連合小学校生活・総合研究会長(寺岡小校長)
会長	長澤裕司	宮城県中学校長会長(名取増田中校長)	委員	菊池浩美	仙台市中学校総合的な学習研究会長(生出中校長)
副会長	佐々木克敬	宮城県高等学校長協会長(仙台第三高校長)	委員	滝川真智子	宮城県連合小学校国語研究会長(立町小校長)
副会長	岩田光世	仙台市中学校長会長(仙台第二中校長)	委員	加藤正弘	宮城県中学校国語研究会長(栗原若柳中校長)
副会長	奥山勉	宮城県小学校長会長(塩釜第一小校長)	委員	布施辰哉	仙台市中学校国語研究会長(八木山中校長)
副会長	白井剛次	仙台市小学校長会長(上杉山通小校長)	委員	児玉忠	宮城教育大学(教授)
副会長	佐藤克弘	河北新報社 防災・教育室長	委員	岡本峰子	朝日新聞社 仙台総局長
委員	遠藤秀樹	宮城県教育庁 高校教育課長	委員	石丸整	毎日新聞社 仙台支局長
委員	千葉睦子	宮城県教育庁 参事兼義務教育課長	委員	池辺英俊	読売新聞 東北総局長
委員	本郷栄治	仙台市教育局 教育指導課長	委員	和佐徹哉	日本経済新聞社 仙台支局長
委員	小松英紀	宮城県連合小学校教育研究会長(気仙沼松岩小校長)	委員	村山雅弥	産経新聞社 東北総局長
委員	阿部勇志	宮城県連合中学校教育研究会長(石巻稲井中校長)	委員	石亀昌郎	共同通信社 仙台支社長
委員	熊谷裕行	宮城県連合小学校特別活動研究会長(新田小校長)	委員・監事	藤野清光	時事通信社 仙台支社長

令和3年度教育委員会担当者

〈敬称略〉

宮城県	上園知明	宮城県教育庁 高校教育課主幹
宮城県	加茂博行	宮城県教育庁 義務教育課課長補佐
仙台市	三浦洋太	仙台市教育局 教育指導課主任指導主事

令和3年度 宮城県NIE推進委員会 運営委員会

(敬称略)

役職	氏名	学校名(職名)・所属	役職
推進委員長	森 直	仙台市立寺岡小学校	校長
副委員長・小副部会長	滝川 真智子	仙台市立立町小学校	校長
副委員長・小副部会長	熊谷 裕行	仙台市立新田小学校	校長
副委員長・中部会長	田中 元昭	仙台市立中山中学校	校長
副委員長・中副部会長	菊池 浩美	仙台市立生出中学校	校長
副委員長・中副部会長	布施 辰哉	仙台市立八木山中学校	校長
副委員長・中副部会長	加藤 正弘	栗原市立若柳中学校	校長
副委員長・小部会長・運委・実践指定校	阿部 謙	仙台市立東仙台小学校	校長
小副部会長・運委	小野寺 治歌	仙台市立南材木町小学校	校長
小副部会長・運委	木越 研司	仙台市立東六番丁小学校	校長
小副部会長・運委	佐藤 正文	仙台市立通町小学校	校長
小副部会長・運委	小野 雄一	仙台市立向山小学校	校長
小副部会長・運委	伊藤 公一	仙台市立幸町南小学校	校長
小副部会長・運委	宮本 利浩	岩沼市立岩沼小学校	校長
小副部会長・運委	千葉 雅弘	名取市立那智が丘小学校	校長
小副部会長・運委	佐藤 卓也	栗原市立瀬峰小学校	校長
小副部会長・運委・実践指定校	佐藤 美紀子	松島町立松島第二小学校	校長
運委	坂本 謙	白石市立大平小学校	教頭
運委	佐藤 慶一	仙台市立泉松陵小学校	
運委・実践指定校	吉岡 健悟	仙台市立東仙台小学校	
運委・実践指定校	鈴木 優太	仙台市立大沢小学校	
運委・実践指定校	秋場 文東	松島町立松島第二小学校	
運委・実践指定校	相澤 洋之	石巻市立湊小学校	
運委・実践指定校	川綱 義朗	東松島市立矢本東小学校	
運委	大場 陽子	多賀城市立山王小学校	教頭
運委	加勢 徳寿	登米市立西郷小学校	教頭
運委	三塚 理恵	登米市立東郷小学校	教頭
運委	安積 章彦	仙台市立中郷小学校	
運委	山本 十和子	仙台市立荒巻小学校	
運委	松本 瑞雅	仙台市立鹿野小学校	
運委	鶴田 由依	仙台市立鶴谷東小学校	
運委	青木 茂	仙台市立大野田小学校	
運委	行本 忠司	仙台市立袋原小学校	
運委	大友 浩美	仙台市立袋原小学校	
運委	山内 崇寛	仙台市立館小学校	
運委	石井 真紀子	仙台市立錦ヶ丘小学校	
運委	松永 秀子	角田市立角田小学校	
運委	門井 菜津子	柴田町立柴田小学校	
運委	鈴木 誠	多賀城市立山王小学校	
運委	千葉 修	大崎市立三本木小学校	
運委	小山 順一	登米市立北方小学校	
運委	武山 知子	南三陸町立伊里前小学校	
運委	大澤 寛子	聖ウルスラ学院英智小・中学校	
中副部会長・運委	工藤 哲	仙台市立東仙台中学校	校長
中副部会長・運委	堀部 登美子	仙台市立北仙台中学校	校長
中副部会長・運委	三塚 靖	仙台市立田子中学校	校長
中副部会長・運委	高橋 有	南三陸町立志津川中学校	校長
運委	菅原 久美	仙台市立折立中学校	
運委	木下 晴子	仙台市立高森中学校	
運委	齋藤 美佳	大崎市立岩出山中学校	
運委・実践指定校	吉田 啓介	角田市立角田中学校	
運委・実践指定校	山家 渉	利府町立利府西中学校	
運委・実践指定校	星 千裕	大崎市立岩出山中学校	
運委・実践指定校	小川 康輔	栗原市立栗原西中学校	
運委・会計・編集委員	進藤 千枝	仙台市立長町中学校	
運委・編集委員	相澤 和男	仙台市立柳生中学校	
運委	丸山 仁	宮城学院中学校	教頭
運委	須藤 浩司	仙台市立七郷中学校	
運委	清野 和俊	仙台市立広陵中学校	
運委	庄司 渉	大崎市立古川北中学校	
副委員長・高部会長・運委・実践指定校	鈴木 理恵	仙台北城南高等学校	
運委	三嶋 廣人	宮城県宮城第一高等学校	
運委・アドバイザー部会長	大槻 欣史	宮城県仙台二華高等学校	
運委・実践指定校	佐々木 貴芳	宮城県泉高等学校	
運委・実践指定校	佐々木 淳一	宮城県仙台第三高等学校	

役職	氏名	学校名(職名)・所属	役職
運委	浅水 啓一郎	宮城県涌谷高等学校	教頭
運委	高瀬 琢弥	宮城県気仙沼高等学校	教頭
運委	木村 誠	宮城県仙台南高等学校	
運委	佐藤 雅信	宮城県宮城広瀬高等学校	
運委	穀田 長彦	宮城県宮城広瀬高等学校	
運委	平居 高志	宮城県塩釜高等学校	
運委	内田 元	宮城県多賀城高等学校	
運委	小林 治	宮城県名取高等学校	
運委	萱沼 俊一	宮城県白石工業高等学校	
運委	幸野 久嗣	宮城県多賀城高等学校	
運委	柴田 隆一	東北学院高等学校 教育研究部	
運委	加藤 寿	東北学院高等学校	
運委	斎田 淳一	青葉区中央市民センター	主査兼社会教育主事
運委	山家 優子	東部教育事務所	指導主事

NIEアドバイザー

氏名	学校名(職名)・所属	役職
阿部 謙	仙台市立東仙台小学校	校長
坂本 謙	白石市立大平小学校	教頭
佐藤 慶一	仙台市立泉松陵小学校	
菅原 久美	仙台市立折立中学校	
木下 晴子	仙台市立高森中学校	
齋藤 美佳	大崎市立岩出山中学校	
鈴木 理恵	仙台北城南高等学校	
三嶋 廣人	宮城県宮城第一高等学校	
大槻 欣史	宮城県仙台二華高等学校	
中辻 正樹	福室市民センター福室児童館	館長

宮城県NIE事務局

氏名	所属	役職
佐藤 克弘	河北新報社防災・教育室長	
安野 賢吾	河北新報社防災・教育室部長	事務局長
須藤 宣毅	河北新報社防災・教育室部次長	
渡辺 ゆき	河北新報社防災・教育室	会計
末永 智弘	河北新報社防災・教育室	
丹野 綾子	河北新報社防災・教育室	
伊東 剛	河北新報社防災・教育室	
畠山 厚子	宮城県NIE委員会コーディネーター	
伊藤 純子	河北新報社防災・教育室	
武藤 浩子	河北新報社防災・教育室	

Ⅷ 宮城県NIEの歩み

	組 織	推進委員 (人)	協 力 校 実 践 校	研究グループ 部 会 研 究	授 業 公 開 実 践 発 表 会	研 修 会	集 録 ・ 紀 要 ・ 他
平成元年度	県NIE 委員会・ 推進委員 会設立事 務局河北	小 9 中 17 計 26	○芦口小 ○中野中	○芦口小 ○中・研究グループ ○小・研究グループ			○県研究集録1号
平成2年度		小 22 中 17 計 39	○芦口小 ○中野中	○芦口小 ○中・研究グループ ○小・研究グループ	○芦口小 H2・10 ○八幡小 H2・10 ○中野中 H3・1		○県研究集録2号 ○紀要 芦口小 八幡小
平成3年度	高校部会 発足	小 24 中 26 高 9 計 59	○長町中	○中・研究グループ ○小・研究グループ			○県研究集録3号 ○実践実例集 小グループ1号
平成4年度		小 27 中 22 高 10 計 59	○長町中 ○旭丘小	○中・研究グループ ○小・研究グループ	○長町中 H5・1 ○旭丘小 H5・1	○小学校NIE研修会	○県研究集録4号 ○実践実例集 小グループ2号
平成5年度	朝日・読売 毎日・共同 時事の各社 加盟	小 56 中 30 高 16 計 102	○長町中 ○旭丘小 ○折立小 ○八軒中	○中・研究グループ ○小・研究グループ	○八軒中 H5・10 ○長町中 H6・1 ○旭丘小 H6・2	○小・中学校NIE研修会	○県研究集録5号 ○実践実例集 小グループ3号
平成6年度	日経・産経 の各社加盟	小 68 中 49 高 18 他 1 計 136	○折立小 ○上杉山通小 (バ イ ョ ッ 校) ○八軒中 ○向陽台中 (バ イ ョ ッ 校) ○泉高 (バ イ ョ ッ 校)	○中・研究グループ ○小・研究グループ	○八軒中 H6・10 ○泉高 H6・11 ○折立小 H7・2	○小・中・高校NIE研修会	○県研究集録6号 ○紀要 折立小 ○実践実例集 小グループ4号 中NIE部1号 ○みやぎNIEだより1. 2. 3号
平成7年度		小 105 中 47 高 19 他 5 計 176	○上杉山通小 (バ イ ョ ッ 校) ○向陽台中 (バ イ ョ ッ 校) ○袋原小 ○茂庭台中 ○泉高 (バ イ ョ ッ 校)	○小・中・高部会の 研究活動	○向陽台中 H7・12 ○上杉山通小 H8・1	○宮城県NIE研修会 ○地区研修会(古川) ○地区研修会(七ヶ浜)	○県研究集録7号 ○紀要 上杉山通小 ○実践実例集 小学校部会5号 中学校部会12号 ○みやぎNIEだより4. 5号
平成8年度		小 113 中 54 高 22 他 7 計 196	○袋原小 ○上杉山通小 ○将監小 ○古川一小 ○茂庭台中 ○生出中 ○宮中 ○仙台二高 ○東北学院高	○小・中・高部会の 研究活動 (授業研究)	○茂庭台中 H8・10 ○上杉山通小 H8・10 ○桜丘中 H8・11 ○将監小 H9・1 ○袋原小 H9・2	○宮城県NIE研修会 (仙台市) ○地区研修会(白石二小) ○地区研修会(石巻・住吉小)	○県研究集録8号 ○紀要 袋原小 ○実践実例集 小学校部会6号 ○みやぎNIEだより 6. 7. 8. 9号
平成9年度		小 122 中 60 高 28 他 7 計 217	○将監小 ○古川一小 ○桂小 ○大鷹沢小 ○生出中 ○宮中 ○蒲町中 ○仙台二高 ○東北学院高	○小・中・高部会の 研究活動	○将監小 H9・11 ○桂小 H10・2	○宮城県NIE研修会 (常盤木学園高) ○地区研修会(大鷹沢小) ○地区研修会(石巻中) ○中・高部会研修会(田子中)	○県研究集録9号 ○紀要 将監小 ○みやぎNIEだより 10. 11. 12. 13号
平成10年度		小 132 中 61 高 27 他 7 計 227	○桂小 ○大鷹沢小 ○女川四小 ○蒲町中 ○七郷中 ○金ヶ瀬中 ○塩竈二中 ○仙台南高 ○常盤木学園高	○小・中・高部会の 研究活動	○女川四小 H10・5 (授業公開) ○桂小 H10・11 (授業公開) ○常盤木学園高 H10・11 ○大鷹沢小 H11・1 (授業公開)	○第3回NIE全国大会 (バ ッ ク SENDAI) ○地区研修会(稲井小) ○中・高部会研修会(七郷中) ○小部会研修会(桂小)	○県研究集録10号 ○NIE実践事例集 「やってみよう!NIE」 小学校部会 ○みやぎNIEだより 14. 15. 16. 17号
平成11年度		小 132 中 60 高 28 他 10 計 230	○女川四小 ○東長町小 ○しらかし台小 ○七郷中 ○金ヶ瀬中 ○塩竈二中 ○山田中 ○仙台南高 ○常盤木学園高	○小・中・高部会の 研究活動 (実践発表・授業 研究・プロジェ クトチームの 研究)	○常盤木学園高H11・11 (授業公開) ○しらかし台小H11・11 (授業公開) ○女川四小H11・11 (授業公開) ○七郷中 H11・12・1 (授業公開)	○宮城県NIE研修会 ○小部会プロジェクト提案 ○地区研修会(蛇田小) ○地区研修会(金ヶ瀬中) ○中部会授業研究会(七郷中) ○小部会実践発表会(東長町小)	○県研究集録11号 ○みやぎNIEだより 18・19・20・21号

	組 織	推進委員 (人)	協 力 校 実 践 校	研究グループ 部 会 研 究	授 業 公 開 実 践 発 表 会	研 修 会	集 録 ・ 紀 要 ・ 他
平成12年度		小 128 中 60 高 31 他 13 計 232	○東長町小 ○大沢小 ○しらかし台小 ○蛇田小 ○山田中 ○秋保中 ○明成高 ○仙台向山高 ○蔵王高	○小・中・高部会の 研究活動 (実践発表・授業 研究・プロジェ クトチームの 研究)	○しらかし台小 H12・11 (授業公開) ○秋保中 H12・11 (授業公開) ○東長町小 H13・11 (授業公開)	○小部会研修会 (大沢小) (データベース活用) ○宮城県NIE研修会 (八木山小) ○地区研修会 (しらかし台小) ○地区研修会 (蛇田小)	○県研究集録12号 ○みやぎNIEだより 22・23・24・25号
平成13年度		小 128 中 61 高 34 他 16 計 239	○大沢小 ○蛇田小 ○月見ヶ丘小 ○秋保中 ○塩竈一中 ○明成高 ○仙台向山高 ○蔵王高 ○仙台函南萩陵高	○小・中・高部会の 研究活動	○仙台向山高 H13・10 (授業公開) ○明成高 H13・12 (授業公開)	○宮城県NIE研修会 (明成高) ○地区研修会 (蛇田小) ○地区研修会 (塩竈一中)	○県研究集録13号 ○みやぎNIEだより 26・27・28・29号
平成14年度		小 129 中 62 高 34 他 14 計 239	○月見ヶ丘小 ○逢隈小 ○小野小 ○塩竈一中 ○将監中 ○筆甫中 ○東北朝鮮学校 ○女川高 ○仙台函南萩陵高	○小・中・高部会の 研究活動 「NIEおしゃべり広場」 「インターネット活用」 中・高部会「公開講演会」 (H14・12・3)		○宮城県NIE研修会 (河北新報社) H14・11・7 ○地区研修会 (大河原) ○地区研修会 (石巻古川)	○県研究集録14号 ○みやぎNIEだより 30・31・32・33号
平成15年度		小 129 中 53 高 34 他 14 計 230	○小野小 ○逢隈小 ○嵯峨立小 ○将監中 ○筆甫中 ○五橋中 ○東北朝鮮学校 ○女川高 ○仙台北百合学 園中・高	○小・中・高部会の 研究活動		○宮城県NIE研究大会 (青葉体育館) H15・8・20 ○地区研修会 (逢隈小) ○地区研修会 (鳴瀬町中央公民館)	○県研究集録15号 ○みやぎNIEだより 34・35・36・37号
平成16年度		小 124 中 57 高 31 他 11 計 223	○嵯峨立小 ○五橋中 ○仙台北百合学 園中・高 ○越河小 ○広瀬小 ○幸町中 ○田尻中 ○仙台商高 ○米山高	○小・中・高部会特 別研究部会の研究 活動	○五橋中 (授業公開) H16・11・2	○宮城県NIE研究大会 H16・11・2 (五橋中) ○地区研修会 (白石市中央公 民館) ○地区研修会 (田尻中)	○県研究集録16号 ○みやぎNIEだより 38・39・40・41号
平成17年度		小 123 中 54 高 28 他 12 計 217	○越河小 ○広瀬小 ○幸町中 ○田尻中 ○仙台商高 ○米山高 ○栗生小 ○金ヶ瀬小 ○西山中 ○大河原中 ○泉館山高 ○東北朝鮮学校	○小・中・高部会特 別研究部会の研究 活動 ○小学校部会授業 研究 H18・2・10 (鹿野小)	○仙台北百合学 園中・高 (授業公開) H17・11・9	○宮城県NIE研究大会 H17・11・9 (仙台北百合学園) ○地区研修会 (田尻中) ○地区研修会 (大河原中)	○県研究集録17号 ○みやぎNIEだより 42・43・44・45号
平成18年度		小 125 中 53 高 28 他 11 計 217	○栗生小 ○金ヶ瀬小 ○西山中 ○大河原中 ○泉館山高 ○本吉・大谷小 ○東北朝鮮学校 ○南中山中 ○仙台・中田中 ○大沢中 ○白石南中 ○唐桑中	○小・中・高部会特 別研究部会の研究 活動 ○小学校部会授業 研究 H18・12・6 (原町小)	○南中山中 (授業公開) H18・11・9	○宮城県NIE研究大会 H18・11・9 (仙台市立南中山中) ○地区研修会 (大谷中) ○地区研修会 (大河原中)	○県研究集録18号 ○みやぎNIEだより 46・47・48・49号
平成19年度		小 124 中 52 高 27 他 10 計 213	○本吉・大谷小 ○南中山中 ○仙台・中田中 ○白石南中 ○大沢中 ○唐桑中 ○鹿野小 ○涌谷一小 ○鶴谷中 ○五城中 ○尚綱学院 女子中・高	○小・中・高部会特 別研究部会の研究 活動	○黒松小 (授業公開) H19・10・3	○宮城県NIE研究大会 H19・10・3 (仙台市立黒松小) ○地区研修会 (大谷中) ○地区研修会 (涌谷第一小)	○県研究集録19号 ○みやぎNIEだより 50・51・52・53号
平成20年度		小 126 中 53 高 28 他 8 計 215	○鹿野小 ○涌谷一小 ○鶴谷中 ○五城中 ○尚綱学院中・高 ○横山小 ○亙理小 ○成田中 ○生出中 ○向陽台中 ○常盤木学園高 ○大沢中 (奨励校)	○小・中・高部会特 別研究部会の研究 活動	○大沢中学校 (授業公開) H20・11・17 ○涌谷第一小 (授業公開) H21・1・22	○宮城県NIE研究大会 H20・11・17 (仙台市立大沢中) ○地区研修会 (富谷成田中) ○地区研修会 (亙理図書館)	○県研究集録20号 ○みやぎNIEだより 54・55・56・57号

	組 織	推進委員 (人)	協 力 校 実 践 校	研究グループ 部 会 研 究	授 業 公 開 実 践 発 表 会	研 修 会	集 録 ・ 紀 要 ・ 他
平成21年度		小 140 中 54 高 23 他 10 計 227	○横山小 ○亘理小 ○成田中 ○生出中 ○向陽台中 ○常盤水学園高 ○榴岡小 ○館小 ○吉田小 ○河南東中 ○川崎中 ○涌谷一小 (奨励校)	○小・中・高部会特 別研究部会の研究 活動	○榴岡小 (授業公開) H21.11.25 ○旭丘小 (授業公開) H21.12.10	○宮城県NIE研究大会 H21.11.25 (仙台市立榴岡小) ○地区研修会(石巻河南東中) ○小部会研究交流会(旭丘小)	○県研究集録21号 ○みやぎNIEだより 58・59・60・61号
平成22年度	宮教大加盟 高校長協会 加盟	小 121 中 50 高 18 大 4 他 12 計 205	○榴岡小 ○館小 ○吉田小 ○河南東中 ○川崎中 ○古川第三小 ○塩竈第三小 ○大河原小 ○高森中 ○横山小 ○仙台第一高 (奨励校)	○小・中・高部会 研究活動	南小泉中 (授業公開) H22.11.11 蒲町小 (授業公開) H22.11.26	○宮城県NIE研究大会 H22.11.11 (仙台市若林区文化センター) ○地区研修会(塩竈第三小) ○小部会研究交流会(蒲町小)	○県研究集録22号 ○みやぎNIEだより 62・63・64・65・66号
平成23年度	小学校国語 研究会加盟	小 120 中 50 高 17 大 4 他 14 計 205	○古川第三小 ○大河原小 ○塩竈第三小 ○高森中 ○仙台第一高 ○小牛田小 ○東宮城野小 ○台原中 ○八乙女中 ○石巻北高 ○東北学院 ○榴岡小 榴ヶ岡高 (奨励校) ○泉高	○小・中・高部会 研究活動	○榴岡小 (授業公開) H23.10.18 ○東宮城野小 (授業公開) H23.12.7 ○大河原小 (授業公開) H24.1.24 ○古川第三小 (授業公開) H24.2.23	○宮城県NIE研究大会 H23.12.7 (仙台市立東宮城野小) ○宮城県NIE地区研修会 H23.8.17 (河北新報社)	○県研究集録23号 ○みやぎNIEだより 67・68・69・70号
平成24年度	宮城県中学 校国語研究 会加盟	小 114 中 51 高 16 大 4 他 15 計 200	○東宮城野小 ○小牛田小 ○台原中 ○八乙女中 ○東北学院 ○石巻北高 榴ヶ岡高 ○泉高 ○北中山小 ○吉岡小 ○東郷小 ○古川東中 ○水産高 ○大河原小 (奨励校)	○小・中・高部会 研究活動	○八乙女中 (授業公開) H24.11.9 ○小牛田小 (授業公開) H24.11.28 ○北六番丁小 (授業公開) H25.1.16	○宮城県NIE研究大会 H24.11.9 (仙台市立八乙女中) ○地区研修会(大和吉岡小) ○小部会研究交流会(北六小) ○公開実践発表会(協力校) (河北新報社)	○東北・北海道地区 NIEアドバイザー会議 H24.9.22 (河北新報社) ○県研究集録24号 ○みやぎNIEだより 71・72・73・74号
平成25年度		小 111 中 46 高 17 大 5 他 12 計 191	○北中山小 ○吉岡小 ○東郷小 ○古川東中 ○宮城水産高 ○荒町小 ○古川二小 ○岩沼小 ○聖ウルスラ ○富沢中 学院英智小中 ○東北学院高 ○八乙女中(奨励校) ○小牛田小(奨励校)	○小・中・高部会 研究活動	○八乙女中(自主公開) H25.11.8 ○小牛田小(自主公開) H25.11.14 ○東郷小(自主公開) 2014/2/13	○宮城県NIE研究大会 H25.11.22 (仙台市立北中山小) ○地区研修会(吉野作造記念館) ○小部会研究交流会(郡山小) ○公開実践発表会 H26.2.20 (河北新報社)	○東北・北海道地区 NIEアドバイザー会議 H25.9.21 (岩手県一関市) ○県研究集録25号 ○みやぎNIEだより 75・76・77・78号
平成26年度		小 115 中 49 高 19 大 5 他 14 計 202	○荒町小 ○古川二小 ○岩沼小 ○富沢中 ○聖ウルスラ ○東北学院高 学院英智小中 ○松ヶ浜小 ○田子小 ○蔵王：宮中 ○仙台青陵中 ○多賀城高 ○吉岡小(奨励校) ○東郷小(奨励校)	○小・中・高部会 研究活動 ※小学校部会： 5年国語科の 提案授業実践	○富沢中(授業公開) H26.11.18	○宮城県NIE研究大会 H26.11.18 (仙台市立富沢中) ○地区研修会(七ヶ浜国際村) H26.8.18 () ○小部会提案授業①(泉松陵小) ○小部会提案授業②(七北田小)	○東北・北海道地区 NIEアドバイザー会議 H26.9.20 ○実践報告集26号 ○みやぎNIEだより 79・80・81・82号 ○日本NIE学会(東北福祉大)
平成27年度		小 106 中 46 高 18 大 5 他 11 計 186	○松ヶ浜小 ○田子小 ○蔵王：宮中 ○多賀城高 ○仙台青陵中 ○塩竈一小 ○上沼小 ○中野栄小 ○七北田小 ○利府西中 ○東北学院高 ○宮城学院中 (奨励校)	○小・中・高部会 研究活動 ・小学校部会 5年国語科の提案授業実践 ・高校部会 新聞社見学 英語科授業実践 講演会の実施	○田子小(授業公開) ○5年国語科提案授業の 公開(運営委員在籍校) ○仙台青陵中等教育学校の 実践発表会	○宮城県NIE研究大会 H27.12.2 (仙台市立田子小) ○地区研修会(塩竈第一小) ○小部会提案授業公開 ※14校で実施 ○高部会実践発表会	○東北・北海道地区 NIEアドバイザー会議 H27.10.3 (北海道新聞社) ○実践報告集27号 ○みやぎNIEだより 83・84・85・86号
平成28年度		小 98 中 41 高 20 大 5 他 6 計 170	○塩竈一小 ○上沼小 ○中野栄小 ○七北田小 ○利府西中 ○宮城学院中 ○船岡小 ○柴田小 ○気仙沼高 ○聖和学園高 ○仙台城南高	○小・中・高部会 研究活動 ・小学校部会 5年国語科の提案授業実践 ・高校部会 新聞社見学(河北新報社)	○宮城学院中の実践報告 ○登米市立上沼小学校の 授業公開(5年) ○仙台城南高のICT公開 (NIEとの関連)	○宮城県NIE研究大会 H28.11.9 (宮城学院中) ○地区研修会(柴田小) ○七北田小提案授業 ○上沼小提案授業	○東北・北海道地区 NIEアドバイザー会議 (福島民報社)2016/9/24 ○実践報告集28号 ○みやぎNIEだより 87・88・89・90号

	組 織	推進委員 (人)	協 力 校 実 践 校	研究グループ 部 会 研 究	授 業 公 開 実 践 発 表 会	研 修 会	集 録 ・ 紀 要 ・ 他
平成 29 年 度		小 87 中 39 高 19 大 5 他 11 計 161	○七北田小 ○船岡小 ○宮城学院中 ○柴田小 ○気仙沼高 ○聖和学園高 ○仙台城南高 ○八木山小 ○豊里小・中 ○仙台三桜高	○小・中・高部会研究活動 ・小学校部会 「新聞読み比べ」の単元で 1人1紙を持たせ授業実践 (提供3658部) ・高校部会 講演会(河北新報社)	○仙台城南高等学校 (授業公開) ○仙台城南高の ICT公開 (NIEとの関連)	○宮城県NIE研究大会 H29.11.8 (仙台城南高等学校) ○地区研修会(豊里小・中)	○東北・北海道地区 NIEアドバイザー会議 H29.9.30 (山形新聞社) ○実践報告集29号 ○みやぎNIEだより 91・92・93・94号
平成 30 年 度		小 87 中 39 高 20 大 5 他 11 計 162	○柴田小 ○豊里小 ○気仙沼高 ○八木山小 ○仙台城南高 ○館小 ○豊里中 ○戸倉小 ○仙台三桜高 ○宮城広瀬高 学院英智小中	○小・中・高部会研究活動 ・小学校部会 「新聞読み比べ」の単元で 1人1紙を持たせ授業実践 (提供3684部) ・高校部会 実践報告講演会(河北新報社)	○宮城県仙台三桜高等学校 (授業公開)	○宮城県NIE研究大会 H30.11.7 (宮城県仙台三桜高等学校) ○地区研修会(戸倉小)	○実践報告集30号 ○みやぎNIEだより 95・96・97号
令 和 元 年 度		小 76 中 36 高 25 大 5 他 13 計 162	○泉松陵小 ○戸倉小 ○長命ヶ丘小 ○館小 ○聖ウルスラ学院○岩出山中 英智小・中学校 ○宮城広瀬高 ○仙台三桜高 ○多賀城高 ○仙台城南高 ○名取高	○小・中・高部会研究活動 ・小学校部会 「新聞読み比べ」の単元で 1人1紙を持たせ授業実践 ・中学校部会 研修会(七郷中) ・高校部会 講演会・研修会	○県大会における実践発表 館小・岩出山中・広瀬高 ○パネルディスカッション ○講演会(東北大加齢医 学研究所) 瀧靖之教授 ○30周年記念座談会	○宮城県NIE研究大会(河北新報社) R1.12.20 ○地区研修会(岩出山中)	○実践報告書31号 ○みやぎNIEだより 98・99・100号
令 和 2 年 度		小 69 中 34 高 26 大 5 他 10 計 144	○泉松陵小 ○湊小 ○長命ヶ丘小 ○松島第二小 ○岩出山中 ○東仙台小 ○名取高 ○角田中 ○泉高 ○多賀城高 ○仙台城南高 ○名取高 ○宮城広瀬高 (独自校)	○小・中・高部会研究活動 ・小学校部会 「新聞読み比べ」の単元で 1人1紙を持たせ授業実践 ・中学校部会 ・高校部会 県研究大会共催	○県研究大会 (オンラインによる) 児童・生徒による意見交換会 湊小・泉松陵小・岩出山中 仙台城南高・宮城広瀬高 多賀城高・泉高	○宮城県NIE研究大会 R2.12.18 ○地区研修会(角田中) ○NIE研修会(泉松陵小)	○宮城NIEだよりは廃止 ○コロナ感染拡大防止のため、第1回 NIE委員会は書面による審議。第2回NIE 委員会はオンラインでの開催。 ○全国大会(東京) オンライン開催 ○実践報告書32号
令 和 3 年 度	アドバイザー 一部会新設	小 71 中 38 高 26 大 4 他 7 計 146	○湊小 ○大沢小 ○松島第二小 ○矢本東小 ○岩出山中 ○東仙台小 ○角田中 ○利府西中 ○泉高 ○栗原西中 ○仙台城南高 ○仙台三高	○小・中・高部会研究活動 ・小学校部会 「新聞読み比べ」の単元で 1人1紙を持たせ授業実践 ・中学校部会 ・高校部会「研修会」	○県研究大会 (オンラインによる) 児童・生徒による意見交換会 湊小・大沢小・矢本東小 角田中・利府西中・岩出山中 仙台城南高・泉高	○宮城県NIE研究大会 R3.12.9 ○地区研修会(矢本東小) R3.12.17	○コロナ感染拡大防止のため、第1回 NIE委員会は書面による審議。第2回NIE 委員会はオンラインでの開催。 ○全国大会(札幌) オンラインでの開催 ○実践報告書33号

Ⅸ 編集後記

「宮城県NIE委員会実践報告書第33号」をお届けいたします。ご多用の中、原稿執筆をお引き受けいただきました各学校の先生方、関係の皆様にご感謝申し上げます。

コロナ禍で教育活動がさまざまな制約を受ける中での実践指定校でのNIE活動は多くのご苦勞があったことと推察申し上げます。その中で、宮城県NIE研究大会の報告、各学校での実践報告、全国大会の報告など、盛りだくさんの内容となり読み応えがある報告書となっております。

今年度の実践報告では、SDGsを切り口としたNIE活動が多く報告されています。SDGsとNIEが、とても相性が良いことがわかるかと思えます。また、県大会や全国大会がオンライン開催となり、多くの児童・生徒の皆さんや全国のNIE活動に熱心に取り組んでいられる先生方、報道関係の方々とは直に意見交換や交流を深めることができなくなりました。しかし、臆することなくオンラインでの発表や意見交換する児童・生徒の皆さんに今後の新しい活動の息吹を感じざるを得ません。コロナ禍の中GIGAスクールの端末機の良さを生かしながら、オンライン交流やデジタル新聞の活用などこれからの新しいNIEを模索する時期にさしかかっているのではないのでしょうか。

「新聞をよく読む子は、読解力が優れている」とのことから、文部科学省も小学校は2紙、中学校は3紙、高校は5紙まで、学校に新聞を置くことを決めています。AIが発達してもいくらデジタル化が進んでも「不変なもの」「かわらないもの」を新聞の中に見つけだしていきたいものです。「新聞は社会の縮図」。その縮図の中から、かわらない輝きを児童・生徒、多くのNIEを実践なさる先生方とともに探し出していきたいでしょう。

NIEにおける一人一台のクロームブックの活用や、異校交流に最適なオンライン会議、SDGsとNIEの関連など、これからの活動に対して多くの示唆に富むこの実践報告書を、今後の活動の参考にさせていただきたいと思えます。

新しい活動の方向性を模索する日々はこれからも続くかと思えますが、この報告書を道しるべとし、さらなるNIEの発展を祈念し編集後記といたします。

仙台市立長町中学校 進藤 千枝

<編集委員>

委員長 進藤 千枝 (仙台市立長町中学校)
委員 青木 茂 (仙台市立大野田小学校)
秋場 文東 (松島町立松島第二小学校)
相澤 和男 (仙台市立柳生中学校)
鈴木 理恵 (仙台城南高等学校)

<事務局>

宮城県NIE委員会副会長
佐藤 克弘
(河北新報社編集局次長兼防災・教育室長)
事務局長 安野 賢吾
(河北新報社防災・教育部長)
事務局 須藤 宣毅
(河北新報社防災・教育部次長)
渡辺 ゆき
(河北新報社防災・教育部主任)
末永 智弘
(河北新報社防災・教育部主任)
丹野 綾子
(河北新報社防災・教育部主任)
伊藤 純子
(河北新報社防災・教育部)
武藤 浩子
(河北新報社防災・教育部)

畠山 厚子
(宮城県NIE委員会コーディネーター)

NIE実践報告書<第33号>

令和4年2月発行

編集 宮城県NIE推進委員会
発行 宮城県NIE委員会
事務局 宮城県NIE委員会事務局
仙台市青葉区五橋一丁目2-28
(河北新報社内)
TEL. 022-211-1331
FAX. 022-211-1339
印刷 東北紙工株式会社
仙台市若林区中倉1-13-1
TEL. 022-231-2141